

忍びの王

焼肉定食

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

八重樫流裏道場

高校一年生で引き継いだ少年原口快斗は男子生徒の人望を集めてクラスの二代トップとして人気を集めていた。

幼馴染が二人と狂った同居人、そして高校生のクラスメイトを引き連れ異世界に転移する

そしてそこでステータスを開くと

天職 王

と書かれてあった。

ここではweb版と書籍版の混合小説となっております。原作前に少しかかりますがご了承ください。

ネタバレや原作改変、オリキャラが含まれています。それでもいいって人だけご覧ください。

目次

番外編

恋の始まり

原作前

出会い

忍者やしき

八重檉流

入学式

香織のために

同居人

原作開始 一巻〜三巻

最後の日常

異世界

ステータス

王宮にて

オルクス大迷宮

撤退戦

暗躍

ベヒモス

王都への帰還

帝国の使者

喪失

4〜5巻

最悪の会合

魔人族

1

4

9

12

16

20

25

29

34

38

46

52

62

71

78

84

89

95

99

105

再び戦場へ



116

虐殺



120

自分の本心



127

親友の応援



135

壊して欲しい少女の応援



150

忍者 快斗



159

6巻

運命のカウントダウン



164

生きるか死ぬかを博打



168

再会そして王都へ



173

救出



182

番外編

恋の始まり

小学生六年生のころだっけか？

香織、雫と同じクラスになり、とあるホームルームの様子

俺たちは小学校最後の学年となり、最後の学芸会で演劇を披露することとなったとある日のこと

「はい。お姫様役に雫ちゃんを推薦します」

「えっ？」

驚いたような雫に俺は少しだけ苦笑してしまう。

雫のお姫様の役は確かに似合っているだろう。

この物語はありふれた騎士とお姫様のラブロマンス物語。

雫が好きそうな物語であったのだ。

「確かに雫なら似合ってそうだな」

「えっ？快斗？」

「うん。雫ちゃんのお姫様姿絶対に可愛いよ!!」

席替えで偶然にも隣になっていた雫が驚いたようにしている。

まあ乙女チックな雫にはあっているんじゃないかな

俺ももちろん賛成だった。

すると俺の友達康太がそれならという

「グッチ。それならグッチが騎士役やれば？」

「へ？俺？」

「グッチの騎士役俺も見てみたいんだけど」

「どうかくん。グッチって今まで裏方でずっと照明とかだったから。

グッチの騎士役見てみたい!!」

俺は少しだけ苦笑い。相変わらず男子の人気は凄まじいものがあり男子はすでに天之河以外は俺に賛成らしい。

「えっ？原口くんより天之河くんでしょ？」

「そうそう騎士役は天之河くんがいいよ!!」

「雫ちゃんがやるんだったら私が騎士役やってみたいな」

最後の香織が騎士役でもめている、でもたった一言で変化するはめになった

「え〜逆でしょ?」

「香織ちゃんがお姫様で、八重樫さんが騎士役でしょ?」

と言いだめるとものすごい騒ぎになっていた

女子は雫、男子は俺。

このままで行けば普通に雫が騎士になるだろう。

「雫。お前どうしたい?」

「……私?」

「そう。結局俺たちがどうこう言ってもお前次第だろ? つーかいつもみたいにやりたい役を譲るは無しな」

「そういう快斗はどうなの?」

「俺? 俺はどっちでもいいな。しばらく道場で大きな大会も昇級テストもないし。…ただ雫のお姫様姿は見てみたいな」

「私の?」

雫は驚いたようにしているがそんなに変か?

「雫って女子なのに女性の役ほとんどやらないじゃん。髪だって伸ばし始めたし絶対綺麗なお姫様になると思うんだよ。それに、香織が姫とかだと不安しかない。絶対に本番で大きなミスやらかす。ドレスを踏んづけて転倒とか」

「ちよつと快斗くんどう言うことかな? かな?」

「「ああ」」

「ちよつとみんな酷くない?」

納得したような全員の様子にどうやら聞こえていたらしい。

聞こえていたかと小さく苦笑する。すると全員がそれじゃあどうするのつと言う顔になる

「つーか香織? お前本当に騎士役でいいの?」

「へ?」

「もし雫がお姫様役をやるんだとしたら衣装係になればお前雫を着せ替え人形にできるぞ?」

「先生私衣装係やりたいです」

「「即答!!」」

まあ、香織はそうするよな。雫のことをもつと可愛くしたい女子の一人だし。センスもいいいな。

「……偶には素直になってもいいんじゃないの？俺も見てみたいっていうのはあるんだけどそれでも雫が一番やりたい役をやるのが一番いいさ。最後の学芸会だし、お姫様役やってみたいんだろ？そんならやってみろよ。ただでさえ男性役ばかりやってきているんだ。衣装も香織だしいいんじゃない？」

「……えっ？快斗は私のお姫様役見てみたいの？」

「俺のイメージだったらお姫様ってしつかりものの綺麗な女性ってイメージだから香織より雫の方が似合っていると思うんだけど」

すると雫は少し考える。そして一呼吸おいて

「私、お姫様役やってみてもいい？」

と小さな声で言った。これでミッション完了だな。

香織の方を見て小さく謝る。すると香織が俺がどうい言う言い回しをしたのかわかったのか首を横に振る。

悪いけど香織が騎士役だと明らかに反対意見がでるからどうしても裏方に回らせたかったのだ。

「……後、騎士役は快斗にやってほしいです」

たった一言の爆弾を添えながら。

原作前

出会い

「グツチ。今日遊ばないか？」

「ごめん。今日道場あるから」

僕は掃除のほうきでゴミをチリトリの中に入れる

「そっか。でも全国大会が近いもんな。すげえな!! 天之河を倒しての全国大会だろ？」

「あのいけ好かないやろうに一本とつたのは最高だったな」

「ざまあ見やがれ」

「あはは。そんなつもりはないんだけど」

僕は苦笑いしてしまう。

一緒にの道場に通っている僕は遠目でしか見ていないんだけど、天之河くんは正直苦手だけどそこまで悪い人ではないと思う。

でもみんなは女子からモテている所為なのかは分からないけど、どうやら目の敵にしている人が多いんだよなあ。

「でも天之河くんは運動や勉強ができてかっこいいからモテるんだと思うよ。僕は剣術を習っているけどそこまで運動も勉強も得意じゃないし。それにそこまでかっこいいわけじゃないし」

「本道理不尽だよなあ。でもグツチには俺たちがいるからな」

「グツチは神様異論は認めん」

「……小林くんそれどこのネタ？」

するとワイワイ話していると僕は時間を見る。時刻は四時を過ぎた辺り。剣道は五時からなのでもうそろそろ道場に向かったほうがいいな。

「ごめん。もう行くよ」

「じゃなくグツチ。掃除手伝ってくれてありがとう」

「本当女子は何やってんだか」

「そうだよなあ。どうせ天之河のところに行っているんじゃないか？」

「本当先生も女子には甘いし。何で俺らばっか」

するとブーブー文句を言っている人たちをほっという僕は急いで帰宅するために帰りの帰路へとつく。

そして教室からでたときに数人の女子が通り過ぎる。

「あの子調子に乗っているよね」

「本当。地味なくせに何で光輝くんのそばにいるんだろう」

この学校は比較的女子が強い傾向にある。

男子に一人スターがいるために一つの塊ができていたのだ。

小学三年生に上がって後少しで夏休みに入ろうとしていた。

夏のせいか未だに陽が高く暑さで学校の外に出るのが嫌になる

そうして階段の近くの教室を通り過ぎようと思った時だった。

「ひっく」

すると泣き声が教室で聞こえてきた。

そこは空き校舎の一室ですでに帰っているはずの教室。明かりも

すでに消えていて、真っ暗な教室から啜り泣く声が聞こえてきただけ

だった。

「……」

足を止めると啜り泣く声が聞こえてくる。

僕はどうしようかと考える前にその教室に入るとそこには一人の

女の子がいた。

泣いているの所為かドアの音が聞こえなかったみたいだった。

しゃがみこんでいるから見えづらいが目からは涙が出ている。

静かにドアを閉じると僕は女の子に近づく

「……どうしたの？」

「……えっ？」

「大丈夫？」

座り込んで話しかけると僕の方が少し高いので上目づかいで

僕を見る

顔を上げる女の子はどこか夕日が背後で涙の雫が輝いている

顔つきは整っていているのもあってとても幻想的に見えてしまい

見とれてしまう

「……誰？」

すると女の子の声で僕は意識を戻す

「僕は三年四組の原口快斗です。」

「快斗くん？」

「うん。君は？」

「……八重樫雫。」

「八重樫さんか。……どこか怪我したの？」

「えっ？」

「いや。八重樫さん泣いていたから。もしかしてどこか痛いのかなって。」

僕が聞くとキョトンとしたように八重樫さんは俺の方を見る

「……八重樫さん？」

「えっ。あつ。うん。何でもないの。」

「……嘘だよね。」

僕は少し強い口調で答える

するときよつとしたような顔をする八重樫さんに少しだけ苦笑してしまう

「お節介かもしれないけど。八重樫さん泣くほどのことがあったんでしょ。さすがにそれで何も無いっていうのはちよつと無理があるかな。まあ大体は分かるけど。」

「えっ？」

「……いつから？」

遠回しに聞いてみる。八重樫ってどこかで聞いたことある名前だとは思ったけど。正直記憶はよくないほうだし思い出せない。

それでもさっきの女子の会話から大体予想はついていた

「……二年生のころから。」

「……そっか。」

僕は少しだけ目を伏せる

しばらく無言が続き僕たちは少し地べたに座りながら少しだけ考える

カチカチっという音が聞こえ僕は少し自重気味に答えた

「僕も同じだよ。今、女子から結構悪口言われているんだ。」

「えっ?」

「……4月から本格的に剣道を始めたんだ。元々お父さんが剣道やっていたからお父さんが入っていた剣道場に入ったんだけど。普段は勝てないんだけどその試合で天之河くんには勝っちゃって。」

「光輝に勝ったの?」

「うん。お父さんに小学生のころから教わっていたから。」

国体っていう大会に出て優勝経験があるらしく、ぼくのお父さんが自慢げにぼくに話してくれる。

「だから不正だとか。卑怯者ってブーイングを浴びせたりしてくるんだ。今も時々不幸の手紙とかロッカーに入っているよ。」

「……酷い。」

「まあ天之河くんはモテるから。それとは違ってぼくは剣道くらいしか特技がないからね。」

実際それだけの違いはあると思っている

「……快斗くんは辛くないの?」

「……まあ、ぼくは友達がいるからね。正直どうでもいいかな。元々ぼくのクラスは男女仲最悪だったし。」

「……でも、私は。」

八重樫さんは少し落ち込んでいます。多分八重樫さんには頼る人がいないのかもしれない

「……八重樫さんさえよければぼくが話を聞くよ。」

「えっ?」

「正直僕は苛めを無くすことはできないし、もしかしたらいじめがひどくなるかもしれない。でも、少し話をすれば楽になると思うんだ。」

「……できないの?」

「正直言ったらなんだけどこういうのって気にしないのが一番だと思っっているんだ。反応したり何か暴力なんかふったら相手の思う壺だし。それに僕はヒーローじゃないからね、なんでもできないよ。余計に八重樫さんのいじめがひどくなるかもしれないね。」

ヒーローじゃない。

その一言を言った途端八重樫さんは少しは驚いていた。

何で苛められたか理解はできる。

でも解決やちゃんとしたことはやっぱり僕にはできないだろう。

自分のことくらい分かっている

「……でも話を聞いたり、八重樫さんの側にいることはできると思うよ。まあ、気休め程度だと思っただけだね。」

「……えっと、どうして?」

「僕が八重樫さんと友達になりたいから。」

正直に答える。

「それだけじゃダメ?」

「……ううん。ダメじゃないけど。」

「そっか。んじゃここにいたら先生に怒られちゃうから帰ろう。」

「うん。」

時間を見るとすでに五時を回っており既に道場には遅刻が確定している

……師範に怒られるだろうなあ

そんなことを思いながら僕は帰路についた

忍者やしき

「……それで何かいうことはあるかね。」

「いえ。少し学校で用があったんで遅れました。」

「……」

剣道場に行くとは師範が腕組みをして僕を待っていた。八重樫さんを家の近くまで送り

師範が呆れたようにみている。

「……はあ。これからは気をつけること。大会前だし、休むことも必要だがそれでも心配するからな。」

「ごめんなさい。」

「いつものとおり走ってきなさい。罰則として一周多めにな。」

師範に頭を下げランニングへと向かう

僕は少しため息を吐く。もう日課になったランニングを少し自分のテンポよりも早く走る。

一応初心者という括りになっており、実力的には全国大会に出場するってことだが、体がまだできてはなく、体力的に不安があることから体力や身体作りが主流になりつつある

ここは剣道場でありながら体術、投擲術など様々なことが学べるらしく、僕はほぼ全部習っているが、裏道場と呼ばれるものもある。だから毎回思うことを毎回同じように声に出す

「師範。ここ、毎回思うんですけど、忍者屋敷ですよ？師範は実は忍者じゃないんですか？」

「何をいうんだ、原口くん。忍なんているわけないだろう。漫画の読みすぎじゃないか？」

「……」

どの口が言うんだと口が裂けても言えなかった。

何事もなかったようにさきつと指導に戻る師範を見ながら俺は今日も師範メニューに戻っていく

忍び歩き 300m×2

体術組手 20セット

手裏剣 1時間

素振り 300回

……もう隠す気ないだろ

愚痴愚痴言っても仕方ないので渋々メニューをこなしながら僕は少しため息をついた。

あれから一年が経ち

「失礼します。八重樫さんいますか。」

早速八重樫さんの教室に訪れていた。

「あつ。快斗くん。」

すると視線を集めてしまう。もう少しこつそり誘いたかったけどもう気にしなくなっていた

「どうしたの?」

「うん。一緒に帰らない?今日道場も休みだから一緒に遊ぼうって思ってた。」

「えっ?」

すると急に主に女子から非難の視線が送られるがガン無視だ

「あつ。もしかして用事あった?」

「えっ。ううん。ないけれど。いいの?」

「別に大丈夫。お小遣いももらったし。」

「あく雫ちゃんばかりずるい。」

すると騒がしい声が聞こえてくる。俺は少し

「もしかして雫ちゃんと遊ぶの?それだったら私も行きたい。」

「……どうせダメって言ってもくるんだろ。」

「ダメなの?」

僕は小さくため息を吐く。

「……八重樫さん次第で。」

「雫ちゃんダメ?」

「うっ。」

すると八重樫さんは少し困ったようにしていたが小さく頷く
「やったあく!!」

「……はあ。」

正直白崎は苦手な部類に入る。人懐っこく誰にも優しくする。だからトラブルを持ってきてそのまま勝手に置いていくことがあった。なお、後始末は全部俺である。

「それじゃあどこ行く?」

「うくん。それじゃあ商店街ブラブラしたらどうかな?」

「まあ。妥当な線。さすがに野球やサッカーとかは女子には辛いだろうしな。」

「何考えているの?」

「さすがに冗談。適当に小物店がどこかに行こうと思っていたからな。」

「……普通だね。私の時はゲームセンターとか本屋なのに。」

と話し始める。これがもう日課になっていた。

八重樫流

あれから数年が経ち

「あの、何度も言いますが絶対忍者ですよ？ねえ。俺もはや人間じゃなくなっている気がするんですが。」

高校一年になる前日、俺は剣術で中学三年間一度も負けることもなく全国三連覇を達成した。忍術だと思われるものは隠れみの術や壁歩き、水蜘蛛などなぜか一緒の裏道場に通っている警察庁の署長に師匠と呼ばれ、部活の後輩に兄貴と言われるまで剣術も忍術も優れるようになっていた

正式な門下生になれる者は多くないが、一度八重樫の門下生となつた者達は職業に関係なく、だいたい殺しにかかってくるような鍛錬が日常となっている。

……まじで平穩が欲しい

「この裏道場、雫にどんだけ隠すの大変なのか分かってますか？一度マジモンの手榴弾を伊○の奴らからくらうようになったんですよ。」

「……それをお前が全て潰したわけなんだが。」
「うっ。」

俺は目を逸らす。会合に付き添った俺は次期盟主として紹介されそして襲撃を受けたんだが、俺は小学生の時からキチガイ軍団で腕を磨いていたのだ。丁寧に腕の関節を外していき涙目になっている黒装束の男たちには師範も少し引いていたが。その話はおいとい

「てか俺が次期当主なんですか？俺自身の許可もとってないと思いますが。」

「だが断らないのだろうか？」

「……まあ、色々ほついたら大変なことになるのは目に見えています。ここまでできたら引き受けるしかないですね。一応表面上は優等生として通ってますからね。裏の事をしたらマジで務所行きだと思いますが。」

「

大丈夫だ。警察はこっち側だ。」

「そういう問題じゃないんだけどなあ。」

多分道場は俺に悪影響しか与えていないとおもう。

雫も家の裏がこんななんだったらマジで大変だろうな

……絶対バレないようにしないと

俺も雫とはある件で同じ道場（雫は気づいていたらしいが）と気づき、その後は普段からもう七年近い付き合いになる。その間俺も雫も香織と光輝が持つてくる面倒事に巻き込まれ、俺は他の人に頭を下げたり平和的解決法を探すという苦労人ポジションとなっていた。雫曰く面倒見の良さで年上にも師匠や兄貴と言われるようになったのだが、俺が物騒な出来事に巻き込まれていることはこの門下生しか知らないであろう

また両親は俺が裏道場を継ぐことに賛成しているらしい

「そういえば雫はどうかね。」

「今日も香織と買い物に行っているんじゃないですか。多分俺が誕生日近いのでその買い出しだと思いますし。」

「……相変わらずべつたりだな。あの面白い子も一緒にいるのか。」

「香織泣きますよ。あいつ。一応表の門下生ですし。」

俺はお茶を飲み少しほっこりする。今の雫は香織のせいもあり、ポニーテールにしておりその過程に香織が関わっているのだ。俺が昔その時に買ったうさぎのヘアゴムを今でも使っている。

一度新しいものを買おうかという前に光輝が誕生日プレゼントか何かの時にヘアゴムを買ったらしいのだが雫曰く『これはお気に入りだから。』といい一回使っているとところを見たくらいでその後は今もうさぎのヘアゴムを使っている。

「便利屋の仕事は余程の仕事じゃないかぎりには原口くんには頼まないつもりだ。高校生になっても雫のことをよろしく頼む。大変申し訳ないがあの子が本音を話すのは君だけなんだ。」

「いや、頼まれなくてもそのつもりですしいつは俺の友達ですから、ちゃんと味方であり続けますよ。」

「そういうことを言っているわけじゃないんだが。」

苦笑する師範もとい虎一さんが呆れたようにしている

雫も大変だなんて言っているけど雫がどうかしたのか？

「そういえば今日の晩御飯はハンバーグなのだが。うちで食べていくか。」

「食べます。」

「相変わらず肉が好きだね原口くんは。」

そんな声が聞こえるとするときとただいまと声が聞こえてくる。

「あれ？快斗いたの？」

「おかえり。雫。」

「え、ええ。ただいま。」

少し照れくさそうに頬を赤く染め俺に挨拶を返してくる

「少し前に来たんだよ。高校の部活と道場の割合を伝えにな。結局中学と同じで半々みたいになると思うけど剣術ではなく体術とかそっちがメインになると思う。多分俺ここの道場継ぐから。そっち側方面も鍛えないといけないし。」

「……もしかしてお父さんに頼まれた？」

「ああ。中学最後の全中の頃から相談はされていたからな。一応3段に昇級したし今年の日本選手権の方にも出てみようと思っている。社会人を相手にした方がいいしな。高校で俺の相手になるやつなんて多分いないだろうし。」

県内の取材に入るほどの実力の俺たちはよく美男美女剣道特集で雑誌の取材に答えていた。というのも雫が真面目すぎるのを俺が程よくほぐしていることが多く、よく記者やカメラマンに付き合っているのか、と聞かれるくらいには仲がいい。

「そっか。部活の全国大会には出ないの？」

「部活の大会も選ぶだろうな。さすがに日本選手権を重視したいし。」

「そっか。」

「そっちは？中学の時は敵なしだったじゃん。」

「私は普通に部活動だけにするわ。お父さんに頼んで道場も顔を見せる程度にしようし。高校で私はやめようと思う。」

「……そっか。」

それは正直寂しい気持ちがあるが仕方がないことだろう

「……そういえば、明日どうする？また突撃モードの香織に付き合うのか？」

「さすがに中学校まで行ってやらないんじゃない。明日はゲームセンターにでも行きましょう。」

「お前ゲーセン好きだよなあ。ペットショップは？」

「行くわ。」

「りよ。それじゃあ飯食ってから帰るし後はお前の部屋でだべるか。」

「……まあいいけど。」

といい隣に立ち歩き始める。その後は適当に話して美味しいハンバーグを食べた後に帰宅した

入学式

「香織何しているの？早く体育館いかないと、入学式始まっちゃうわよ？」

「雫ちゃん。快斗くんも。えへへ。桜に見惚れていたの。なんだかわふわしちやって。」

「確かに。この辺りは満開だよなあ。気持ちが浮ついているのは雫も同じだから安心しとけ。」

「それは快斗もでしょ。」

桜吹雪の舞う中で俺と雫、そして香織は入学式に向かう途中だった「綺麗。」

ふと香織がそう呟くと

「確かに。」

「ええ。本当に綺麗ねえ。」

俺と雫は桜を見て呟く。色鮮やかに咲く桜はどこか自分の気持ちを高揚させるものがあつた

「違うよ。二人が立っていると桜の王子様とお姫様みたいで。」

「つ……つていきなり何をいうのよ。」

「まあ雫は制服も似合っているからなあ。さすがに王子呼びは勘弁してほしいけど。少し大人っぽく見えるよなあ。」

「後からみんな写真撮ろうよ。」

「いいけど。どうせ今日は午前で終わりだしなあ。」

と話しているるとすると急に何か言いたげに香織が雫の方を見る

「いいですか。雫ちゃんよく聞いてください。」

「香織どこのキャラなの？」

「こら真面目に聞く。あのね。雫ちゃんは可愛いです。そしてとっても美人です。なので男の子はみんな放っておかないでしょう。でもね？お父さんが言っていたけど男の子は快斗くん以外はみんな狼さんなのです。だから狼さんに騙されないよう雫ちゃんは自分の可愛さに自覚を持つべきです」

「……香織ブーメランって言葉知っている？」

「飛ばしたら戻ってくるあれだよな。」

「そうよ。今の言葉完全にブーメランよ。」

「……こいつ意味通じないと思うぞ。天然ポワポワな頭をしているしな。」

俺は皮肉を込めた風にいうと

「でも。本当にお前らは自分の人気については自覚持つといた方がいいぞ。俺や龍太郎はあんまりモテないけど中学の時のお前らすごい人気だったんだぞ。俺に紹介してくれて頼んできた先輩もいるくらいだし。正直中学の時の男子の恋人にしたいランキングでお前らダントツでトップ2に入っていたんだから。」

「それは快斗くんもでしょ?」

「あなたが言えることではないと思うわよ。」

ジト目で俺を見る二人に俺は首を傾げる。俺そこまで女子と話したりしたことがないから

「……ん〜でも、確かに二人があまり誰とも付き合うことは想像できないなあ。いつも二人つて一緒にいるし。」

「ああ。まあ雫とはいつの間にか一緒にいるのが当たり前みたいな感じだもんなあ」

三年生になっても結局は変わらず俺と香織、そして雫はほとんど一緒にいることが多く、さらには部活動や道場まで付き合いがあるので俺と雫は1日合わない日がある方が珍しいくらいだ。

「……はあ。」

「どうした?」

「ううん。なんか疎外感があるなあって。」

「……………」

「ほら体育館行こう。遅れちゃうよ。」

首を傾げる俺と雫に気を取り直したように香織言い先に歩き出す

「ええ。そうね。」

「ああ。」

といい俺たちは香織の後に付いていった。

「光輝くん、緊張してないかな？」

「大丈夫でしょ。光輝ってそういうのとは無縁だし。」

「だな。中学でも経験済みだし、無難に済ますだろ。」

「まあ大事にはなるだろうけどな。悪いけど寝るぞ。騒がしくなるだろうしどうせしばらくは再開しないとと思うしな。」

香織の声が漏れるといくつもなく会話が続く

俺は椅子に座りながら校長の話をバックにしてうたた寝を始める

元々うるさいところやかなり寝心地が悪くても眠れるのは八重樫流の裏道場に行ったらそういうスキルがつくのでこういうどうでもいい時は眠る癖がある。

やがて春の暖かな空気に闇に身を任せた直後だった

「快斗くん快斗くん。起きて。あの人が居たの。」

「……ん？」

俺はすぐに目を覚まそうとしたが少し入っていたので香織の声を聞いても少し覚醒が遅れていた

「……どした？」

「それが居たの。あの時の彼が。」

「……」

俺は少し考えそういや、すごい土下座をした中二病の男子を思い出す。

「へえ〜どい。」

「あそこで眠っている人。」

すると後ろの方をすやすやと恐らく天之河の歓声を聞いても眠っていたのだろう。スヤスヤと気持ち良さそうに眠っている大人しそうな男の子がいた。

そしてなぜかポニーテールで顔を纏っている雫の姿も

「……普通だな。もうちよつと痛いじゃないかと思っただけだ。って何で雫がポニテガードしているんだ？」

「……それが」

とかくかくしかじかと説明をする。先生に気づかれないように視線を前に向けているのがポイントだ

そしてすべてを聴き終えた後

「……うん。言い方も悪いしもうちよい声の音量さげようか。」

「……ねえ叱られる時は一緒だよね？」

「おいこら。巻き込む気満々かよ。俺この後輩のフォローしなくちやいけないんだぞ。」

このポニテガードは少々の羞恥心ではなくかなり恥ずかしいときに起こった時に発動するポニテガードだ

今頃穴があつたら入りたい気持ちで一杯なのだろう

「まあ俺も少し話してみたかったし、丁度いいや今度話してみよつと。」

そういう系の友達も探していたし多分仲良くなれると思うしな。

そんなことを思いながら香織の話を聞いていた

香織のために

数週間後

「ハジメくんが構ってくれない。」

「世の男子が聞いたら血涙を流しそうなセリフね。」

「あの、作戦会議を何で俺の部屋で開くんだよ。この後ハジメ来るんだけど。」

急遽乱入してきた幼馴染二人に俺はため息を吐くとそれよといい俺を指をさす

「何で快斗くんが南雲（ハジメ）くんとそんなに仲良くなるの?」

「いや、純粹に興味が出たからだろ俺も男子だし、少しはライトノベルとか読むからな。」

実際結構相性はいいし、元々ある事情によることを気づいているから香織は仲良くなれないんだろうなあつと気づいていた。

「……まさかこんなところに伏兵がいるとは思わなかったよ。」

「伏兵って。てか元々本質的な問題を理解してないからだろ。それさえ理解できればすぐに仲良くなれると思うしな。」

「……どういうこと?」

「それは俺がいうべきではないだろ。まあハジメが流石に困ったら忠告は出すとは思うけどな。」

俺がいうと雫はため息を吐く

「そういえば交友関係に関してはあんたに叶うものはいないか。趣味も多いしね。」

「そういうこと。まあハジメの趣味が知りたいのなら少し貸そうか?俺も結構学園ものなら読んでいるから。」

「……まあ、少しだけ読んでみようかな?」

「八重樫もどうせ読むだろうしお前は恋愛ものかなあ。……これ辺り読みやすいんじゃないかな。」

「そういえば赤い本をよく読んでいますよ?あれは?」

「こいつよく見ているなあ。そう思って少し感心するが」

「あれは結構グロいから女子向けじゃないかな。女子でも読めるラノ

べとかは最近増えてきたし、そっち側を攻めていけばいいんじゃないかな？ 映像作品でも見やすいものがあるし今度レンタルショップで今度見やすい奴借りてこようか？ 流石に高いし」

「いいの？」

「こういうの見る友達はかなり少ないしなあ。俺も結構好きだし」

「まあ前にこっそりソードスキル？ そんな感じのを……………」

「ちよ……………」

俺は雫の口をふさぐ。

「…………あの、黒歴史なんでそれは勘弁してくれ。まあ丁度THUYA TAで学園もののアニメかりて来ているし下で見とけ。俺は今からお菓子の買い出しするから。」

「えっ？ いいの？」

「目を離れた方が突撃しそうで怖いからな。雫に監視してもらったほうがいい」

「…否定できないわね。分かったわ。私たちが今回は非があるからリビング借りるわね」

「いや事務所にして。両親は仕事で山口にいるから」

「は〜い」

一応俺の親父たちの表の仕事は探偵ってことになっている。二人もそのこと

流石に遊んでいる最中に突撃してきた方が迷惑だろうしな

そういうと俺は財布をもって買い出しに行く。

まあ数時間くらいだし、大人しくみているだろう

「…………うう」

「ぐすっ」

「…………やっぱりCLONADにしたの失敗したか？」

久しぶりに見たくなりアフターまで全てレンタルしたのだけど

ハジメと話色々なアニメを見たりしているうちに暗くなり送って行こうと思ったところ、未だに事務所に明かりが付いていたことからもしかしてと思い、ハジメと一緒に探偵事務所に寄ると未だにアニメ

を見ている二人がいた。

「えつと、八重樫さんと白崎さん？」

「ああ。あいつら幼馴染だからな。よくウチに来るんだよ。連絡もな
く。」

「あはは。それが今日だったんだね。」

「てか鍵持っているくせにアニメに夢中になって帰らないな。たく。
後から怒られるの俺なんだぞ。」

俺は少し頭を抱える。特に香織の父親はかなり過保護なので俺が
かなり怒られることになる

「……でも意外だね。二人ともアニメ見るんだ。」

驚いたようにしているハジメだが

「見ねえよ。多分これがはじめてじゃないのか？俺もあいつらにそう
いう文化を見せないように気をつけていたし。」

「……えつ？」

「雫はついだだと思うのだけど香織はお前と仲良くなりたいたいんだつて
さ。俺は知らないけど中学の頃にお前がお婆ちゃん和小さい子供の
ために不良に頭を下げているのをみたらしい。」

「……えつ。あつそういえばそんなことあつたなあ。」

どうやら本気で覚えがあつたらしい。

「強い人が暴力で解決するのは簡単だ。光輝とかよくトラブルに飛び
込んでいって相手の人を倒してるし、まあ俺も説得が無理なら武力で
解決するしかないときもある。弱くても立ち向かえる人は貴重で他
人のために頭を下げられる人はそんなにいない。だから香織はお前
に憧れているんだつてさ。」

俺は秘密にしろと言われてないのを皮切りに少し香織の話したい
理由について話す。

「あはは。少し照れくさいね。」

「まあな。俺や雫からしたら見てないから何やっているのつて思った
し口調からしたら完全に厨二だったしな。でも視線は気になるかも
しれないけど、少し香織のことも少し話し相手になつてくれないか
？」

「えっ?」

俺からで少し頭を下げる

「あいつ珍しいんだよああやって人に興味を示すの。俺も小学校の時から仲がいいんだけど、みんなに優しかった奴だからなあ。特定の誰かに重点をおくことがかなりめずらしいんだよ。元々俺たちで行動することが当たり前だったし、俺と雫くらいじゃないか? 香織が積極的に話しかけるのは。」

「そうなの?」

「ああ。あいつかなり交友関係に関しては受身なんだよ。元々俺と雫の時くらいしか自分から何かするってことはないんじゃないか? ほとんど話しかけられるしな。それか俺の横流しかな。」

「ああ。友達多いもんね。」

基本的香織が話すときは自分からではない。男子の友達が良くも悪くも多いのが俺だ。

基本は俺繋がりで話しかける奴が多いし、俺は別に拒否している訳じゃないので別に構わない

ただ俺と雫の優先度がかなり下がるだけだ

「まあ、だから香織には悪気はないし、多少光輝と他の男子からはやつかみを受けると思う。それでも仲良くしてくれると嬉しいかな。俺は何かあつたら味方につくし。それに俺もせっかくの通じる仲間がいるのは嬉しいしな。」

ハジメはそれがラノベであり漫画やゲームなどのこと言っているんだと分かったんだろう。少し苦笑しているハジメを見る

「うん。いいよ。でも朝は弱いから。」

「土曜の午後辺りに俺の部屋で集まればいいだろ。ゲームも漫画もあるしな。」

「……何でそんなもの持っているの?」

「俺の家族もハジメと同じ趣味なんだよなあ。俺も完全その遺伝だし。」

としばらく話しているとアニメのエンディングが流れ始める

「雫。香織。もう帰れよ。」

「後一話だけ。次最終回だから。」

「……ええ。もう少しだけ待って頂戴。」

「……のめり込みすぎだろ。」

「もう少し待ってようか。僕も久しぶりに見たいし。」

「んじや適当に飯作るから。ついでに飯食ってけ。簡単なものになるけど。」

「あっうん。ありがとう。」

と俺はキッチンへと向かう。

ちなみにこの日を境に毎週土曜日に俺とハジメが進めるアニメやアニメなどのオタク文化に触れることになった二人はどっぷりはまっついていった

……なお、香織の父親に謝罪をしないといけないようになったのは言うまでもない

同居人

「お前何でうちにいるの?」

入学してから半年が経ったある日のこと

部活が終わり家に帰ると家主より早く帰宅している同居人。いや勝手に住み込み始めた奴がすでにソファで寛いでいる学校の同級生がいるのを見てため息を吐く

「いいじゃん。一応僕の家はここってことになっているんだよ?それに毎週僕の家に来るのは面倒くさいでしょ。」

「…いや。確かにそうしたのは俺だし監視して報告書を書くのは俺だけど、最近雫や香織に谷口からジト目で見られるんだぞ。」

「僕は気にしないから大丈夫だよ。それに僕の秘密を話さないって保証もないしね。」

「…お前女子。俺男子。流石に狂っているとはいえ同級生の女子がうちにいるのはまずいんだけど。」

「狂っているって酷いなあ。ただ僕は君のことが好きだけなのに。襲ってもいいよ?」

「…襲うかよバカ。それじゃあお前のとこのクソ野郎と同じじゃねーか。お前は自分のことをもつと大事にしろや。」

俺は少しため息を吐く。

ショートカットの髪に学校ではメガネをかけているのだが今はメガネを外しニヤニヤと笑っていた中村恵里が少し驚いたようにしている。

「……」

「どうしたんだ?」

「い、いや。意外に心配してくれているんだと思ってね。」

「これくらい普通だ。お前は普通じゃない家庭で育ったからだろ。」

「…忍者の君に言われても。」

「……ごめん言ってる俺の家の方がおかしいことに気づいたわ。」

そういえば表が探偵であることに気づき俺は少しため息を吐く

なぜ中村がここにいるのかというと

昨年俺と光輝は道場のランニング中に上半身が大きく欄干の外へとはみ出ている少女を発見し俺も流石に何をするのか分かったので急いで助けにいった。

光輝は覚えがなかったらしいが、俺は警察からの依頼で監視目的、いわゆる虐待の被害者として要注意人物として取り上げられた人物だったのだ。

しつこく事情を尋ねる光輝に、恵里はかなり省略した説明をした。そうしなければ、光輝が放してくれそうになかったからだ。端折りに端折った恵里の説明を聞いた光輝は、こう理解したらしい。

学校で孤立している恵里は、そのことで父親に厳しい躰を受けた。母親に助けを求めたら、母親まで父親と一緒に自分を叱った。味方がいなくて、悲しんだ恵里は自殺しようとした。

……事實はもつと悲惨だと感じていた俺はすぐに冷や汗をかいたが、その光輝が暴走。偶然にも雫がない時だったので光輝は、当時から女の子達を虜にした笑顔と力強さを以て、恵里の頬を両手で挟みながら至近距離で宣言した。

——もう一人じゃない。俺が恵里を守ってやる

言ってしまったのだ。壊れた少女の心に、自分は誰にとっても無価値なのだと理解した直後に「守る」と。いつも通りに。学校で一番人気のある王子様のような男の子から、ある意味、劇的とも言えるシチュエーションで、恵里はそんなことを言われたのだ。

心の底で、ずっと誰かからの愛情を求め続けた幼い少女にとって、その言葉は余りに強烈だった。

しかも、その日、どうにか自殺を思い止まり、母親に追い出されるように学校へ行かされた恵里は、クラスの女子達が次々と明るく自分に話しかけてくるという状況に驚愕し、しかもそれが、光輝の一言でなされたということを知って……有り体に言えば、落ちたわけである。

その後 恵里は、これも全て光輝の——突然あらわれ自分を守ると誓ってくれた王子様のおかげだと確信した。あの日、王子様が自分を救い、変えてくれたのだと。自分は、光輝によつて生まれ変わったの

だと。だから、これからの人生は、輝く光のような彼と共に、同じように光の中を生きていけるのだと。

だけどそう簡単に行くわけがない。

光輝にとつて恵里は、正義のヒーローが助けるべき一人に過ぎなかった。クラスメイトに一言声を掛けて、孤立している恵里と仲良くしてもらえば、それで光輝の救済は終わったのだ。アニメでヒーローによつて助けられた人々が、次の話からは全く出てこないのと同じように、光輝にとつて恵里のことは『既に終わった物語』だった。

だから俺が後始末をしないとイケなくなったのだ

ことが事柄だけに警察や八重樫家の力をフルに使い去年の夏に恵里の母親を逮捕。その時に俺が色々動いていたのがバレ、しばらくはしがらみがあったものの、さらに裏で中村の生活の保障や授業費などを俺が払っていることをバカ師範がバラしたのをきっかけに俺に対象を変えたらしい

そしていつの間にか自分の荷物を少しずつ運んでいき完全に今は住み込んでいる

「……しかし忍者っているんだね。雫ちゃんもくノ一なの？」

「いや、あいつは違うな。というよりも俺が忍者つてことすら知らないし家が忍者屋敷つてことすら知らないんじゃないのかな？」

「……不遇だね。」

「それが俺と雫の運命なんだよ。こういう勝手に持ってくるトラブルに巻き込まれるっていうな。そして後処理は全部俺だし。」

「いやな運命だね。」

「お前もその持つてきたトラブルの一つなんだけどな。」

呆れたようにいうと恵里はそっぽを向き話を逸らすため学校の話にし始める

……まあこれはこれでいつか。

狂った少女が家にいても両親も受け入れているし、何よりも嫌ではない自分がいるのは事実だ

「夕飯作るから手伝えよ。今度薬入れるようならマジで追い出すからな。」

「……チツ。」

「おいてめえ何入れようとした。」

多分媚薬だとは思うが本当に狂っている同居人に問い詰めるところから始まるのだった

原作開始 一巻〜三巻 最後の日常

月曜日。それは一週間の内で最も憂鬱な始まりの日。きっと大多数の人が、これからの一週間に溜息を吐き、前日までの天国を想ってしまう。

朝練が終え俺は教室に向かうと

「あつ。おはよう。快斗。」

「快斗くんおはよう。」

「おはよう快斗くん。」

「よつ。雫は朝剣道場であつただろ？」

と俺に話しかけてくるいつものメンバーの雫と、香織、そして中村恵里の親友（恵里曰く互いに仮面を被っていて本心を見せ合わないので結構気に入っているらしい）の谷口鈴が俺に挨拶をする

と俺は適当に返すと自分の席に座る。すると雫と鈴が近づいてくる

「それとこれとは別よ、恵里は？」

「図書委員だつてさ。今日図書の整理があるから遅れる可能性があるあつて言っていたな。」

「あくやっぱり恵里が遅れること珍しいからね。」

「ハジメくんは？最近結構朝早かったはずだよね？」

「父親の依頼でプログラム打っていたらしいぞ。」

「ああ。いつものね。」

俺がそういうと雫は苦笑している

「おはよう。」

「あつおはようエリリン。」

すると今度は恵里がやってくる。普段は大和撫子タイプで比較的大人しいように見せている。裏の顔に少し呆れながらも全員が話し始める。

高校では比較的俺たちはこのグループでいることが多い。光輝と

龍太郎がいないのはハジメのことをよく思っていないし、元々光輝が香織のことを好きなので嫉妬も混ざっているだろう。

俺もそのことが分かっていているが優先順位は明らかに香織の方に偏っているし、どうやら雫も同じ考えだったらしい。

雫の香織好きも結構度が超えている気がするんだけどな

噂をすると影がさしたのかすると香織待望の人物がやってきた

「よお、キモオタ！ また、徹夜でゲームか？ どうせエロゲでもしてたんだろ？」

「うわっ、キモく。エロゲで徹夜とかマジキモイじゃんく」

どうやらハジメが来たらしくいつものメンバーがため息をはく

「おはようさん。ハジメ。」

「あつ。おはよう。快斗くん。」

俺がす早く挨拶すると檜山たちの顔がうつと嫌な顔をする。

このクラスが二つの派閥に別れていると聞いていい。

一つ目はハジメ否定派。もう一つはハジメのことを気にしないでいたり仲がいいグループだ

「ほれ。頼まれたドリンク。」

「ありがとう。」

そういつて栄養ドリンクをハジメに投げるとハジメはそれをキャッチし飲み始める

「ハジメくん、おはよう！ 今日もギリギリだね。」

「おはよう。南雲くん。」

「おはようく。」

「おはよう。」

いわゆるこれが全員となっている。いつの間にか学校ではこのグループでいるのが当たり前になっていた。

「香織、雫また彼の世話を焼いているのか？ 全く、本当に二人は優しいな」

「全くだぜ、そんなやる気ないヤツにやあ何を言っても無駄と思うけどなあ」

と光輝と龍太郎がこっちにやってくる

「おいこら。俺らのことは無視かよ。」

「…あつ。悪い。てかお前最近影薄くね？」

「…正直な答えありがとう龍太郎。お前後からしばくからな。」
「げっ。」

「てか遠藤よりは薄くないと思う。多分。きつと。」

「えっ？遠藤？」

「「えっ？」」

すると俺以外は首を傾げる。そんな人居たっけ？と言いたげな顔だ。するとほろりと涙を流す遠藤がいた。

「…お前ら。」

「そんな忘れていたはずがないじゃないと思う。」

「そうだよ。ちよつと顔を思い出せなかっただけで。」

「龍太郎くん、鈴。なんの弁解にもなつてないよ。」

恵里のツツコミに俺も頷く。

「？ 光輝くん、なに言ってるの？ 私は、私が南雲くんと話したいから話してるだけだよ？」

ざわつと教室が騒がしくなる。男子達はギリツと歯を鳴らし呪い殺さんばかりにハジメを睨み、檜山達四人組に至っては昼休みにハジメを連れて行く場所の検討を始めている。

「え？…ああ、ホント、香織は優しいよな」

どうやら光輝の中で香織の発言はハジメに気を遣ったと解釈されたようだ。完璧超人なのだが、そのせいか少々自分の正しさを疑わなさ過ぎるという欠点があり、そこが厄介なんだよなあ〜とハジメは現実逃避気味に教室の窓から青空を眺めた。

「…ごめんなさいね？ 二人共悪気はないのだけど…」

「後で言つとくけど悪いな。」

頼みを守っていることに礼をいう俺とこの場で最も人間関係や各人の心情を把握している雫が、こつそりハジメに謝罪する。ハジメはやはり「仕方ない」と肩を竦めて苦笑いするのだった。

そうこうしている内に始業のチャイムが鳴り教師が教室に入ってきた。教室の空気のおかしさには慣れてしまったのか何事もな

うに朝の連絡事項を伝える。そして、いつものようにハジメが夢の世界に旅立ち、当然のように授業が開始された。

「雫サンキュー。」

「ええ。私のやつ作るついでだから別にいいわよ。」

と雫からお弁当を貰うとそれを永山や遠藤、後女子の辻と一緒に食
い始める

「今日も愛妻弁当かよ羨ましい限りだぜ。」

「アホ。幼馴染の弁当だつて。」

「でもお前つて本当に変だよなあ。中村さんの親の都合とはいえ同居
してて、八重樫さんと白崎さんと幼馴染なんだろう？」

「天之河くんや坂上くんとも仲いいしね。」

「運動もできるし勉強はそこまで悪くないもんなあ。」

「雫に教えてもらっている分赤点取るとぶった斬られるからな。」

冗談だと分かっている分全員が笑う。そこには何もなかったあの友
達と呼べる関係があった

「そういや遠藤、お前進路決めた？」

「いや、まだだけど。何で？」

「何でつて進路希望表先週渡されたら？だから大体こいつらは予想
つくけど遠藤はどこ志望なのかって。」

「お前は？」

「八重樫の道場と探偵業を継ぐ予定。」

「二あゝ。」

全員が納得したようにしている

「それじゃあもしかして婿入りとか雫ちゃんが奥さんになったりする
の？」

「いや、それはないな。そんならだったら継いでないし。」

「何でだ？」

「俺もあいつの両親も恋愛ごとに関しては雫に任せてるしな。人に押
し付けられた結婚なんて嫌だと思っし、俺だつて嫌だしな。ちゃんと
幸せになつて欲しいんだよ。それに夢くらいちゃんと叶えさせたい

しな。」

「夢？」

「あいつのプライベートな件になっっているから内緒。」

と話している途中だったが、凍りついた。

光輝を中心に純白に光り輝く円環と幾何学模様が現れたからだ。その異常事態には直ぐに周りの生徒達も気がついた。全員が金縛りにでもあったかのように輝く紋様——俗に言う魔法陣らしきものを注視する。

その魔法陣は徐々に輝きを増していき、一気に教室全体を満たすほどの大きさに拡大した。

自分の足元まで異常が迫って来たことで、ようやく硬直が解け悲鳴を上げる生徒達。未だ教室にいた愛子先生が咄嗟に「皆！ 教室から出て！」と叫んだのと、魔法陣の輝きが爆発したようにカツと光ったのは同時だった。

この事件は、白昼の高校で起きた集団神隠しとして、大いに世間を騒がせるのだが、それはまた別の話。

異世界

両手で顔を庇い、目をギョツと閉じていた俺は、ざわざわと騒ぐ無数の気配を感じてゆっくりと目を開いた。そして、周囲を呆然と見渡す。

まず目に飛び込んできたのは巨大な壁画だった。縦横十メートルはありそうなその壁画には、後光を背負い長い金髪を靡かせうつつらと微笑む中性的な顔立ちの人物が描かれていた。

俺達はその最奥にある台座のような場所の上にいるようだった。周囲より位置が高い。周りにはハジメと同じように呆然と周囲を見渡すクラスメイト達がいた。どうやら、あの時、教室にいた生徒は全員この状況に巻き込まれてしまったようである。

「……冗談じゃねーぞ。」

俺は小さく呟く。

周辺を見ると雫や恵里、ハジメや香織も全員いる。

どうやらハジメは動揺しているのかわからないが他はどうなのか分かっていないようだ

法衣集団の中でも特に豪華で煌びやかな衣装を纏い、高さ三十センチ位ありそうなこれまた細かい意匠の凝らされた烏帽子のような物を被っている七十代くらいの老人が進み出てきた。

「ようこそ、トータスへ。勇者様、そしてご同胞の皆様。歓迎致しますぞ。私は、聖教教会にて教皇の地位に就いておりますイシユタル・ラングバルドと申す者。以後、宜しくお願い致しますぞ」

とそう告げてニツコリと笑う老人に俺は軽く寒気がした

イシユタルの話をもとめるなら戦争に参加してほしいってことだった

人間族と魔人族が何百年も戦争を続けており一時は均衡状態だったが、魔人族による魔物の使役でバランスが崩れ、人類の危機ってことらしい

「あなた方を召喚したのは『エヒト様』です。我々人間族が崇める守護神、聖教教会の唯一神にして、この世界を創られた至上の神。おそらく、エヒト様は悟られたのでしよう。このままでは人間族は滅ぶと。それを回避するためあなた方を喚ばれた。あなた方の世界はこの世界より上位にあり、例外なく強力な力を持っています。召喚が実行される少し前に、エヒト様から神託があつたのですよ。あなた方という『救い』を送ると。あなた方には是非その力を発揮し、『エヒト様』の御意志の下、魔族を打倒し我々人間族を救って頂きたい」正直ありきたりの話だなつと思つていた。

俺は聞きながらこっそりと体を触るとどうやら持つていたそのままの状態で来ているらしく鎖鎌や手裏剣など隠し持つている道具は全部もつていることが分かる。

愛子先生が突然立ち上がり猛然と抗議する

「ふざけないで下さい！ 結局、この子達に戦争させようつてことでしょ！ そんなの許しません！ ええ、先生は絶対に許しませんよ！ 私達を早く帰して下さい！ きつと、ご家族も心配しているはずですよ！ あなた達のしていることはただの誘拐ですよ！」

ぷりぷりと怒る愛子先生。彼女は今年二十五歳になる社会科の教師で非常に人気がある。百五十センチ程の低身長に童顔、ボブカットの髪を跳ねさせながら、生徒のためにとあくせく走り回る姿はなんとも微笑ましく、そのいつでも一生懸命な姿と大抵空回ってしまう残念さのギャップに庇護欲を掻き立てられる生徒は少なくない。

今回も理不尽な召喚理由に怒り、ウガーと立ち上がったのだ。「ああ、また愛ちゃんが頑張つてる……」と、ほんわかした気持ちでイシユタルに食つてかかる愛子先生を眺めていた生徒達だったが、次のイシユタルの言葉に凍りついた。

「お気持ちはお察しします。しかし……あなた方の帰還は現状では不可能です」

場に静寂が満ちる。重く冷たい空気が全身に押しかかっているようだ。誰もが何を言われたのか分からないという表情でイシユタルを見やる。

「ふ、不可能って……ど、どういうことですか!? 喚べたのなら帰せるでしょう!?!」

愛子先生が叫ぶ。

「先ほど言ったように、あなた方を召喚したのはエヒト様です。我々人間に異世界に干渉するような魔法は使えませんのでな、あなた方が帰還できるかどうかもエヒト様の御意思次第ということですよ」

「そ、そんな……」

愛子先生が脱力したようにストンと椅子に腰を落とす。周りの生徒達も口々に騒ぎ始めた。

「うそだろ? 帰れないってなんだよ!」

「いやよ! なんでもいいから帰してよ!」

「戦争なんて冗談じゃねえ! ふざけんなよ!」

「なんで、なんで、なんで……」

パニックになる生徒達。俺も平気ではなかった。しかし、オタクであるが故にこういう展開の創作物は何度も読んでいる。それ故、予想していた幾つかのパターンの内、最悪のパターンではなかった。他の生徒達よりは平静を保っていた。

未だパニックが収まらない中、光輝が立ち上がりテーブルをバンツと叩いた。その音にビクツとなり注目する生徒達。光輝は俺以外の注目が集まったのを確認するとおもむろに話し始めた。

「皆、ここでイシユタルさんに文句を言っても意味がない。彼にだつてどうしようもないんだ。……俺は、俺は戦おうと思う。この世界の人達が滅亡の危機にあるのは事実なんだ。それを知って、放っておくなんて俺にはできない。それに、人間を救うために召喚されたのなら、救済さえ終われば帰してくれるかもしれない。……イシユタルさん? どうですか?」

「そうですね。エヒト様も救世主の願いを無下にはしますまい」

「俺達には大きな力があるんですよ? ここに来てから妙に力が漲っている感じがします」

「ええ、そうですね。ざっと、この世界の者と比べると数倍から数十倍の力を持っていると考えていいでしょうな」

「うん、なら大丈夫。俺は戦う。人々を救い、皆が家に帰れるように。俺が世界も皆も救ってみせる!!」

「……」

その間俺は光輝の話を聞きながら考えていた。

同時に、彼のカリスマは遺憾なく効果を発揮する。女子の大半は「へっ、お前ならそう言うと思ったぜ。お前一人じゃ心配だからな。……俺もやるぜ?」

「龍太郎……」

「今のところ、それしかないわよね。……気に食わないけど……私もやるわ」

「雫……」

「え、えっと、雫ちゃんがやるなら私も頑張るよ!」

「香織……」

俺以外のいつものメンバーが光輝に賛同する。後は当然の流れとしようにクラスメイト達が賛同していく。愛子先生はオロオロと「ダメですよ」と涙目で訴えているが光輝の作った流れの前では無力だった。

俺は一言も発さずただその様子を観察する。

……今後のことを考えながら。

ステータス

「雫。入るぞ。」

「ええ。」

俺が入るとすぐに扉が開く

声を掛けるとするとやはりと言うべきかパジャマ八重樫がいた。

俺は有無を言わずに部屋に入ると雫は申し訳なさそうに俺を見る

「……まず何かいうことは？」

「……ごめんさい。今回はかりは私たちが本当に悪いわ。」

すると視線を伏せる雫に俺は少し睨む

多分少し時間を空けておいたから雫も気づいたのだろう

「どうするんだよ。全員が戦争に参加することになっているぞ。」

「……本当にどうしよう。」

「たく。……まあ、最悪ではないからな。まあいいけどさ。」

俺は小さくため息を吐く

「でも常識とかさっぱり俺らは今は従うしかないかな。全員じゃないか。考えて前線に出る人を少し減らすことから考えるか。」

「……人を減らすね。」

「さつき少し通り耳に入ると恐らく魔物は自然発生するものもいるらしく戦争前はそういう訓練ばかりだと思う。人殺しなんてしたこともない子供がさすがに前線に出ることなんて無謀だしな。」

「……」

俺はそういうと雫は黙ってしまふ

「……快斗は大丈夫なの？」

「生憎俺も両親の仕事で死体の写真や人を殺すってことには結構触れて来たからな。そこまで焦ることではないな。人を殺すって時にならないとな。」

「そう。」

「……怖いかな。」

俺の一言で雫は少しビクツと反応しそして頷く。

「お前明らかに食事が通っていないなかったからな。様子見にきて本当に

よかったよ。なんかお前って普段はしっかりとしている雰囲気なのにやっぱり普通の女子だよなあ。」

「どういう意味よ。」

「そういうことだよ。」

俺は苦笑し少し苦笑いする

「……悪い雫。」

「えっ?」

俺は雫を軽く抱きしめる。すると顔を真っ赤にして睨みつけて何かいう前に

「怖いんなら、泣けよ。」

俺は軽く一声をかけた雫は驚いたようにしていたが

「気づいていたの?」

「気付かないはずないだろ? もう何年一緒にいると思っっているんだよ。それに。」

俺は少し苦虫を噛んだように呟く

「初めて会った時と同じ顔してんぞ。」

あの時と同じように硬い笑顔は多分俺しか気付いていないだろう

「もうお前の弱さは知っているしお前の泣き顔はすでに何回も見ているんだよ。だから頼れよ。辛いってことは吐き出してしまえ。」

「……ホント敵わないわね。」

諦めたように胸に顔を埋め

「ありがと。」

と小さな声が聞こえた後やがて泣き始めた。暖かくて弱い雫を抱きしめながら俺は反対の手で雫の頭を撫でるのだった。

翌日から早速訓練と座学が始まった。

まず、集まった生徒達に十二センチ×七センチ位の銀色のプレートが配られた。不思議そうに配られたプレートを見る俺達に、騎士団長メルド・ロギンスが直々に説明を始めた。

騎士団長が訓練に付きつきりにしたのは、対外的にも対内的にも“勇者様一行”を半端な者に預けるわけにはいかないということらし

い。

メルド団長本人も、「むしろ面倒な雑事を副長（副団長のこと）に押し付ける理由ができて助かった！」と豪快に笑っていたくらいだから大丈夫なのだろう。もつとも、副長さんは大丈夫ではないかもしれないが……

「よし、全員に配り終わったな？ このプレートは、ステータスプレートと呼ばれる。文字通り、自分の客観的なステータスを数値化して示してくれるものだ。最も信頼のある身分証明書でもある。これがあれば迷子になつても平気だからな、失くすなよ？」

非常に気楽な喋り方をするメルド。彼は豪放磊落な性格で、「これから戦友になろうってのにいつまでも他人行儀に話せるか！」と、他の騎士団員達にも普通に接するように忠告するくらいだ。

「プレートの一面に魔法陣が刻まれているだろう。そこに、一緒に渡した針で指に傷を作って魔法陣に血を一滴垂らしてくれ。それで所持者が登録される。 “ステータスオープン” と言えば表に自分のステータスが表示されるはずだ。ああ、原理とか聞くなよ？ そんなもん知らないからな。神代のアーティファクトの類だ」

「アーティファクト？」

アーティファクトという聞き慣れない単語に光輝が質問をする。

「アーティファクトって言うのはな、現代じゃ再現できない強力な力を持った魔法の道具のことだ。まだ神やその眷属達が地上にいた時代に創られたと言われている。そのステータスプレートもその一つでな、複製するアーティファクトと一緒に、昔からこの世界に普及しているものとしては唯一のアーティファクトだ。普通は、アーティファクトと言えば国宝になるもんなんだが、これは一般市民にも流通している。身分証に便利だからな」

ほへへ。まあ自分の数値が分かるっていう点では面白いかもな
とりあえず針に刺し血を擦り付けてみると

原口 快斗 17歳 男 レベル：1

天職 王

筋力 90

| | |
|----|-----|
| 体力 | 90 |
| 耐性 | 90 |
| 敏捷 | 300 |
| 魔力 | 90 |
| 魔耐 | 90 |

技能 剣術 忍術 体術 気配遮断 気配感知 壁歩 投擲術
 回復速度上昇 統率 人心掌握 幻影魔法適正 限界突破 毒耐性
 女難 苦勞人 言語理解
 統率 自らが兵、国民を率いる場合自分の味方のステータス1・2倍

人心掌握 相手のトラブルを解決しやすく信用されやすい
 女難 女性関係のトラブルに巻き込まれやすい。

苦勞人 フォローの達人、胃薬と頭痛薬の準備はお早めに

「……ん？」

目をゴシゴシと擦ってみる。しかし変わったところはない
 冷や汗が垂れる。いや突っ込みどころしかないんだけど。

……いや。これマジでやばいやつだろ。

「全員見れたか？ 説明するぞ？ まず、最初に“レベル”があるだろう？ それは各ステータスの上昇と共に上がる。上限は100でそれがその人間の限界を示す。つまりレベルは、その人間が到達できる領域の現在値を示していると思ってくれ。レベル100ということとは、人間としての潜在能力を全て発揮した極地ということだからな。そんな奴はそうそういない」

どうやらゲームのようにレベルが上がるからステータスが上がる訳ではないらしい。

「ステータスは日々の鍛錬で当然上昇するし、魔法や魔法具で上昇させることもできる。また、魔力の高い者は自然と他のステータスも高くなる。詳しいことはわかっていないが、魔力が身体のスペックを無意識に補助しているのではないかと考えられている。それと、後でお前等用に装備を選んでもらうから楽しみにしておけ。なにせ救国の勇者御一行だからな。国の宝物庫大開放だぞ！」

メルド団長の言葉から推測すると、魔物を倒しただけでステータスが一気に上昇するということはないらしい。地道に腕を磨かなければならないようだ。

「次に『天職』ってのがあるだろう？ それは言うなれば『才能』だ。末尾にある『技能』と連動していて、その天職の領分においては無類の才能を発揮する。天職持ちは少ない。戦闘系天職と非戦系天職に分類されるんだが、戦闘系は千人に一人、ものによっちゃあ万人に一人の割合だ。非戦系も少ないと言えば少ないが……百人に一人はいるな。十人に一人という珍しくないものも結構ある。生産職は持っている奴が多いな」

いやこれどう考えても10人に一人どころかこの天職が王っているのか？

てかこれ戦闘職なの？

面倒事の匂いがプンプンするんだけど

てか毒耐性ってあいつのせいだろ。

「後は……各ステータスは見たままだ。大体レベル1の平均は10くらいだな。まあ、お前達ならその数倍から数十倍は高いだろうがな！ 全く羨ましい限りだ！ あ、ステータスプレートの内容は報告してくれ。訓練内容の参考にしなきゃならんからな」

この世界のレベル1の平均は10らしい。

メルド団長の呼び掛けに、早速、光輝がステータスの報告をしに前へ出た。そのステータスは……

天之河光輝 17歳 男 レベル：1

天職：勇者

筋力：100

体力：100

耐性：100

敏捷：100

魔力：100

魔耐：100

技能：全属性適性・全属性耐性・物理耐性・複合魔法・剣術・剛力・

縮地・先読・高速魔力回復・気配感知・魔力感知・限界突破・言語理解

……うぼあ

冷や汗が垂れる

「……どうしたの？もしかしてステータスが悪いの？」

「いや。そうじゃない。そうでもないしむしろ勇者よりチートなんだけどさすがにこのステータスは見せたくない。」

「……どういうこと？」

「マジで。勘弁してくれよ。何で面倒ごとが俺ばかり。」

その一言でクラスの全員から同情の視線が向けられる

「えっと、とりあえずステータス見せてもらえないか？」

「……うす。」

俺は諦めたようにステータスを見せる。するとメルド団長の明らかに顔色が変わる

「……天職、王だと。」

するとざわざわしたようにクラスメイトどころか王宮側がざわめき始める

「……とりあえず返してくれませんか？」

「お、おう。でも凄いな。天職が王なんて始めてみたぞ。」

「……」

俺は少しため息を吐いてしまう。そして次はハジメの順番が回ってきたのでメルド団長にプレートを見せた。

団長の表情が「うん？」と笑顔のまま固まり、ついで「見間違いか？」というようにプレートをコツコツ叩いたり、光にかざしたりする。そして、ジツと凝視した後、もの凄く微妙そうな表情でプレートをハジメに返した。

「ああ、その、なんだ。錬成師というのは、まあ、言ってみれば鍛冶職のことだ。鍛冶するときには便利だとか……」

ああハジメは非戦闘職か

歯切れ悪くハジメの天職を説明するメルド団長。

その様子にはハジメを目の敵にしている男子達が食いつかないはず

がない。鍛冶職ということとは明らかに非戦系天職だ。クラスメイト達全員が戦闘系天職を持ち、これから戦いが待っている状況では役立つの可能性がある。

檜山大介が、ニヤニヤとしながら声を張り上げる。

「おいおい、南雲。もしかしてお前、非戦系か？ 鍛冶職でどうやって戦うんだよ？ メルドさん、その錬成師って珍しいんつか？」

「……いや、鍛冶職の十人に一人は持っている。国お抱えの職人は全員持っているな」

「おいおい、南雲く。お前、そんなんで戦えるわけ？」

檜山が、実にウザイ感じでハジメと肩を組む。見渡せば、周りの生徒達——特に男子はニヤニヤと嗤っている。

「さあ、やってみないと分からないかな」

「じゃあさ、ちよつとステータス見せてみるよ。天職がショボイ分ステータスは高いんだよなあ？」

「……くつだらねえ。」

俺は呆れたようにすると全員が俺の方を見る。どうやら口に出していたらしい

「……ああ？」

「くつだらねえって言っているんだよ。いい加減やめれば？ 自分より弱い奴を見下すの。うざいし醜いから。」

「……てめえ。」

「……こらー！ 喧嘩は止めなさい！」

すると愛子先生が止めに入る。まあこれを予測しての挑発なんだよなあ

「南雲君、気にすることはありませんよ！ 先生だって非戦系？ とかいう天職ですし、ステータスだってほとんど平均です。南雲君は一人じゃありませんからね！」

そう言って「ほらっ」と愛子先生はハジメに自分のステータスを見せた。

畑山愛子 25歳 女 レベル：1

天職：作農師

筋力：5

体力：10

耐性：10

敏捷：5

魔力：250

魔耐：10

技能：土壌管理・土壌回復・範囲耕作・成長促進・品種改良・植物系鑑定・肥料生成・混在育成・自動収穫・発酵操作・範囲温度調整・農場結界・豊穰天雨・言語理解

「食物チートじゃねーか。」

俺はつい突っ込んでしまう。いや突っ込んでしまった俺は悪くはないだろう。

ハジメは死んだ魚のような目をして遠くを見だした。

「あれっ、どうしたんですか！ 南雲君！」

とハジメをガクガク揺さぶる愛子先生。

確かに全体のステータスは低いし、非戦系天職だろうことは一目でわかるのだが……魔力だけなら勇者に匹敵しており、技能数なら超えている。糧食問題は戦争には付きものだ。ハジメのようにいくらでも優秀な代わりのいる職業ではないのだ。つまり、愛子先生も十二分にチートだった。

「あらあら、愛ちゃんったら止め刺しちやったわね……」

「な、南雲くん！ 大丈夫!？」

「……愛ちゃんに助けを求めたの失敗だったか。」

反応がなくなったハジメを見て雫が苦笑いし、香織が心配そうに駆け寄り、俺は頭を抱える。愛子先生は「あれえ〜？」と首を傾げている。相変わらず一生懸命だが空回る愛子先生にほっこりするクラスメイト達。

……面倒ごとの匂いがする

そう思わざるをえなかった

王宮にて

「は？リリイを侍女に？」

あれから2週間後

俺は王宮から呼び出されたと思うとその場所で待女の交代を言われた

「うむ。それだけ快斗殿に期待をかけておるのだ。ギルド登録も最近はしてもう街の外にも出ているようじゃのう。」

「まあ、確かにしています。」

「正直お主の成長の早さはさすがに国としても見過ごせないのじゃ。正直のう。光輝殿よりもすでに王宮じゃお主を勇者とするべきじゃないかという声が出てきてのう。」

……さすがにやりすぎたか。

俺は乾いた笑いを見せる

正直俺は初日に剣の振り方や魔法の使い方について学んでいたのだが

……まあ八重樫流習っていたら殺す殺されかけるのはいつもの通りだしな

自然と実践向けの剣術と騎士団を圧倒できるステータス。そして元々のセンスによりあんまり意味がないと思いつい訓練を早々に辞退して恵里と冒険者ギルドに登録しパーティーを組んでいる。恵里は及川という女子と一緒に降霊術師という天職だ。普通なら覚えるのも一苦労なんだけど俺と二人つきりになれるという理由だけでたった四日で10体の死んだ魔物を使役出来るほどに成長した。

こいつ狂っているのに何でそこまで有能なんだよ。まあ頼れる面としたら今は雫よりも頼れるし、裏の姿を発散させるいい機会だったので連れていつている。

教会としても王宮としても勇者の仲間をアピールするいい機会だったと思うので許可はあっさり出たのだが

……少々目立ちすぎたらしい

すなわち国家の王族との繋がりを持たないことを危険視し始めた

んだろう。もしよければ手籠めにできればと思っていると考えてもおかしくはない。

……まあ断ることはできなさそうだけどなあ

「分かりましたけど、それでも俺こっちにいること滅多にないんで。」
「うむ。それでも別に構わない。それじゃありリアーナを今日付けで快斗殿の付き人しよう。」

あっさりと答えると十四、五歳の同じく金髪碧眼の美少女が控えていてその姿は付き人らしくないドレスで着飾られている

俺も結構話すことが多いリリイは個人的に助かる

「失礼します。」

と俺は連絡事項があるため今日は訓練場に行かないといけならしい。

だから俺は一度席を立ち頭を下げるとそして歩き出そうとしたときだった。

「何の話だったの?」

するとメガネを外した恵里がどうやら応接室の前で待っていたらしい。少しため息を吐き

「どうやら目立ちすぎたっぽい。完全に目をつけられた。」

その一言で察したのだろう

「……なるほどねえ〜で?どうするの?」

「どうするも何も今まで通りでいいぞ。というよりも上のことを調べられる奴が付き人にいるだけラッキー程度に思っておけばいい。」

「……なるほど。もしかしてリアーナ姫?」

「正解。さすがに頭の回転は早いな。」

俺は素直に感心してしまう。この情報だけでそこにたどり着いた頭脳だけは本当に化け物レベルだろう

「ふくん。多分だけど政治的なことだろうね。政略結婚や色仕掛けつてことだろうね。……一番相性が悪い相手に仕掛けたもんだ。ぼくの色仕掛けにも全く興味なさそうだしね。」

「……お前それ絶対リリイの前でいうなよ。……はあ。全く面倒なことになりそうだ。」

「案外余裕そうだけど？」

「余裕だろ。これくらいだったら光輝の後始末や八重樫流の裏の門下生を相手にする方がよっぽど疲れるしな。」

「……ねえ。ぼくがいうのもなんだけど僕や政略結婚よりもよっぽど疲れる八重樫流って何なの？」

「現代日本でマジで殺し合いを訓練に取り入れている頭のおかしい集団だ。」

「……聞かなきゃよかったよ。」

うん。俺も戻った時ちゃんと仕切れるのか正直分らないしな。

そういえば最近思っていたんだが

「お前最近楽しそうだな。」

「えっ？」

「いやなんか冒険者している時がお前一番なんか人間らしいよなって思ってたな。」

「……そうなのかな？」

「俺はそう見えるだけだから。ただお前ってそんな笑い方できたんだって思ってた。」

「それはどういうことかな？」

こういう軽口を言い合っていると少し自然と笑っている恵里が最近見られる。なんとというか笑顔が今まで硬かったから気付く人は気付くと思うんだけど

「でも、こういうことさらつと言えるから快斗くんはずるいよね。」

「……とりあえずちゃんと擬態しとけよバレたら面倒だろうし。」

「は〜い。」

………つたく。

依存先が俺に移っただけで本質は変わってないと思うけどな

確かに恵里は壊れているし時々本当なら犯罪行為であることも躊躇なくやるときだってある

多分恵里の気持ちには応えられないし、喧嘩も怒らせることも、もしかしたら恵里が裏切る可能性だってある

でも二度と見捨てるような真似だけしないから

心の中で一言入れるとすると軽く恵里の頭を撫でる

「……………どうしたの？」

「なんでもねえよ。」

俺はヒーローじゃなくていい。

汚くて汚れているのかもしれない

でも。

俺は大切な人たちを守れたらそれでいいんだ。

そうやってみんなが訓練している訓練所に向かうのだった

「何やってるの!？」

俺たちが訓練場に踏み込むと慌てたような声が聞こえてくる

恵里と俺は目を見合わせ急いで声のした方向へ向かうと

「いや、誤解しないで欲しいんだけど、俺達、南雲の特訓に付き合っただけで……………」

「南雲くん！」

檜山の弁明を無視して、香織は、ゲホツゲホツと咳き込み蹲るハジメに駆け寄る。

「特訓ね。それにしても随分と一方的みたいだけど？」

「いや、それは……………」

「言い訳はいいからさっさと失せろ。これ以上やるなら俺が相手になるけど?。」

「くっくだらねえことする暇があるなら、自分を鍛えろっての」

三者三様に言い募られ、檜山達は誤魔化し笑いをしながらそそくさと立ち去った。

「……………何があったの?。」

「えっ? あっ恵里。快斗。」

「おう。つてお前いつもこんなことされていたのか?。」

「そうだよ。いつもあんなことされてたの? それなら、私が……………」

何やら怒りの形相で檜山達が去った方を睨む香織を、ハジメは慌てて止める。

「いや、そんないつもってわけじゃないから! 大丈夫だから、ホント

気にしないぞ！」

「でも……」

それでも納得できないような香織に再度「大丈夫」と笑顔を見せるハジメ。渋々ながら、ようやく香織も引き下がる。

「南雲君、何かあれば遠慮なく言っつてちょうだい。香織もその方が納得するわ」

「女子が言い辛かったら俺でもいいぞ。」

渋い表情をしている香織を横目に、苦笑いしながら雫と俺が言う。「だが、南雲自身ももつと努力すべきだ。弱さを言い訳にしては強くなれないだろう？ 聞けば、訓練のないときは図書館で読書に耽っているそうじゃないか。俺なら少しでも強くなるために空いている時間も鍛錬にあてるよ。南雲も、もう少し真面目になった方がいい。檜山達も、南雲の不真面目さをどうにかしようとしたのかもしれないだろ？」

何をどう解釈すればそうなるのかと思ったが光輝は基本的に性善説で人の行動を解釈する奴だったと苦笑いする。

「……」

恵里は無表情で光輝を見る。呆れているのか。それとも、またべつの感情か。分からないがかなり暗い笑顔だった。

俺は少し頭を抱えながら

「悪い。余計に迷惑かけてしまったかもな。」

「ごめんなさいね？ 光輝も悪気があるわけじゃないのよ」

「アハハ、うん、分かっているから大丈夫」

やはり笑顔で大丈夫と返事をするハジメ。汚れた服を叩きながら起き上がる。

「ほら、もう訓練が始まるよ。行こう？」

ハジメに促され一行は訓練施設に戻る。香織はずつと心配そうだったがハジメは気がつかない振りをしていた。俺は少し訓練場に向かいながらなんか嫌な気分覆われるのだった

訓練が終了した後、いつもなら夕食の時間まで自由時間となるのだ

が、今回はメルド団長から伝えることがあると引き止められた。何事かと注目する生徒達に、メルド団長は野太い声で告げる。

「明日から、実戦訓練の一環として『オルクス大迷宮』へ遠征に行く。必要なものはこちらで用意してあるが、今までの王都外での魔物との実戦訓練とは一線を画すと思ってくれ！まあ、要するに気合入れろってことだ！今日はゆっくり休めよ！では、解散！」

そう言って伝えることだけ伝えるとさっさと行ってしまった。ざわざわと喧騒に包まれる生徒達の最後尾で俺は頭を悩ます

本当に大丈夫なのかと

オルクス大迷宮

「えっリリイが侍女に？」

「一応結界魔法を使えるらしいから冒険者登録もさせようと思って
いるな。本物のお姫様に冒険者やらせるのも気が引けたけどなんか楽
しそうだしまあいつかって思ってたな。」

俺と雫は夜の恒例行事になった会談を行う。一応明日からはオル
クス大迷宮の攻略なのでそんな時間は取りたくないんだけど、雫に
限っては別である

こいつだけはストレスの発散は人目を避けないといけないのだ。

「……そうね。でも恵里と冒険者ねえ。恵里は大人しいタイプだと
思っていたけど。」

「大人しいのは分かっているけど、俺に告白した唯一の女子だぞ。諦
めそうにもないししばらくはこのままだろうな。」

「そう。まあ良かったわ。恵里も元気そうで。」

「まあな。」

少し苦笑いをする和本題に入るため少し間を開け

「とりあえずやるか。」

とりあえず木刀を俺はもつ。

「ええ。」

一対一の試合。最近ずっと日課になっていることだった。

俺のステータスは

原口 快斗 17歳 男 レベル：11

天職 王

筋力 180

体力 180

耐性 180

敏捷 600

魔力 180

魔耐 180

技能 剣術「+斬撃速度上昇」「+抜刀速度上昇」 忍術「+毒物生

成」「十身代わりの術」「十無音歩行」 体術 回復速度上昇 気配遮断
気配感知 壁歩 投擲術 統率 人心掌握 幻影魔法適正 限界
突破 毒耐性 女難 苦勞人 言語理解
という何とも俊敏が目立つステータスだ。

ついでに俊敏の数値は同値なので俺とほぼ同じ速さなのだが縮地
を使つた緩急の差で雫の方が有利なように見えるが

「……甘いな。」

一瞬の間を見逃さず俺は木刀を突き飛ばす

「剣筋が素直過ぎだ。もう少しフェイントや目線の誘導をしないと対
人戦じゃ剣筋が読まれるぞ。」

「……相変わらず強いわね。もう一本頼めるかしら。」

「何度でも付き合うけど、ほどほどにしろよ。明日も早いんだし睡眠
はしっかり取っとけ。」

「ええ。」

とやけに焦っているように感じる雫に俺は少し違和感を覚える

もちろん剣筋もその分乱れているので対応するのは簡単で俺はそ
の後も対応をしていき

「……さすがにこれ以上は酷くなるだけだぞ。」

俺は区切りを付けた。

「はあ、はあ。」

息を吐く雫に軽くため息を吐く

「不安なのか？」

俺はそういうとすると雫はビクツと反応する

「…凶星かよ。」

「ええ。できればまたやってくれないかしら。」

「……はあ。たく。汗臭くても知らんぞ。」

俺は雫を抱きしめる。どうやらこうすると安心するらしい
周囲の奴に見られたら言い訳ができないくらいにまずいんだけど
するとしばらくすると泣き始める雫

やっぱり怖いし不安なんだろう

八重樫雫は昔から臆病なのだろう

でも外には出せずに弱音は一人で背負いこむ

……本当に不器用な奴だと思う

そして数十分後雫はようやく落ち着いたのかポニーテールで顔を困っている

「……ごめんなさい。もう本当に迷惑ばかり。」

「いいって。元々甘やかすつもりだったしな。お前は普段甘えなさすぎ。もっと俺以外にも甘えろよ。香織や愛ちゃんだっているだろ。」

「……」

「……あの時とは状況が違うんだよ。もうお前は一人じゃないんだ。」
「ええ。でも。」

「ほら。お前の悪い癖だよ。助けを素直に受け取らず、手放そうってしているところ。」

俺は呆れたようにいうとうつと声を詰まらせる

「自分だけで背負いこむな。怖かったら怖いんだよ。声に出さないと分からないだろうが。こんな時期だからこそ弱音を吐き出せよ。」

「……快斗にはないの悩みとか。」

「悩みはないなあ。……まあお前の母さんや親父さんや師範に自重って言葉を知ってほしいっていうくらいか。」

「……ちよつと待って。わたしの家族が快斗に何したの?」

主に忍者で俺の命を狙ったり会合でヒヤッハーしているんだよなあ。

「まあ、とりあえず明日だな……」

「ええ。さすがに疲れちゃったから今日はもう休むわ。」

「おう。それじゃあな。」

「ええまた明日。」

と俺たちは別れる

そうして俺は部屋に戻ろうとしていると檜山とすれ違う

「……」

そうして俺は一瞬だけ寒気がしたので一度檜山の方を向いた
なんか嫌な予感がするな

俺は少し危機感を覚え小さくため息を吐くのだった

現在、俺達は【オルクス大迷宮】の正面入口がある広場に集まっていた

ここでステータスプレートをチェックし出入りを記録することで死者数を正確に把握するのだとか。戦争を控え、多大な死者を出さない措置だろう。

しばらく経つとメルド団長が受付を終えたらしく行くぞといいい中に入る

迷宮の中は薄暗くある程度の視認が可能であることが分かる

一行は隊列を組みながらゾロゾロと進む。しばらく何事もなく進んでいると広間に出た。ドーム状の大きな場所で天井の高さは七、八メートル位ありそうだ。

その時、物珍しげに辺りを見渡している一行の前に、壁の隙間という隙間から灰色の毛玉が湧き出てきた。

「よし、光輝達が前に出る。他は下がれ！ 交代で前に出てもらうかな、準備しておけ！ あれはラットマンという魔物だ。すばしっこいが、たいした敵じゃない。冷静に行け！」

その言葉通り、ラットマンと呼ばれた魔物が結構な速度で飛びかかってきた。

灰色の体毛に赤黒い目が不気味に光る。ラットマンという名称に相応しく外見はねずみっぽいが……二足歩行で上半身がムキムキだった。八つに割れた腹筋と膨れあがった胸筋の部分だけ毛がない。まるで見せびらかすように。

「まあいいや。」

一応俺は簡単にピンを投げる。これは何度投げても手元に戻ってくる優れ物らしい。

するとポンポンとすぐに突き刺さり絶命していくラットマン。

そして間合いに入ると剣を抜き俺と雫、光輝と龍太郎に別れ迎撃する。この組み合わせは連携の有無であり、雫と俺が連携が相性が良かったせいだろう。まあ目と目で会話できるしな。

その間に、香織と恵里と鈴が詠唱を開始。魔法を発動する準備に入

る。訓練通りの堅実なフォーメーションだ。

俺はモンスターを切り捨てる。最早慣れた手つきで殺していくと

「暗き炎渦巻いて、敵の尽く焼き払わん、灰となりて大地へ帰れ——
「螺旋」」

三人同時に発動した螺旋状に渦巻く炎がラットマン達を吸い上げるように巻き込み燃やし尽くしていく。「キイイイツ」という断末魔の悲鳴を上げながらパラパラと降り注ぐ灰へと変わり果て絶命する。気がつけば、広間のラットマンは全滅していた。

「オーバークイルだろ。」

魔石が正直欲しかったが俺は少し手加減して欲しかったなあと思っている

「……」

雫だけは初勝利に喜ぶ様子がなくなただ手を見ていたのを、俺は偶然見てしまう

「……雫。」

「えっ?」

俺は無理やり手を掴み軽く手を強く握る

すると周辺の声からヒューと聞こえるし恵里から視線を感じるが無視し少しの間手を揉む

「ちよ、ちよつと快斗。」

「……感触は抜けたか?」

俺はそういうと雫はハツとしたようにする

「大丈夫だから。」

優しく手を包みこむ。何がとも言わないけど体温を伝えるように。

「……ええ。もう大丈夫よ。」

それだけで通じる。それならと俺は手を離す。そこからは特に問題もなく交代しながら戦闘を繰り返し、順調よく階層を下げて行つた。

そして、一流の冒険者か否かを分けると言われている二十階層にたどり着いた。

「よし、お前達。ここから先は一種類の魔物だけでなく複数種類の魔

物が混在したり連携を組んで襲ってくる。今までが楽勝だったからと言ってくれぐれも油断するなよ！ 今日はこの二十階層で訓練して終了だ！ 気合入れろ！」

メルド団長のかけ声がよく響く。

俺は指揮をとったり、前線で剣を振るったり結構大変な役回りをしていた

しばらくすると小休止に入る

香織と雫と一緒に話していると香織とハジメの目があう。すると恥ずかしそうに目を逸らすはじめに若干香織が拗ねたようにしている。それを横目で見ていた雫が苦笑いし、小声で話しかけた。

「香織、なに南雲君と見つめ合っているのよ？ 迷宮の中でラブコメなんて随分と余裕じゃない？」

からかうような口調に思わず顔を赤らめる香織。怒ったように雫に反論する。

「もう、雫ちゃん！ 変なこと言わないで！ 私はただ、南雲くん大丈夫かなって、それだけだよ！」

「いや。それ普通にラブコメじゃん。」

俺が突っ込むとすると雫が笑い、それを見た香織が「もうっ」と呟いてやはり拗ねてしまった。

そして出発ししばらく経つと気配感知に何か引つかかったので立ち止まる。訝しそうなクラスメイトを尻目に戦闘態勢に入る。

「擬態しているぞー！ 周りをよく注意しておけ！」

メルド団長の忠告が飛ぶ。

その直後、前方でせり出していた壁が突如変色しながら起き上がった。壁と同化していた体は、今は褐色となり、二本足で立ち上がる。そして胸を叩きドラミングを始めた。どうやらカメレオンのような擬態能力を持ったゴリラの魔物のようだ。

「ロックマウントだ！ 二本の腕に注意しろ！ 豪腕だぞ！」
「よっと。」

俺は壁走があるせいか平気だが。光輝と雫が取り囲もうとするが、鍾乳洞的な地形のせいで足場が悪く思うように囲むことができない

どうやら気持ち悪さで青褪めているのを死の恐怖を感じたせいだと勘違いしたらしい。彼女達を怯えさせるなんて！ と、なんとも微妙な点で怒りをあらわにする光輝。それに呼応してか彼の聖剣が輝き出す。

「万翔羽ばたき、天へと至れ——『天翔閃』！」

「お、おい。」

「あつ、こら、馬鹿者！」

俺とメルド団長の声を無視して、光輝は大上段に振りかぶった聖剣を一気に振り下ろした。

その瞬間、詠唱により強烈な光を纏っていた聖剣から、その光自体が斬撃となって放たれた。逃げ場などない。曲線を描く極太の輝く斬撃が僅かな抵抗も許さずロックマウントを縦に両断し、更に奥の壁を破壊し尽くしてようやく止まった。

パラパラと部屋の壁から破片が落ちる。「ふう〜」と息を吐きイケメンスマイルで香織達へ振り返った光輝。その頭を俺は思いつきりぶん殴った

「へぶう!？」

「おいバカ。こんな狭いところで使う技じゃないだろうが！ 崩落でもしたらどうすんだよ。生き埋もれなんてシャレにならんぞ。」

「快斗のいうとおりだ馬鹿者。」

「うっ」と声を詰まらせ、バツが悪そうに謝罪する光輝。香織達が寄ってきて苦笑いしながら慰めていると。

その時、ふと香織が崩れた壁の方に視線を向けた。

「……あれ、何かな？ キラキラしてる……」

その言葉に、全員が香織の指差す方へ目を向けた。

そこには青白く発光する鉱物が花咲くように壁から生えていた。まるでインディコライトが内包された水晶のようである。香織を含め女子達は夢見るように、その美しい姿にうっとりした表情になった。

「グラントツ鉱石だっけ？ こっちの世界でいう宝石みたいなものだったはずだ。たしか加工して指輪・イヤリング・ペンダントなどにして贈

ると大変喜ばれるらしい。求婚の際に選ばれる宝石としてもトップ三に入るらしい。確か恵里が見てたよな?」

「よ、よく覚えてるね。」

「そりゃ買ったものくらいはさすがに覚えているだろ。パーティーの結成時に欲しそうにしてたからな。」

恵里の耳元にはそのイヤリングがつけられており、一番安いが数万する1日の稼ぎが全部消えるアクセサリをつけている

「……なんというかお前そういうの本当にマメだよな。」

「素敵……」

龍太郎のツツコミに俺は少しいたたまれなくなると

香織が、メルドの簡単な説明を聞いて頬を染めながら更にうつとりとする。そして、誰にも気づかれない程度にチラリとハジメに視線を向けた。もつとも、雫と俺は気がついていたが……

「だったら俺らで回収しようぜ!」

そう言つて唐突に動き出したのは檜山だった。グランツ鉱石に向けてヒョイヒョイと崩れた壁を登っていく。それに慌てたのはメルド団長だ。

「こら! 勝手なことをするな! 安全確認もまだなんだぞ!」

しかし、檜山は聞こえないふりをして、とうとう鉱石の場所に辿り着いてしまった。

メルド団長は、止めようと檜山を追いかける。同時に騎士団員の一人がフェアスコープで鉱石の辺りを確認する。そして、一気に青褪めた。

「団長! トラップです!」

「ツ!」

しかし、メルド団長も、騎士団員の警告も一歩遅かった。

檜山がグランツ鉱石に触れた瞬間、鉱石を中心に魔法陣が広がる。グランツ鉱石の輝きに魅せられて不用意に触れた者へのトラップだ。美味しい話には裏がある。世の常である。

「くっ、撤退だ! 早くこの部屋から出る!」

メルド団長の言葉に生徒達が急いで部屋の外に向かうが……間に

合わないだろう

部屋の中に光が満ち、ハジメ達の視界を白一色に染めると同時に一瞬の浮遊感に包まれる。

空気が変わったのを感じた。次いで、ドスンという音と共に地面に叩きつけられた。

尻の痛みに呻き声を上げながら、周囲を見渡す。クラスメイトのほとんどのハジメと同じように尻餅をついている。メルド団長や騎士団員達、光輝達など一部の前衛職の生徒は既に立ち上がって周囲の警戒をしているので俺も同じように立ち上がる

転移した場所は、巨大な石造りの橋の上だった。ざっと百メートルはありそう。天井も高く二十メートルはあるだろう。橋の下は川などなく、全く何も見えない深淵の如き闇が広がっていた。まさに落ちれば奈落の底といった様子だ。

その巨大な橋の中間にいた。橋の両サイドにはそれぞれ、奥へと続く通路と上階への階段が見える。

それを確認したメルド団長が、険しい表情をしながら指示を飛ばした。

「お前達、直ぐに立ち上がって、あの階段の場所まで行け。急げ！」

雷の如く轟いた号令に、わたわたと動き出す生徒達。

迷宮のトラップがこの程度で済むわけもなく、撤退は叶わなかった。階段側の橋の入口に現れた魔法陣から大量の魔物が出現したからだ。更に、通路側にも魔法陣は出現し、そちらからは一体の巨大な魔物が……

その時、現れた巨大な魔物を呆然と見つめるメルド団長の呻く様な呻きがやけに明瞭に響いた。

——まさか……ベヒモス……なのか……

撤退戦

橋の両サイドに現れた赤黒い光を放つ魔法陣。通路側の魔法陣は十メートル近くあり、階段側の魔法陣は一メートル位の大きさだが、その数がおびただしい。

小さな無数の魔法陣からは、骨格だけの体に剣を携えた魔物「トラウムソルジャー」が溢れるように出現した。空洞の眼窩からは魔法陣と同じ赤黒い光が煌々と輝き目玉の様にギョロギョロと辺りを見回している。その数は、既に百体近くに上っており、尚、増え続けているようだ。

それよりもこっちの牛野郎の方がやばいな

十メートル級の魔法陣からは体長十メートル級の四足で頭部に兜のような物を取り付けた魔物が出現したからだ。もつとも近い既存の生物に例えるならトリケラトプスだろうか。ただし、瞳は赤黒い光を放ち、鋭い爪と牙を打ち鳴らしながら、頭部の兜から生えた角から炎を放っているという付加要素が付くが……

メルド団長が呟いた「ベヒモス」という魔物は、大きく息を吸うと凄まじい咆哮を上げた。

「グルアアアアアアアアア!!」
「ッ!？」

その咆哮で正気に戻ったのか、メルド団長が矢継ぎ早に指示を飛ばす。

「アラン！ 生徒達を率いてトラウムソルジャーを突破しろ！ カイル、イヴァン、ベイル！ 全力で障壁を張れ！ ヤツを食い止めるぞ！ 光輝、お前達は早く階段へ向かえ！」

「待つて下さい、メルドさん！ 俺達もやります！ あの恐竜みたいなヤツが一番ヤバイでしょう！ 俺達も……」

「馬鹿野郎！ あれが本当にベヒモスなら、今のお前達では無理だ！

ヤツは六十五階層の魔物。かつて、「最強」と言わしめた冒険者をして歯が立たなかった化け物だ！ さっさと行け！ 私はお前達を死なせるわけにはいかないんだ！」

……うん。これ本当にまずいな

見ただけで分かる

これは本当に相手にならないと

「とりあえず俺は離脱します。あっち側も統制整えないと死人がでるので。」

「わ、私も行くよ。」

「鈴もそっち行くね。」

と俺と恵里、そして鈴は先に戦線を離脱する。

「とりあえず前線を整える。混乱状態の俺たちがヤケクソに戦っても意味がない。まずは混乱状態から脱するのが一番だ。鈴は障壁でスケルトンの誘導で中央に寄せてくれ。俺が左からやるからアランさん恵里は右からやってくれ。挟撃するような形でとりあえず戦線を貼り直す。」

「わ、分かった。」

「わかったよ。」

「お。おう。」

「天之河たちが来たら一点突破に切り替えます。俺もそこまで火力が出るわけじゃないので。粘ることに専念してください。」

そして剣を構え切り込んでいく

隊列など無視して我先にと階段を目指してがむしやらに進んでいくクラスメイトに。騎士団員の一人、俺とアランが必死にパニックを抑えようとするが、目前に迫る恐怖により耳を傾ける者はいない。

誰も彼もがパニックになりながら滅茶苦茶に武器や魔法を振り回している。このままでは、いずれ死者が出る可能性が高い。騎士アランが必死に纏めようとしているが上手くいっていない。そうしている間にも魔法陣から続々と増援が送られてくる。

一瞬迷いが生じる。どうすればいいのか分からなくなる
「任せて。」

すると聞き馴染みのある声が聞こえる。その姿は後ろ姿でベヒモス側へと駆けていく。

……しやーない。ハジメを信じますか

「恵里、アランさん。生徒の危ないところだけフォローしろ。園部。永山。お前のグループの指揮を取れ。」

「うん。」

「お、おう。」

声を大きく通る声で俺は必死に冷静な人を見極め指示をだす

「一点に集まって遠藤と俺で確実に減らしていく。遠藤できるか？」
「任せろ。」

「後衛側は魔法で一度後ろに下がって。前衛陣は盾になって回復組辻を中心の前衛を回復。障壁組は鈴を中心に障壁で前衛陣をサポートしろ。」

「わ、分かった。」

「了解。」

さてと俺も切りみながら必死に指示を出す。

俺は火力は光輝みたいにはないけどそれでも結構ハイスペックなので簡単に切り捨てることができているが、行き過ぎると囲まれてしまう。

囲まれないように注意しながら前線を保つとしだいに隊列が整ってくる

治療魔法に適性のある者がこぞって負傷者を癒し、魔法適性の高い者が後衛に下がって強力な魔法の詠唱を開始する。前衛職はしっかりと隊列を組み、倒すことより後衛の守りを重視し堅実な動きを心がける。

……これではらくは保つ。後は火力組だけ

そしてその時はやってきた

「――『天翔閃』！」

純白の斬撃がトラウムソルジャー達のド真ん中を切り裂き吹き飛ばしながら炸裂した。

橋の両側にいたソルジャー達も押し出されて奈落へと落ちていく。斬撃の後は、直ぐに雪崩れ込むように集まったトラウムソルジャー達で埋まってしまったが、生徒達は確かに、一瞬空いた隙間から上階へと続く階段を見た。

「おいこら遅いぞボケが。」

「ごめんなさい。少し来るのが遅れちゃったわ。」

「手遅れじゃなかったただけマシか。光輝とメルド団長、俺で中央突破
永山、雫、遠藤、龍太郎で左右のトラウムソルジャーを殺していく。恵
里。詠唱は?。」

「大丈夫。もうやってるから。」

「ナイス。トラウムソルジャーの数十体は恵里のおかげで操られ前
線を保っている。」

「このおかげで中央の道が全て空いた

「皆! 続け! 階段前を確保するぞ!」

光輝が掛け声と同時に走り出す。

それに俺とメルドさんがバターを切り取るようにトラウムソル
ジャーの包囲網を切り裂いていく。そうして、遂に全員が包囲網を突
破した。背後で再び橋との通路が肉壁ならぬ骨壁により閉じようと
するが、そうはさせせじと光輝が魔法を放ち蹴散らす。

クラスメイトが訝しそうな表情をする。それもそうだろう。目の
前に階段があるのだ。さっさと安全地帯に行きたいと思うのは当然
である。

「そーいやハジメは?。」

「そーだ。快斗くん。ハジメくんを助けなきゃ! ハジメくんがたった
一人であの怪物を抑えてるの!」

香織のその言葉に何を言っているんだという顔をするクラスメイ
ト達。そう思うのも仕方ない。なにせ、ハジメは「無能」で通ってい
るのだから。

だが、困惑するクラスメイト達が、数の減ったトラウムソルジャー
越しに橋の方を見ると、そこには確かにハジメの姿があった。

「なんだよあれ、何してんだ?。」

「あの魔物、上半身が埋まってる?。」

「錬成で地面を動かして土に埋めたのか……弱いからこそ思いつくやり
方だな。」

勝つことではなく動きを止める。

俺も一瞬考えはしたものの土魔法や障壁でもできないと判断したのだが、まさか錬成が役に立つとはなあ

「前衛陣もう少し粘れるか？ハジメが来るまでここを保つぞ。」

「お、おう。」

戸惑いながらもハジメに命を助けられたという感覚があるのだろう。

「そうだ！ 坊主がたった一人であの化け物を抑えているから撤退できたんだ！ 後衛組は遠距離魔法準備！ もうすぐ坊主の魔力が尽きる。アイツが離脱したら一斉攻撃で、あの化け物を足止めしろ！」
ビリビリと腹の底まで響くような声に気を引き締め直す生徒達。中には階段の方向を未練に満ちた表情で見ている者もいる。

無理もない。ついさつき死にかけてのだ。一秒でも早く安全を確保したいと思うのは当然だろう。しかし、団長の「早くしろ！」という怒声に未練を断ち切るように戦場へと戻る人も多くはない。

「雫。」

「分かっているわ。」

俊敏を駆使し連携でスケルトンを殺していく。

俺と雫はソルジャー組の指揮をとり確実に撤退できるようにしていた。

そして戦線を見張ると夜空を流れる流星の如く、色とりどりの魔法がベヒモスを打ち据える。ダメージはやはり無いようだが、しっかりと足止めになっている。

いける！ と確信し、転ばないように注意しながら頭を下げて全力で走るハジメ。ベヒモスとの距離は既に三十メートルは広がった。思わず、頬が緩むハジメ。でも次の瞬間

「避けるーハジメー！」

俺は大声でハジメに叫ぶ。

無数に飛び交う魔法の中で、一つの火球がハジメの方に向かってクイツと軌道を僅かに曲げたのだ。

明らかにハジメを狙って

俺はハジメの方に向けようとするがその時ちようど数体のソル

ジャーが魔法陣から出てくる

「……チッ。」

俺は素早く切り捨てすぐにハジメの方を向く。でもそのひと時だけが問題だった

ベヒモスの攻撃で橋全体が震動する。着弾点を中心に物凄い勢いで亀裂が走る。そしてメキメキと橋が崩壊を始めた。

「グウアアアア!？」

悲鳴を上げながら崩壊し傾く石畳を爪で必死に引っ搔くベヒモス。しかし、引っ掛けた場所すら崩壊し、抵抗も虚しく奈落へと消えていった。ベヒモスの断末魔が木霊する。

ハジメもなんとか脱出しようと這いずるが、しがみつ়場所も次々と崩壊していく。

そして落下していくハジメに俺は少しみているられなくなった

俺も行こうと体が動いたところだった

「離して！ 南雲くんの所に行かないと！ 約束したのに！ 私があ、私を守るって！ 離してえ！」

飛び出そうとする香織を雫と光輝が必死に羽交い締めにする。香織は、細い体のどこにそんな力があるのかと疑問に思うほど尋常ではない力で引き剥がそうとする。このままでは香織の体の方が壊れるかもしれない。しかし、だからといって、断じて離すわけにはいかない。今の香織を離せば、そのまま崖を飛び降りるだろう。それくらい、普段の穏やかさが見る影もないほど必死の形相だった。いや、悲痛というべきかもしれない。

「香織っ、ダメよ！香織！」

雫は香織の気持ちがかかっているからこそ、かけるべき言葉が見つからない。ただ必死に名前を呼ぶことしかできない。

「香織！君まで死ぬ気か！南雲はもう無理だ！落ち着くんだ！このままじゃ、体が壊れてしまう！」

それは、光輝なりに精一杯、香織を気遣った言葉。しかし、今この場で錯乱する香織には言うべきでない言葉だった。

「無理って何?!南雲くんは死んでない!行かないと、きっと助けを求

めてる！」

悔しい思いが伝わってくる。分かっていた。この世界は命がとても軽いものだなんて

しかし、その現実を受け止められる心の余裕は、今の香織にはない。言ってしまうえば反発して、更に無理を重ねるだけだ。

「悪いな。」

俺は手刀を香織の首筋に当てる。ビクツと一瞬痙攣し、そのまま意識を落とす香織。

ぐったりする香織を抱きかかえ、光輝がキツと睨んでくる

「……とりあえず出ろぞ。恨み言でも言ってもいいけどまずは脱出が先だ。もう誰も死なせるわけにはいかないからな。」

「……でも。」

「私達が止められないから快斗が止めてくれたのよ。わかるでしょ？」

今は時間がないの。香織の叫びが皆の心にもダメージを与えてしまいう前に、何より香織が壊れる前に止める必要があった。」

「とりあえず雫俺が先頭で突っ切る。休むこともなく一層に向かうからフォロー頼んでいいか？」

俺の言葉に雫もうなづく

「皆！今は、生き残ることだけ考えろ！ここはソルジャーがいつ出てもおかしくはない。撤退するぞ！」

俺は必死に声を張り上げ、クラスメイト達に脱出を促した。メルド団長や騎士団員達も生徒達を鼓舞する。

そして全員が階段への脱出を果たした。上階への階段は長かった。それだからこそ考える時間も多くあるのだがやっぱり問題はあの

火球だった。

……あれは明らかに狙われた魔法だった

つまりはこの中の誰かにハジメを殺そうとしたということだ

「……」

多分気づいているのは俺だけだろう。……いや。多分あいつも気づいているか

先が暗闇で見えない程ずっと上方へ続いており、感覚では既に三十

階以上、上っているはずだ。魔法による身体強化をしても、そろそろ疲労を感じる頃である。先の戦いでダメージもある。薄暗く長い階段はそれだけで気が滅入るものだ。

そろそろ小休止を挟むべきかと考え始めたとき、ついに上方に魔法陣が描かれた大きな壁が現れた。

クラスメイト達の顔に生気が戻り始める。メルド団長は扉に駆け寄り詳しく調べ始めた。フェアスコープを使うのも忘れない。

その結果、どうやらトラップの可能性はなさそうであることがわかった。魔法陣に刻まれた式は、目の前の壁を動かすためのものものうだ。

メルド団長は魔法陣に刻まれた式通りに一言の詠唱をして魔力を流し込む。すると、まるで忍者屋敷の隠し扉のように扉がクルリと回転し奥の部屋へと道を開いた。

扉を潜ると、そこは元の二十階層の部屋だった。

「帰ってきたの?」

「戻ったのか!」

「帰れた……帰れたよお……」

クラスメイト達が次々と安堵の吐息を漏らす。中には泣き出す子やへたり込む生徒もいた。光輝達ですら壁にもたれかかり今にも座り込んでしまいそうだったのだ。

「おい。一応ここはダンジョンの中だ。完全に安全を確保できたわけではない。残りの20階層。ここで気が抜けたら帰れなくなる!魔物との戦闘はなるべく避けて最短距離で脱出する!メルド団長。」

「う、うむ。分かった、」

少しくらい休ませてくれよ、という生徒達の無言の訴えをギンツと目を吊り上げて封殺する。

渋々、フラフラしながら立ち上がる生徒達。俺が疲れを隠して率先して先をゆく。道中の敵を俺が倒しながら一気に地上へ向けて突き進んだ。

そして遂に、一階の正面門とんだか懐かしい気さえする受付が見えた。迷宮に入って一日も立っていないはずなのに、ここを通ったの

がもう随分昔のような気がしているのは、きっと少数ではないだろう。

今度こそ本当に安堵の表情で外に出て行く生徒達。正面門の広場で大の字になって倒れ込む生徒もいる。一様に生き残ったことを喜び合っているようだ。

だが、未だ目を覚まさない香織を背負った雫や光輝、その様子を見る龍太郎、恵里、鈴、そして園部などは暗い表情だ。

俺は内心かなり動揺していたのだがここで弱みを見せたら崩壊する。

俺は弱さを隠すべく心に蓋をして必死に耐えていた

暗躍

「……はあ。」

俺は王宮に戻ってきてからも色々なことに追われていた

「……大丈夫ですか？」

「あくリリイか。いや。結構きているな。香織の看病にクラスメイトのメンタルケアにハジメの英雄として伝聞の散布。……さすがにちよつとキツイな。」

侍女になったリリイが少しばかり気の使った言葉に俺はつい本音が漏れてしまう。

あの日、迷宮で死闘と喪失を味わった日から既に五日が過ぎていた。

宿場町ホルアドで一泊し、早朝には高速馬車に乗って一行は王国へと戻った。とても、迷宮内で実戦訓練を続行できる雰囲気ではなかったし、無能扱いだったとは言え勇者の同胞が死んだ以上、国王にも教会にも報告は必要だったらしい。

帰還を果たしハジメの死亡が伝えられた時、王国側の人間は誰も彼もが愕然としたものの、それが“無能”のハジメと知ると安堵の吐息を漏らしたのだ。

国王やイシュタルですら同じだった。強力な力を持った勇者一行が迷宮で死ぬこと等あつてはならないこと。迷宮から生還できない者が魔族に勝てるのかと不安が広がっては困るのだ。神の使徒たる勇者一行は無敵でなければならぬのだから。

しかし、俺はその先に手を打っておいただけだ

ハジメが無能ではなく幻影魔法で先に恵里と一緒に大げさに勇者たちを救った英雄としてホルアドの町の冒険者ギルドや町人に広めることになった

すると王宮は大混乱を受けざるを得なかった

今まで無能扱いだったのが町人たちには英雄視されている

それも本物のお姫様であるリリイが協力してくれたこともあり、大きく楔を打ち込むことができたわけだ。

俺が暗躍したこともありハジメを罵っていた生徒も貴族も大きなダメージを受けることになったのだ

そして勇者と呼ばれるものの敗走と、及び俺に対する世間の声も高まった。

所謂勇者ではなく、勇者パーティーの俺がその後指揮をとり、撤退戦を成功させたとなれば俺の意見に力を持つことになる。

すなわち発言力が高くなり、俺の意見を無視できないようになったのだ

しかし教会側は切ることができない。

神の意志により召喚された俺が異端児扱いになると教会側に不信感を覚えることになる

そして愛ちゃん先生と協力して教会幹部、王国貴族達に真正面から立ち向かった。自分の立場や能力を盾に、私の生徒に近寄るなど、これ以上追い詰めるなど先生も声高に叫んだ。

愛ちゃん先生はいつだって生徒の味方である。俺も一度恵里の件を報告し他時でも、恵里ですら愛ちゃん先生のことを自分の教師であることを認めるほどだった

結果、何とか勝利をもぎ取る事に成功する。戦闘行為を拒否する生徒への働きかけは無くなったのはかなりの進歩であった

「とりあえず今日の仕事は終わったよな？」

「はい。一応、今日の予定はこれで全部です。」

「……ちよつと香織のところ行ってくるから。」

「……香織は大丈夫ですか？」

リリイは心配そうに聞いてくる。一応立場もありながら生徒第一に動いてくれるのは本当に嬉しいよなあ

「一応脈拍も問題ないし息もしっかりしているからな。命に別状はないらしい。おそらく精神的ショックから心を守るため防衛措置として深い眠りにしているのだろうということらしい。故に、時が経てば自然と目を覚ます。でも起きた時にハジメのいないことを考えるとな……色々伝えないといけないこともあるし。気が重いなあ。」

と俺たちは香織の部屋に向かう

そしてコンコンと扉をノックするとどうぞと雫の声がある

ドアを開けると本当に必要な時以外はずっと香織の手を握っている雫がいた

「よう。」

「こんばんわ。雫。」

「……快斗。リリイ。」

俺も少し香織の反対の手を掴む

「……やっぱり、怒るんだろうな。」

「……ええ。その時は一緒に謝りましょ。」

俺と雫は少し力を込める。

どうかこれ以上、「優しい親友を傷つけないで下さい」と、誰ともなしに祈った。

その時、不意に、握り締めた香織の手がピクツと動いた。

「!? 香織! 聞こえる!? 香織!」

「香織? おい。香織。」

俺が必死に呼びかける。すると、閉じられた香織の目蓋がふるふると震え始めた。更に呼びかけるとその声に反応してか香織の手がギョツと握り返してくる。

そして、香織はゆっくりと目を覚ました。

「香織!」

「……雫ちゃん? 快斗くん?」

「香織さん!!」

「リリイまで。」

香織は、しばらくボーと焦点の合わない瞳で周囲を見渡していたのだが、やがて頭が活動を始めたのか見下ろす雫に焦点を合わせ、名前を呼んだ。

「ええ、そうよ。私よ。香織、体はどう? 違和感はない?」

「う、うん。平気だよ。ちよつと怠いけど……寝てたからだろうし

……」

「もう五日も眠っていただからな。そりや怠くもなるだろ。でもよかった。」

俺はほつと息を吐く。

「五日？ そんなに……どうして……私、確か迷宮に行つて……それで……」

徐々に焦点が合わなくなっていく目を見て、マズイと感じた雫が咄嗟に話を逸らそうとする。しかし、香織が記憶を取り戻す方が早かった。

「それで……あ………南雲くんは？」

「ッ……それは」

「……」

苦しい表情でどう伝えるべきか悩む雫。俺も黙り込み口元をしめる。

「……嘘だよ、ね。そうでしょ？二人とも。私が気絶した後、ハジメくんも助かったんだよね？ね、ね？そうでしょ？ここ、お城の部屋だよね？皆で帰ってきたんだよね？ハジメくんは……訓練かな？訓練所にいるよね？うん……私、ちよつと行つてくるね。ハジメくんにお礼言わなきゃ……だから、離して？二人とも」

「……分かつているんだろ。」

俺は歯を食いしばる。声に出すとかかなり重いことがわかる

「やめて。」

「香織の覚えている通りよ」

「やめてよ……」

「彼は、ハジメ君は……」

「いや、やめてよ……やめてったらー！」

「香織！ 彼は死んだのよ！」

「ちがう！死んでなんかない！絶対、そんなことない！どうして、そんな酷いこと言うの！いくら雫ちゃんでも許さないよ！」

「……死んでいるかは分からない。でも奈落に落ちた。それは事実だ。」

イヤイヤと首を振りながら、どうにか俺たちの拘束から逃れようと暴れる香織。雫は絶対離してなるものかとキツく抱き締める。ギョツと抱き締め、凍える香織の心を温めようとする。

「離して！ 離してよお！ 南雲くんを探しに行かなきゃ！ お願いだからあ……絶対、生きてるんだからあ……離してよお」

いつしか香織は「離して」と叫びながら雫の胸に顔を埋め泣きじやくっていた。

縋り付くようにしがみつき、喉を枯らさんばかりに大声を上げて泣く。雫は、ただただひたすらに己の親友を抱き締め続け、俺はただ、背中をさすっていた。そうすることで、少しでも傷ついた心が痛みを和らげますようにと願って。

どれくらいそうしていたのか、窓から見える明るかった空は夕日に照らされ赤く染まっていた。香織はスンスンと鼻を鳴らしながら雫の腕の中で身じろぎした。雫が、心配そうに香織を伺う。

「香織……」

「……雫ちゃん……快斗くん。ハジメくんは……落ちたんだね……ここにはいないんだね……」

囁くような、今にも消え入りそうな声で香織が呟く。雫は誤魔化さない。誤魔化して甘い言葉を囁けば一時的な慰めにはなるだろう。しかし、結局それは、後で取り返しがつかないくらいの傷となって返ってくるのだ。これ以上、親友が傷つくのは見ていられない。

「そうよ」

「あの時、ハジメくんは私達の魔法が当たりそうになつてた……誰なの？」

「わからないわ。誰も、あの時のことには触れないようにしてる。怖いよね。もし、自分だつたらって……」

「そっか。快斗くんは？」

「……断言はできないけど。俺と恵里は憶測がついている。」

「えっ？」

俺の言葉に二人は驚く

「でも、知らない方がいいと思う。……もしハジメが奈落で生きていたら仮定するならば、お前を壊すわけにはいかないからな。」

「生きている？」

「確かに奈落に落ちたのは確かだけど。どこか生きているような気が

するんだよ。なんとなくだけで。」

すると香織も俺の方を見る

「本当?」

「ああ。だから死亡届けも出さないようにしているはずだ。一応これでも頑張ったんだぞ。恵里にもお礼言っとけよ。あいつのおかげで民衆に本当のことを伝えただからな。」

「……うん。私も、信じないよ。ハジメくんは生きてる。死んだなんて信じない」

「香織、それは……」

「……雫俺らだつて分かっている。あそこに落ちて生きていると思う方がおかしいって。それでも諦めきれないんだよ。あいつが死んだところを見たことではないし可能性は一パーセントより低いけど、確認していないならゼロじゃない。その僅かなことでも信じてみたいんだ。」

俺だつてあいつの友達だつたんだ。

生きているって信じていたい。生きて会えるってことを。

「私もそう。もつと強くなるよ。それで、あんな状況でも今度は守れるくらい強くなって、自分の目で確かめる。ハジメくんのこと。……二人とも」

「なに?」

「力を貸してください」

「……」

じつと自分を見つめる香織に目を合わせ見つめ返す。香織の目には狂気や現実逃避の色は見えない。ただ純粹に己が納得するまで諦めないという意志が宿っている。こうなった香織はテコでも動かないだろう。雫や俺どころか香織の家族も手を焼く頑固者になるのだ。

「……当然。親友の頼みを断るわけないだろ。」

「もちろんいいわよ。納得するまでとことん付き合うわ」

「私もわずかながら力にならせてください」

「雫ちゃん! 快斗くん! リリイ!」

香織は雫に抱きつき「ありがとう!」と何度も礼をいう。「礼なんて

不要よ、親友でしよ？」と、どこまでも男前な雫と「俺も諦めきれなかったからな。」と苦笑する俺。リリイも任せてくださいと胸を張る。

その時、不意に部屋の扉が開けられる。

「雫！ 香織はめざ……め……」

「おう、香織はどう……だ……」

光輝と龍太郎だ。香織の様子を見に来たのだろう。訓練着のまま来たようで、あちこち薄汚れている。

あの日から、二人の訓練もより身が入ったものになったらしい。二人もハジメの死に思うところがあつたのだろう。何せ、撤退を渋った挙句返り討ちにあい、あわや殺されるという危機を救ったのはハジメなのだ。もう二度とあんな無様は晒さないと相当気合が入っているようである。しかしなぜか硬直している

「あんだ達、どうし……」

「す、すまん！」

「じゃ、邪魔したな！」

雫の疑問に対して喰い気味に言葉を被せ、見てはいけないものを見てしまったという感じで慌てて部屋を出ていく。そんな二人を見て、香織もキョトンとしている。

「……ああ。そういうこと。」

俺も多分初めて見たなら多分勘違いしてもおかしくはない。

現在、香織は雫の膝の上に座り、雫の両頬を両手で包みながら、今にもキスできそうな位置まで顔を近づけているのだ。雫の方も、香織を支えるように、その細い腰と肩に手を置き抱き締めているように見える。

つまり、激しく百合百合しい光景が出来上がっているのだ。ここが漫画の世界なら背景に百合の花が咲き乱れていることだろう。

雫は深々と溜息を吐くと、未だ事態が飲み込めずキョトンとしている香織を尻目に声を張り上げた。

「さっさと戻ってきなさい！ この大馬鹿者ども！」

俺とリリイはそして顔を見合わせ少し笑ってしまった。

ベヒモス

あれから一ヶ月が経ったある日のこと

俺達勇者一行は、再び【オルクス大迷宮】にやって来ていた。但し、訪れているのは光輝達勇者パーティーと、小悪党組、それに永山が率いる男女五人のパーティーだけだった。

理由は簡単だ。話題には出さなくとも、ハジメの死が、多くの生徒達の心に深く重い影を落としてしまったのである。 “戦いの果ての死” というものを強く実感させられてしまい、まともに戦闘などできなくなったのだ。一種のトラウマというやつである。

結果、自ら戦闘訓練を望んだ勇者パーティーと小悪党組、永山重吾のパーティーのみが訓練を継続することになった。そんな彼等は、再び訓練を兼ねて【オルクス大迷宮】に挑むことになったのだ。今回もメルド団長と数人の騎士団員が付き添っている。

今日で迷宮攻略六日目。
現在の階層は六十層だ。確認されている最高到達階数まで後五層である。

目の前には何時かのものとは異なるが同じような断崖絶壁が広がっていたのである。次の階層へ行くには崖にかかった吊り橋を進まなければならない。それ自体は問題ないが、やはり思い出してしまうのだろう。特に、香織は、奈落へと続いているかのような崖下の闇をジッと見つめたまま動かなかった。

「香織……」

雫の心配そうな呼び掛けに、強い眼差しで眼下を眺めていた香織はゆっくりと頭を振ると、雫に微笑んだ。

「大丈夫だよ、雫ちゃん」

「そう……無理しないでね？ 私に遠慮することなんてないんだから」

「えへへ、ありがと、雫ちゃん」

「気張るな。困ったことがあればすぐ相談しろよ。」

「それはこっちのセリフよ。あんた一回倒れているんだから。」

と雫の言葉に苦笑してしまう

事実働きすぎの疲労とリリーの証言で俺が裏で動いていることが雫にバレ。俺は説教プラス恵里に監視付きのさらに膝枕をされる羽目になった。

「香織……君の優しいところ俺は好きだ。でも、クラスメイトの死に、何時までも囚われていちゃいけない！ 前へ進むんだ。きつと、南雲もそれを望んでる」

「ちよつと、光輝……」

「雫は黙っていてくれ！ 例え厳しくても、幼馴染である俺が言わないといけないんだ。……香織、大丈夫だ。俺が傍にいる。俺は死んだりしない。もう誰も死なせはしない。香織を悲しませたりしないと約束するよ」

「はあく、何時もの暴走ね……香織……」

「あはは、大丈夫だよ、雫ちゃん。……えつと、光輝くんも言いたいことは分かったから大丈夫だよ」

「そうか、わかってくれたか！」

光輝の見当違い全開の言葉に、香織は苦笑いするしかない。

俺は頭を抱え少し胃がキリキリしてきた胃痛薬を取り出す。もはやストレスは薬で解決するしかないのだ。

最近俺はパーティーや貴族との会談でかなり神経を使っており、よりによって10代くらいの女性にハニートラップを仕掛けられているのだが全くの無反応でないと雫と恵里が物凄く怖い表情で俺を睨んでくるので絶対に引つかからない自信がある

「香織ちゃん、私、応援しているから、出来ることがあつたら言っつてね」
「そうだよ、鈴は何時でもカオリンの味方だからね！」

光輝との会話を傍で聞いていて、会話に参加したのは中村恵里と谷口鈴だ。

「それと快斗くん薬最近飲みすぎだよ。」

「……そうでもしないとストレスでハゲると胃痛が治らないんだよ。」

「……あんた本当に一回休みなさい。」

「まあ、後少ししたらホルアドに帰るからな確か皇帝陛下の謁見のため戻るらしいし当分は休めないだろうなあ。」

と苦笑する。

「うう、カオリンは健気だねえ、南雲君め！ 鈴のカオリンをこんなに悲しませて！ 生きてなかったら鈴が殺っちゃうんだからね！」

「す、鈴？ 生きてなかったら、その、こ、殺せないと思うよ？」

「細かいことはいいの！ そうだ、死んでたらエリリンの降霊術でカオリンに侍せちゃえばいいんだよ！」

「す、鈴、デリカシーないよ！ 香織ちゃんは、南雲君は生きてるって信じてるんだから！」

「……」

俺は少し息を吐く。 鈴が暴走し恵里が諫める。それがデフォだ。

何時も通りの光景を見せる姦しい二人に、楽しいな表情を見せる香織と雫。ちなみに、光輝達は少し離れているので聞こえていない。肝心な話やセリフに限って聞こえなくなる難聴スキルは、当然の如く光輝にも備わっている。

「恵里ちゃん、私は気にしてないから平気だよ？」

「鈴もそれくらいにしないさ。」

香織と雫の苦笑い混じりの言葉に「むう」と頬を膨らませる鈴

「でも降霊術苦手な檜山のパーティーの女子がいただろ？ 恵里まだ克服はできなさそうか？」

俺は聞いてみるとすると恵里はにがい顔をしながら頷く

「うん。倫理的な嫌悪感がまだあるみたい。」

「……まあそうか。」

俺は頭を掻くと

「んじや行くか。」

俺は声を出し先頭で吊り橋を渡っていく。

そして俺に続き雫も覚悟を決め歩き始める

一行は特に問題もなく、遂に歴代最高到達階層である六十五層にたどり着いた。

「気を引き締めろ！ ここのマップは不完全だ。何が起るかわから

んからな！」

付き添いのメルド団長の声が響く。

そしてとある広間に侵入すると同時に、部屋の中央に魔法陣が浮かび上がったのだ。赤黒い脈動する直径十メートル程の魔法陣。それは、とても見覚えのある魔法陣だった。

「ま、まさか……アイツなのか!？」

光輝が額に冷や汗を浮かべながら叫ぶ。他のメンバーの表情にも緊張の色がはつきりと浮かんでいた。

「マジかよ、アイツは死んだんじゃないやなかったのかよ!？」

「別個体だろ。魔物は恐らく魔力溜まりによる過剰な魔力の副産物だ。一度倒した魔物と何度も遭遇することも普通にあるだろ。」

俺はあっけらかんに答える。俺はこの一ヶ月間なにもしてなかったわけではないギルドの依頼で高難易度な依頼を幾度もなくクリアして冒険者ランクを早すぎる金ランクまで実力だけでクリアしたのだ

「メルドさん。俺達はもうあの時の俺達じゃありません。何倍も強くなったんだ! もう負けはしない! 必ず勝ってみせます!」

「へっ、その通りだぜ。何時までも負けっぱなしは性に合わねえ。こちらでリベンジマツチだ!」

龍太郎も不敵な笑みを浮かべて呼応する。メルド団長はやれやれと肩を竦め、確かに今の光輝達の実力なら大丈夫だろうと、同じく不敵な笑みを浮かべた。

「グウガアアア!!」

咆哮を上げ、地を踏み鳴らす異形。ベヒモスが光輝達を壮絶な殺意を宿らせた眼光で睨む。

とみんなが戦闘準備をし始めた時には俺はもう

斬り終わっていた

「……ん? もう終わり?」

気配遮断と最近覚えた隠蔽。死角からの攻撃によりステータスの関係上俊敏と筋力、そして身体強化を使って無防備なベヒモスにちようど10回の斬撃を与えたのだ

寝る間も惜しまず努力して技能を挙げていき、今や前衛では光輝やメルド団長を上回るくらいの攻撃力、元からあった剣の才能、実践の知識などを含め一種の極みに達していた
ついでに今のステータスはというと

原口 快斗 17歳 男 レベル：51

天職 王

筋力 540

体力 540

耐性 540

敏捷 1800

魔力 540

魔耐 540

技能 剣術「+斬撃速度上昇」「+抜刀速度上昇」「+連撃」「+威力向上」「+無拍子」「+瞑想」「+精神統一」 忍術「+小太刀」「+毒物生成」「+身代わりの術」「+無音歩行」「+高速移動」「+分身の術」 体術「+身体強化」「+部分強化」「+集中強化」「+浸透破壊」 回復速度上昇「+高速回復」「+免疫上昇」「+戦闘時回復」 気配遮断 気配感知「+特定感知」 壁歩「+効果継続大」 投擲術「+必中」「+威力拡大」 「+複数展開」 統率「+範囲拡大」「+育成」「+忠誠心」 人心掌握 幻影魔法適正「+消費魔力減少」「+魔力効率上昇」「+連続発動」「+複数同時発動」「+遅延発動」「+付加発動」 限界突破「+覇潰」 毒耐性 女難 苦勞人 言語理解
となっている

「「……」」

全員がこつちをみる中誰もが俺の方から視線を離さない

「……やりすぎだよ。」

「ん？だって明らかに剣を抜くの遅かったしな。召喚された直後はモンスターも一瞬の硬直時間があるしな。」

「……はあ。そういう問題じゃないでしょ。」

「できれば私たちも戦いたかったかな。」

苦笑いしながら香織が苦笑する

「悪いな。ただちよつと雑魚すぎた。」

「多分それは快斗くんだけだよ。」

「まあいいわ。それほど快斗は強くなっているのだしね。」

苦笑するとベヒモスをみる

「……んじや。解体つと。」

「なんか楽しそうだね。」

「お前もな。ベヒモスのツノもらつてこ。もしかしたらナイフの頑丈なものできるかもしれないしな。」

恵里と軽口を叩く。そしてぽかんと未だに立っている光輝たちを尻目に戦利品の回収を行うのだった

王都への帰還

俺たちは一時迷宮攻略を中断しハイリヒ王国に戻っていた。

道順のわかつている今までの階層と異なり、完全な探索攻略であることから、その攻略速度は一気に落ちたこと、また、魔物の強さも一筋縄では行かなくなってきた為、メンバーの疲労が激しいことから一度中断して休養を取るべきという結論に至ったのだ。

もつとも、休養だけなら宿場町ホルアドでもよかった。王宮まで戻る必要があったのは、迎えが来たからである。何でも、ヘルシャー帝国から勇者一行に会いに使者が来るのだという。

元々、エヒト神による「神託」がなされてから光輝達が召喚されるまでほとんど間がなかった。そのため、同盟国である帝国に知らせが行く前に勇者召喚が行われてしまい、召喚直後の顔合わせができなかったのだ。

帝国は三百年前にとある名を馳せた傭兵が建国した国であり、冒険者や傭兵の聖地とも言うべき完全実力主義の国だからそうそう俺たちのことを受け入れられるとは俺は思ってもいないのだが

そんな訳で、召喚されたばかりの頃に顔合わせをしても軽んじられる可能性があった。もちろん、教会を前に、神の使徒に対してあからさまな態度は取らないだろうが。王国が顔合わせを引き伸ばすのを幸いに、帝国側、特に皇帝陛下は興味を持っていなかった。今まで関わることもなかったのである。

しかし、今回の【オルクス大迷宮】攻略で、歴史上の最高記録である六十五層が突破されたという事実をもって帝国側も光輝達に興味を持つに至った。帝国側から是非会ってみたいという知らせが来たのだ。王国側も聖教教会も、いい時期だと了承したのである。

そんな話を帰りの馬車の中でツラツラと教えられながら、俺達は王宮に到着した。

馬車が王宮に入り、全員が降車すると王宮の方から一人の少年が駆けて来るのが見えた。十歳位の金髪碧眼の美少年である。光輝と似た雰囲気を持つが、ずっとやんちゃそうだ。その正体はハイリヒ王国

王子ランデル・S・B・ハイリヒである。

ランデル殿下は、思わず犬耳とブンブンと振られた尻尾を幻視してしまいそうな雰囲気です。駆け寄ってくると思われ、大声で叫んだ。

「香織！ よく帰った！ 待ちわびたぞ！」

「ランデル殿下。お久しぶりです」

パタパタ振られる尻尾を幻視しながら微笑む香織。そんな香織の笑みに一瞬で顔を真っ赤にするランデル殿下は、それでも精一杯男らしい表情を作って香織にアプローチをかける。

「ああ、本当に久しぶりだな。お前が迷宮に行ってる間は生きた心地がなかったぞ。怪我はしてないか？ 余がもつと強ければお前にこんなことさせないのに……」

ランデル殿下は悔しそうに唇を噛む。香織としては守られるだけなどお断りなのだが、少年の微笑ましい心意気に思わず頬が緩む。

「お気づかい下さりありがとうございます。ですが、私なら大丈夫ですよ？ 自分で望んでやっていることですから」

「いや、香織に戦いは似合わない。そ、その、ほら、もつとこう安全な仕事もあるだろう？」

「安全な仕事ですか？」

ランデル殿下の言葉に首を傾げる香織。ランデル殿下の顔は更に赤みを増す。となりで面白そうに成り行きを見ている雫と俺は察しがついて、少年の健気なアプローチに思わず苦笑いする。

「う、うむ。例えば、侍女とかどうだ？ その、今なら余の専属にしてやってもいいぞ」

「侍女ですか？ いえ、すみません。私は治療師ですから……」

「な、なら医療院に入ればいい。迷宮なんて危険な場所や前線なんて行く必要ないだろう？」

王宮の直ぐ傍にある。要するに、ランデル殿下は香織と離れるのが嫌なのだ。しかし、そんな少年の気持ちは鈍感な香織には届かない。

「いえ、前線でなければ直ぐに癒せませんから。心配して下さりありがとうございます」

「うう」

健気だな。青春だな。

俺はそんなことを思いながらニヤニヤしていると

「ランデル殿下、香織は俺の大切な幼馴染です。俺がいる限り、絶対に守り抜きますよ」

光輝としては、年下の少年を安心させるつもりで善意全開に言ったのだが、この場においては不適切な発言だった。

意識するならば、俺の女に手を出してんじゃねえよ。俺がいる限り香織は誰にも渡さねえ！ 絶対にな！」

「香織を危険な場所に行かせることに何とも思っていないお前が何を言う！ 絶対に負けぬぞ！ 香織は余という方がいいに決まっているのだからな！」

「え〜と……」

ランデル殿下の敵意むき出しの言葉に、香織はどうしたものかと苦笑いし、光輝はキョトンとしている。雫はそんな光輝を見て溜息だ。俺はその雫をフォローに回る

ガルルと吠えるランデル殿下に何か機嫌を損ねることをしてしまったのかと、光輝が更に煽りそうなセリフを吐く前に、涼やかだが、少し厳しさを含んだ声が響いた。

「ランデル。いい加減にしなさい。香織が困っているでしょう？ 光輝さんにもご迷惑ですよ」

「あ、姉上!? ……し、しかし」

「しかしではありません。皆さんお疲れなのに、こんな場所に引き止めて……相手のことを考えていないのは誰ですか？」

「うっ……で、ですが……」

「ランデル？」

「よ、用事を思い出しました！ 失礼します！」

ランデル殿下はどうしても自分の非を認めたくなかったのか、いきなり踵を返し駆けていってしまった。その背を見送りながら、王女リリアーナは溜息を吐く。

「香織、光輝さん、弟が失礼しました。代わってお詫び致しますわ」

リリアーナはそう言って頭を下げた。美しいストレートの金髪が

さらりと流れる。

「ううん、気にしてないよ、リリイ。ランデル殿下は気を使ってくれただけだよ」

「そうだな。なぜ、怒っていたのかわからないけど……何か失礼なことをしたんなら俺の方こそ謝らないと」

「……お前らもうちよつと自分の言動と相手の気持ちを考えような。」
すると二人がキョトンとしている。

「悪い。こんな面倒なことになったのはこつちのせいだ。二人に代わって後から俺が謝っておくよ。……これ以上大炎上されたらこつちが困るからな。」

「いえ、ランデルのことは気にする必要ありませんわ。あの子が少々暴走気味なだけですから。それよりも……改めて、お帰りなさいませ、皆様。無事のご帰還、心から嬉しく思いますわ」

「こつちこそ忙しい中出迎えありがとうございますリリイ。」

俺は軽く頭を下げる

「とりあえず帝国陛下の謁見の打ち合わせってできるか？できれば国王に迷宮の報告とかも済ませてしまいたいし。」

「ええ。快斗さんならそういうと思うっていたので一時間後に謁見の間を取っています。」

「おつ。気が利くじゃん。それとお土産。簡単に庶民的な味だけど結構美味しかったから家族で食ってくれ。」

「あつ。す、すみません。」

「別にいいって。お世話になっているお礼ついで。」

と雫やクラスメイトのいつ買ったんだよという視線は無視する

「んじゃここので解散な。お疲れ様。」

といい俺は苦笑する

迷宮での疲れを癒しつつ、居残り組にベヒモスの討伐を伝え歓声が上がったり、これにより戦線復帰するメンバーが増えたり、愛子先生が一部で“豊穰の女神”と呼ばれ始めていることが話題になり彼女を身悶えさせたりと色々あったが。これは割愛する。

なお、ランデル陛下は俺が買ってきたお土産を気に入りにすぐに機嫌

が良くなったこともまた別の話

帝国の使者

それから三日、遂に帝国の使者が訪れた。

現在、俺達、迷宮攻略に赴いたメンバーと王国の重鎮達、そしてイシュタル率いる司祭数人が謁見の間に勢ぞろいし、レッドカーペットの中央に帝国の使者が五人ほど立ったままエリヒド陛下と向かい合っていた。

「使者殿、よく参られた。勇者方の至上の武勇、存分に確かめられるがよからう」

「陛下、この度は急な訪問の願い、聞き入れて下さり誠に感謝いたします。して、どなたが勇者様なのでしょう？」

「うむ、まずは紹介させて頂こうか。光輝殿、前へ出てくれるか？」

「はい」

陛下と使者の定型的な挨拶のあと、早速、光輝達のお披露目となった。陛下に促され前にでる光輝。召喚された頃と違い、まだ二ヶ月程度しか経っていないのに随分と精悍な顔つきになっている。

「ほう、貴方が勇者様ですか。随分とお若いすな。失礼ですが、本当に六十五層を突破したのです？ 確か、あそこにはベヒモスという化物が出るよと記憶しておりますが……」

使者は、光輝を観察するように見やると、イシュタルの手前露骨な態度は取らないものの、若干、疑わしそうな眼差しを向けた。使者の護衛の一人は、値踏みするように上から下までジロジロと眺めている。

「えっと、ではお話ししましょうか？ どのように倒したかとか、あつ、六十六層のマップを見せるとかどうでしょう？」

光輝は信じてもらおうと色々提案するが使者はあつさり首を振りニヤツと不敵な笑みを浮かべた。

「いえ、お話は結構。それよりも手っ取り早い方法があります。私の護衛一人と模擬戦でもしてもらえませんか？ それで、勇者殿の実力も一目瞭然でしょう」

「えっと、俺は構いませんが……」

光輝は若干戸惑ったようにエリヒド陛下を振り返る。エリヒド陛下は光輝の視線を受けてイシユタルに確認を取る。イシユタルは頷いた。神威をもって帝国に光輝を人間族のリーダーとして認めさせることは簡単だが、完全実力主義の帝国を早々に本心から認めさせるには、実際戦ってもらうのが手っ取り早いと判断したのだ。

でもその選択は間違っているとも知らずに

「構わんよ。光輝殿、その実力、存分に示されよ」

「決まりですな、では場所の用意をお願いします」

こうして急遽、勇者対帝国使者の護衛という模擬戦の開催が決定したのだった。

光輝の対戦相手は、なんとも平凡そうな男だった。高すぎず低すぎない身長、特徴という特徴がなく、人ごみに紛れたらすぐ見失ってしまいそうな平凡な顔。一見すると全く強そうに見えない。

刃引きした大型の剣をだらんと無造作にぶら下げており。構えらしい構えもとつていかなかった。だけど

「うわあ。相手かなり強いなあ。これ光輝限界突破使わなければ負けるだろ。」

俺はあつさり相手の力量をみぬいていた

「どういうこと?」

「あれは誘いだよ。多分光輝の奴そのまま突っ込んでいくだろうよ。舐められているって思っただけで馬鹿正直にな。」

恵里に聞かれたので答える。

「相手を動かす。それが殺し合いの基本だ。自分の思い通りにならないければ攻撃は単調になる。それも寸止めにしてしようとして他のことに目線を逸らしているからな。」

バキイ!!

「ガフツ!?!」

「ほらな。」

吹き飛んだ光輝を見ながら俺は解説する。

「はあく、おいおい、勇者つてのはこんなもんか? まるでなつちやい

ねえ。やる気あんのか？」

平凡な顔に似合わない乱暴な口調で呆れた視線を送る護衛。その表情には失望が浮かんでいた。

確かに、光輝は護衛を見た目で判断して無造作に正面から突っ込んでいき、あつさり返り討ちにあつたというのが現在の構図だ。光輝は相手を舐めていたのは自分の方であつたと自覚し、怒りを抱いた。今度は自分に向けて。

「すみませんでした。もう一度、お願いします」

今度こそ、本気の目になり、自分の無礼を謝罪する光輝。護衛は、そんな光輝を見て、「戦場じゃあ“次”なんてないんだがな」と不機嫌そうに目元を歪めるが相手はするようだ。先程と同様に自然体で立つ。

光輝は気合を入れ直すと再び踏み込んだ。

唐竹、袈裟斬り、切り上げ、突き、と“縮地”を使いこなしながら超高速の剣撃を振るう。その速度は既に、光輝の体をブレさせて残像を生み出しているほどだ。

しかし、そんな嵐のような剣撃を護衛は最小限の動きでかわし捌き、隙あらば反撃に転じている。時々、光輝の動きを見失っているにもかかわらず、死角からの攻撃にしっかりと反応している。恐らく先読を持っているのだろう。

すると光輝と何か話している護衛の姿がいる

チラツとイシュタル達聖教会関係者を見ると護衛は不機嫌そうに鼻を鳴らした。

「辞めだ。それとそこのお前。俺と手合わせしろ。」

と俺の方を指差す。俺は急な指定に少し驚く

「……俺ですか？」

「ああ。お前の方がこいつよりかは手応えがあるだろうしな。」

「……まあいつか。」

俺は観覧席から飛び降り、着地する。

「ちよ、快斗。」

「光輝どいてろ。こいつは俺の獲物だ。」

俺は軽く睨みを利かせ剣を自然体で持つ。これが今の俺のスタイ

ルになっていた。

「……」

「……」

数秒睨み込みそして視線や重心だけでやり取りをする。そして

護衛の男は死角から剣を放ってくる。俺はバックステップで避けそのまま剣を振るうフェイントにかけ、

護衛の前で手を叩く

音が最大限にならせて意識の波長に合わせ相手を怯ませる技、クラップスタナー

実際護衛の人間はぎよつとして俺を見ようとしたが

「一本だよな。」

懐にしまつてあつた小太刀を確実に後ろから首元へ押し付ける

誰もが動きやしない。動けない

それほどに圧倒的だったのだ。

「……あ、ああ。」

「言つとくけどさっきの奴と一緒にしないで。俺はあいつみたいに理想を押し付けないし自分なりの正義がある。……ただ、俺は友達に会いに行くことと、元の世界に帰ること、そして大事な人を守ることが目標だ。この世界のことなんて知っちゃことじゃない。戦争やるなら勝手にやつてろつて話だ。」

護衛らしき人。いや、皇帝陛下に剣を突きつけ俺たちしか聞こえないように話す

「でも、その特別に手を出したのならば俺は容赦なく殺す。それがクラスメートや、教会であつてもな。」

いわゆる恐喝するために俺は殺気を込める。元よりこの世界はどうでもいいのだ。

「……いい殺気を持っているんじゃないか。お前は戦争に協力する気は？」

「今のところは参加する気だけど従う気はないぞ。俺は俺なりのやり方があるしな。従わせたかったら俺よりも強い奴を探してこい。皇帝陛下。それはあんたらのやり方だろ？そこの侵入しているネズミ

と一緒にな。」

「……なるほど。そりやそうだな。はっはっは、止めだ止め。ばっちりバレてやがる。こいつは正真正銘の化け物だ。」

すると俺は剣を収める

「楽しそうだな。」

「おいおい、俺は『帝国』の頭だぞ？ 強い奴を見て、心が踊らなきや嘘つてもんだろ？」

「……否定したいけど、ちよつと分かるのが腹たつな。」

強い相手がいると戦いたくなるのは俺も同じだしな。

「……なるほどお前も武人ってことか。」

「一応次期八重樫流のトップに立つからな。生憎、剣道はやったことがあるけど剣術には触れたことがないようなその勇者とは違う。それに俺はこつちの世界で既に殺しをしたことがあるからな。」

「ほう。……こりや頼もしい。」

実際そういう依頼をハジメが落ちてからは中心的に受けている。まあつまり俺だけは準備はできているってことだ

「そりや最後だ。お前帝国にこないか？」

皇帝陛下が俺にそういうと全員が驚いたように俺を見る

でも答えは決まっている

「大事な人達を守る為にここに居るからな。戦う理由なんてそんなもんだろ？」

「……なるほどな。こりや勧誘も無理そうだ。」

すると高笑いする皇帝陛下に俺も呆れてしまう。

「んで変装はずせよ。」

「そうだな。」

肩を竦め剣を納めると、右の耳にしていたイヤリングを取った。

すると、まるで霧がかかったように護衛の周囲の空気が白くボヤけ始め、それが晴れる頃には、全くの別人が現れた。

四十代位の野性味溢れる男だ。短く切り上げた銀髪に狼を連想させる鋭い碧眼、スマートでありながらその体は極限まで引き絞られたかのように筋肉がミッシリと詰まっているのが服越しでもわかる。

その姿を見た瞬間、周囲が一斉に喧騒に包まれた。

「ガ、ガハルド殿!？」

「皇帝陛下!？」

そう、この男、何を隠そうヘルシャー帝国現皇帝ガハルド・D・ヘルシャーその人である。まさかの事態にエリヒド陛下が眉間を揉みほぐしながら尋ねた。

「どういうおつもりですか、ガハルド殿」

「これは、これはエリヒド殿。ろくな挨拶もせず済まなかった。ただな、どうせなら自分で確認した方が早いだろうと一芝居打たせてもらったのよ。今後の戦争に関わる重要なことだ。無礼は許して頂きたい」

謝罪すると言いながら、全く反省の色がないガハルド皇帝。それに溜息を吐きながら「もう良い」とかぶりを振るエリヒド陛下。

俺はその様子を見て少し笑ってしまう

やばい。このおっさんこっち側の人間だ。

その後に予定されていた晚餐で帝国からも勇者を認めるとの言質をとることができ、一応、今回の訪問の目的は達成されたらしい

ちなみに、早朝訓練をしている雫を見て気に入った皇帝が愛人にどうだと割かし本気で誘ったというハプニングがあった。雫は丁寧な断り、皇帝陛下も「まあ、焦らんさ」と不敵に笑いながら引き下がったので特に大事になったわけではなかったが、その時、光輝を見て鼻で笑ったことで光輝はこの男とは絶対に馬が合わないと感じ、しばらく不機嫌だった。

俺と雫のため息と苦労が増え、頭皮と胃の心配をし始めるのだった

喪失

「おい。香織いたか？」

「いえどこにもいないわ？」

「あいつもしかして外に行ったのか？」

あれから少ししたち70層の攻略が終わったところで一休みをすることが決まった俺たちはホルアドで休憩していたのだが。

俺たちのグループ総出で行方不明の香織の捜索が行われていた

「チツ。とりあえず光輝と龍太郎は街の中で。俺と雫、鈴と恵里は街の外を探すぞ。」

「お、おう。」

「ええ。」

「うん。」

といい急いで外を出る。どうせあいつのことだから危険な街の外に向かったんだろう。

ついでに光輝を話したのはハジメのことを無自覚に話しかけるだろう醜態によってまた香織が無茶をしでかすのを防ぐためであり、こんな中でも俺の頭は冷静だった

「……雫。」

「ええあつちよ。」

雫の香織センサーには反応があつたらしく俺も気配感知を使いそれに付随する。

「いた。」

「あのバカ。」

しばらく走っているとすでにデイロスと呼ばれる魔物にトドメを刺されそうになっているところだあつた

「雫。」

「ええ。」

俺たちは一瞬で魔物を殺していく

「香織!!」

「う雫ちゃん？快斗くん。」

「ええ。そうよ。あなたの親友の雫ちゃんよ。怒髪天を突きそうな雫ちゃんよ。今もこの瞬間も、香織の頬が真っ赤に腫れるまでつねつてやりたい雫ちゃんよ。」

「お前とりあえずこの後説教だからおぼえとけよ。その前に。」

俺は魔力回復薬を香織の口元に突っ込む。

「ああもう口元から垂れているじゃない。」

と俺と雫は大きな子供の世話に明け暮れていた。

「たく。無茶をするなって言わないけどせめて俺か雫に話しかけて安全マージンを取ってからにしろ。あのときに無茶をするときは俺か雫か誰かがいるときだけっていったよな?」

「うっ。ごめんなさい。雫ちゃんが楽しそうに快斗くんとデートって言っていたからいい辛くて」

「ちよつと香織!!」

「デート?」

確かに今日は雫と買い物や街の中を色々食べ歩きしていたのでデートと呼べるものであったのだが

「……」

明らかに目が泳いでいる雫。だからおめかしかかしてたのか。

「はあ。たく。まあそのことには触れないでおくけど……せめて鈴や恵里を連れていってくれ。もう二度とあんな思いはしたくないから。」

「……っ!」

「……そうね。今回はご飯を誘うために気づいたからよかったもの的一步間違えれば死んでいたのよ。」

「ご、ごめんなさい。」

「とりあえず、正座な。今日という今日は一度その突撃癖を思いつきりぶつた斬つてやるから。」

と俺と雫は香織に説教を始める。

ガミガミと説教を始めると雫も俺も二度とこういうことをしないようにと思う存分に怒ることにした。

モンスターが何度か襲ってきたがチートの俺たちには全く歯が立

たないでいた

若干雫は別方向に怒っている気がしたのだが無視することにした。

「……分かったか？二度と一人でフィールドに出るなよ。」

「は、はい。」

と俺たちの説教が終わる頃には恵里や鈴どころか光輝や龍太郎もきていてなぜか直立不動の体勢ですつと立っていた。

「ん？お前から来たのか？来てたんだったら街の中でやったのに。」

「……あつ。うん。」

「さすがにちよつと入りづらくて。」

まあ気づかないで説教していた俺らも俺らだな

「でも無事のようなね。よかったら〜。」

「おうおう。らしくねえ無茶やらかしたなあ。休むために地上に戻つたとはいえよお。別に鍛錬に付き合うくらい問題ねえんだから、遠慮するなよ。」

「みんな。心配かけてごめんね。町外れの魔物ぐらい私一人でも大丈夫だと思っただけけど…引き際を間違えちゃった。本当にごめんなさい。」

「最近じゃ俺が全部指揮とっているからなあ。雫か永山に一旦任せるか？」

と俺は苦笑していると少し鈴が足を引きずっていることに気づく

「……鈴。足どうした？」

「へ？」

「……ちよつと触るぞ。」

俺は一旦視線を落とし鈴の足を触るとうつつと小さな呻き声をあげる。

「やっぱどつかでくじいたか。」

「よ、よく気づいたね。」

「剣道でよく無茶しでかす奴がいるからな。香織は魔力尽きているから辻にかけてもらうか。おんぶと抱っこどっちがいい？」

「へ？それじゃあ抱っこ？」

「了解。」

と俺はお姫様抱っこをし、鈴を持ち上げる

「ちよ、快斗くん!？」

「いいから捕まっておけ。さすがにこれ以上けが人増やすっておいこら恵里。お前は動けるだろうが。」

「……鈴ばっかりずるい。それに最近快斗くん成分が足りないから。」

「お前……ああもういい。このままいくぞ。……クラスのやつにどんな目線向けられるんだろうなあ。」

俺は軽いため息を吐きながら街へと向かう。

その後香織をお姫様抱っこをした雫にジト目で睨まれ、クラスメイ
トに説明したのち永山と野村、遠藤と辻に愚痴を聞いてもらったのは
いうまでもない

4〜5巻

最悪の会合

「お疲れさん。」

「ええそつちこそ。」

俺と雫は 戦闘の終了と共に、油断なく周囲を索敵しつつ互いの健闘をたたえ合った。

「ふう、次で九十層か……この階層の魔物も難なく倒せるようになったし……迷宮での実戦訓練ももう直ぐ終わりだな」

「だからって、気を抜いちゃダメよ。この先にどんな魔物やトラップがあるかわかったものじゃないんだから」

「雫は心配しすぎってえもんだろ？ 俺等あ、今まで誰も到達したことの無い階層で余裕持って戦えてんだぜ？ 何が来たって蹴散らしてやんよ！ それこそ魔族が来てもな！」

感慨深そうに呟く光輝に雫が注意をすると、脳筋の龍太郎が豪快に笑いながらそんな事を言う。そして、光輝と拳を付き合わせて不敵な笑みを浮かべ合った。その様子に溜息を吐きながら、雫は眉間の皺を揉みほぐした。

……フラグにしか聞こえないんだけどな

俺は少し警戒心を浮かべる

というのも前の休みにギルドによったところウルの北の山脈で異常事態が起こっているらしい。俺も一度調査依頼を頼まれたのだが偶然迷宮の攻略の日と被ってしまったのだ。

ウルの町には今ごろ愛ちゃんに向かっていているはずなので偶然とは思えないのだった

それに

「……やっぱりここにもねえな。」

あと十層で迷宮の最下層（一般的な見解）にたどり着くというのに、未だ、ハジメの痕跡は僅かにも見つかっていない。

それは希望でもあるが、遥かに強い絶望でもある。自分の目で確認

するまでハジメの死を信じないと心に決めても、階層が一つ下がり、何一つ見つからない度に押し寄せてくるネガティブな思考は、そう簡単に割り切れるものではない。まして、ハジメが奈落に落ちた日から既に四ヶ月も経っている。強い決意であっても、暗い思考に侵食され始めるには十分な時間だ。

香織も同じらしく自身のアーティファクトである白杖を、まるで継り付くようにギュツと抱きしめた。すると

「カッオリ〜ン!! そんな野郎共じゃなくて、鈴を癒して〜! ぬつとりねつとりと癒して〜」

「ひゃわ! 鈴ちゃん! どこ触ってるの! っていうか、鈴ちゃんは怪我してないでしょ!」

「してるよお! 鈴のガラスのハートが傷ついてるよお! だから甘やかして! 具体的には、そのカオリンのおっぱおで!」

「お、おっぱ……ダメだってば! あっ、こら! やんっ! 雫ちゃん、助けてえ!」

「ハアハア、ええのんか? ここがええのんか? お嬢ちゃん、中々にびんかッへぶ!」

「……はあ、いい加減にしなさい、鈴。男子共が立てなくなってるでしょが……たってるせいで……」

だのおっさんと化した鈴が、人様にはお見せできない表情でデヘデヘしながら香織の胸をまさぐり、雫から脳天チョップを食らって撃沈した。

「おい。おっさん自重しろ。」

俺がさらにチョップを食らわせ頭にタンコブを作ってピクピクと痙攣している鈴を、何時ものように恵里が苦笑いしながら介抱する。

「うう、ありがとう、雫ちゃん。恥ずかしかったよお……」

「よしよし、もう大丈夫。変態は快斗が退治したからね?」

と百合百合しい雰囲気広がっている中で

「大丈夫だよ。後10層だから。」

「うん。私たちも探すから。」

「……たく。本当よく見てるなお前ら。」

俺は苦笑し恵里と鈴の頭を軽く叩く

「サンキュー。んじゃ行くか。」

俺は立ち上がり号令をかける。メルド団長から現場引き継いだ俺はすでにリーダーとして前線の指揮をとっていた。

原口 快斗 17歳 男 レベル：91

天職 王

筋力 909

体力 909

耐性 909

敏捷 3030

魔力 909

魔耐 909

技能 剣術「+斬撃速度上昇」「+抜刀速度上昇」「+威力向上」「+無拍子」「+瞑想」「+精神統一」「+受け流し」「+剣の極」 忍術「+小太刀」「+毒物生成」「+身代わりの術」「+無音歩行」「+高速移動」「+十分身の術」 体術「+身体強化」「+部分強化」「+集中強化」「+浸透破壊」 気配遮断 気配感知「+特定感知」 壁歩「+効果継続大」 投擲術「+必中」「+威力拡大」 「+複数展開」 統率「+範囲拡大」 「+育成」 「+忠誠心」 人心掌握「+人誑し」 爆発物生成「+火薬合成」 「+火薬鑑定」 幻影魔法適正「+消費魔力減少」 「+魔力効率上昇」 「+連続発動」 「+複数同時発動」 「+遅延発動」 「+付加発動」 限界突破「+覇潰」 「+最後の力」 毒耐性 先読 女難 苦労人 成長限界突破
言語理解

成長スピードが桁違いに早いのだ。俺も香織と一緒に訓練をしたりギルドで依頼を受けたりしている分があり寝る間も惜しんで、ひたすら自分の出来ることを愚直に繰り返してきた結果だ。

既に、八十九層のフロアは九割方探索を終えており、後は現在通っているルートが最後の探索場所だった。今までのフロアの広さから考えて、そろそろ階下への階段が見えてくるはずである。

その予想は当たっており、出発してから十分程で一行は階段を発見した。トラップの有無を確かめながら慎重に薄暗い螺旋階段を降り

ていく。体感で十メートルほど降りた頃、遂に光輝達は九十層に到着した。

一応、節目ではあるので何か起こるのではと警戒していた光輝達。しかし、見た目、今まで探索してきた八十層台と何ら変わらない作りのようだった。さつそく、マップピングしながら探索を開始する。迷宮の構造自体は変わらなくても、出現する魔物は強力になっているだろうから油断はしない。

警戒しながら、変わらない構造の通路や部屋を探索してく俺達。探索は順調だった。だったのだが、やがて、一人また一人と怪訝そうな表情になっていった。

「……………どうなってる？」

一行がかなり奥まで探索し大きな広間に出た頃、遂に不可解さが頂点に達し、表情を困惑に歪めて光輝が疑問の声を漏らした。他のメンバーも同じように困惑していたので、光輝の疑問に同調しつつ足を止める。

「さすがに一体の魔物に遭遇しないのはおかしいな。」

降りてから3時間で既に探索は、細かい分かれ道を除けば半分近く済んでしまっている。今までなら散々強力な魔物に襲われてそう簡単には前に進めなかった。ワンフロアを半分ほど探索するのに平均二日はかかるのが常であったのだ。

「……………なんつうか、不気味だな。最初からいなかったのか？」

龍太郎と同じように、メンバーが口々に可能性を話し合うが答えが見つかるはずもない。困惑は深まるばかりだ。

「……………光輝。一度、戻らない？ 何だか嫌な予感がするわ。メルド団長達なら、こういう事態も何か知っているかもしれないし」

「俺もできれば下がりたいな。なんというかあの時のように嫌な予感がする。」

俺と雫も同じ意見だったらしく発言するが

「いや、進もう。何らかの障害があったとしてもいざれにしる打ち破って進まなければならぬだろうし。それにこの階層を乗り越えないと次の階層にいつまでたつてもいけないだろう。」

「……」

まあそうなるか。というよりも最近俺を敵対的に見るようになった。何が気に入らないのかは大体わかるのだけどまあそうなるか。

だけど不意に、辺りを観察していたメンバーの何人かが何かを見つけたようで声を上げた。

「これ……血……だよな？」

「薄暗いし壁の色と同化してるから分かりづらいけど……あちこち付いているよ」

「おいおい……これ……結構な量なんじゃ……」

表情を青ざめさせるメンバーの中から永山が進み出て、血と思しき液体に指を這わせる。そして、指に付着した血をすり合わせたり、臭いを嗅いだりして詳しく確認した。

「天之河……二人の提案に従った方がいい……これは魔物の血だ。それも真新しい」

「そりゃあ、魔物の血があるってことは、この辺りの魔物は全て殺されたって事だろうし、それだけ強力な魔物がいるって事だろうけど……いずれにしろ倒さなきゃ前に進めないだろ？」

「いや。そういうことじゃないだろ。今まで通って来た通路や部屋にも出現したはずだ。にもかかわらず、俺達が発見した痕跡はこの部屋が初めて。それはつまり魔物を襲った痕跡を隠蔽したってことだ。」

俺の言葉に光輝もその言葉にハツとした表情になると、永山と同じように険しい表情で警戒レベルを最大に引き上げた。

「それだけ知恵の回る魔物がいるという可能性もあるけど……人であると考えたほうが自然ってことか……そして、この部屋だけ痕跡があったのは、隠蔽が間に合わなかったか、あるいは……」

「……」

光輝の言葉を引き継ぎ、突如、聞いたことのない女の声が響き渡った。男口調のハスキーな声音だ。光輝達は、ギョツとなって、咄嗟に戦闘態勢に入りながら声のする方に視線を向けた。

コツコツと足音を響かせながら、広い空間の奥の闇からゆらりと現れたのは燃えるような赤い髪をした妙齡の女。耳は僅かに尖ってお

り、肌は浅黒かった。

俺は軽く舌打ちする。その特徴は、よく知るものだったからだ。実際には見たことはないが、イシユタル達から叩き込まれた座学において、何度も出てきた種族の特徴。聖教教会の掲げる神敵にして、人間族の宿敵。そう……

「……魔人族」

誰かの発した呟きに、魔人族の女は薄らと冷たい笑みを浮かべた。

魔人族

瞳の色は髪と同じ燃えるような赤色で、服装は艶のない黒一色のライダースーツのようなものを纏っている。体にピツタリと吸い付くようなデザインなので彼女の見事なボディラインが薄暗い迷宮の中でも丸分かりだった。しかも、胸元は大きく開いており、見事な双丘がこぼれ落ちそうになっている。また、前に垂れていた髪を、その特徴的な僅かに尖った耳にかける仕草が実に艶かしく、そんな場合ではないと分かっているながら幾人かの男子生徒の頬が赤く染まる。

「勇者はあんたでいいんだよね？　そのアホみたいにキラキラした鎧着ているあんたで」

「あ、アホ……う、煩い！　魔人族なんかアホ呼ばわりされるいわれはないぞ！　それより、なぜ魔人族がこんな所にいる！」

あまりと言えばあまりな物言いに軽くキレた光輝が、その勢いで驚愕から立ち直って魔人族の女に目的を問いただした。

しかし、魔人族の女は、煩そうに光輝の質問を無視すると心底面倒そうに言葉が続ける。

「はあく、こんなの絶対いらねいだろうに……まあ、命令だし仕方ないか……あんた、そう無闇にキラキラしたあんた。一応聞いておく。あたしらの側に来ないかい？」

「な、なに？　来ないかって……どう言う意味だ！」

「呑み込みが悪いね。そのまんまの意味だよ。勇者君を勧誘してんの。あたしら魔人族側に来ないかって。色々、優遇するよ？」

「まあ敵を誘うってことは当たり前だろうからな。人間族の士気を落とすには丁度いいしな。」

俺も納得したようにすると

「断る！　人間族を……仲間達を……王国の人達を……裏切れなんて、よくもそんなことが言えたな！　やはり、お前達魔人族は聞いていた通り邪悪な存在だ！　わざわざ俺を勧誘しに来たようだが、1人でやって来るなんて愚かだったな！　多勢に無勢だ。投降しろ！」

光輝の言葉に、安心した表情をするクラスメイト達。光輝なら即行

で断るだろうとは思っていたが、ほんの僅かに不安があったのは否定できない。もつとも、龍太郎や雫など幼馴染達は、欠片も心配していなかったようだが。

一方の、魔族の女は、即行で断られたにもかかわらず「あっそ」と呟くのみで大して気にしていないようだ。むしろ、怒鳴り返す光輝の声を煩わしそうにしている。

「一応、お仲間も一緒にいいって上からは言われてるけど？ それでも？」

「答えは同じだ！ 何度言われても、裏切るつもりなんて一切ない！」
内心舌打ちしてしまう

普通に考えて、いくら魔法に優れた魔族とはいえ、こんな場所に一人で来るなんて考えられない。この階層の魔物を無傷で殲滅し、あまつさえその痕跡すら残さないなどもっと有り得ない。そんなことが出来るくらい魔族が強いなら、はなから人間族は為すすべなく魔族に蹂躪されていたはずだ。

それに、この階層に到達できるほどの人間族十五人を前にしても魔族の女は全く焦っていない。戦闘の痕跡を隠蔽したことも考えれば最初に危惧した通り、ここで待ち伏せしていたのだと推測すべきで、だとしたら地の利は彼女の側にあると考えるのが妥当だ。何が起きてても不思議ではない。

そんな危機感は、直ぐに正しかったと証明された。

「そう。なら、もう用はないよ。あと、一応、言っておくけど……あんなの勧誘は最優先事項ってわけじゃないから、殺されないなんて甘いことは考えないことだね。ルトス、ハベル、エンキ。餌の時間だよ！」
魔族の女が三つの名を呼ぶのと、バリントツ！ という破碎音と共に、永山と雫が苦悶の声を上げて吹き飛ぶのは、そして俺が魔物を切り裂いたのは同時だった

「ぐっ!？」

「がっ!？」

「あぶねっ。」

俺は急に現れた、ライオンの頭部に竜のような手足と鋭い爪、蛇の

尻尾と、鷲の翼を背中から生やす奇怪な魔物を切り落とした。

「キメラか。隠蔽。いや迷彩か。気配感知に反応はなかったし。まあ、行動中は完全には力を発揮出来ないように、空間が揺らめいてしまうという欠点だな。」

「……ほう。あんたは反応できるんだ。」

「バカか透明な敵ならまだしも動いたら出てくる敵なんて俺はなんともないからな。」

実際八重樫流で気配を全く感じないのに殺しにくる連中にな

でも威力はやばそうだな

クラスメイトの中でもトップクラスの近接戦闘能力を持つ永山と雫を一撃で行動不能に陥れた

つまりは当たらなければいいだけのこと

「光の恩寵と加護をここに！」 〃回天〃 〃周天〃 〃天絶〃！」

香織がほとんど無詠唱かと思うほどの詠唱省略で同時に三つの光系魔法を発動した。

一つは、切り裂かれて吹き飛び、地面に叩きつけられた雫と永山を即座に癒す光系中級回復魔法 〃回天〃。複数の離れた場所にいる対象を同時に治癒する魔法だ。痛みに呻きながら何とか起き上がろうともがく二人に淡い白光が降り注ぎ、尋常でない速度で傷が塞がっていく。

次いで、少しでも気を逸らせば直ぐに見失いそうな姿なき揺らめく三つの存在に、雫達に降り注いだのと同じ淡い白光が降り注ぎ纏わりつく。すると、その光はふわりと広がって空間に光の輪郭が出現した。

光系の中級回復魔法 〃周天〃。これは、いわゆるオートリジェネだ。回復量は小さいが一定時間ごとに回復魔法が自動で掛かる。この魔法は掛かっている間、魔力光が纏わりつくという特徴がある。香織は、その特性を利用し、回復効果を最小限にして敵に使用することで間接的に姿を顕にしたのだ。

「サンキュー香織。」

俺はそのうちの一体を切り捨てる。その一瞬があれば回復効果が

ある敵でも一撃で倒せばいいだけだった

2体のキメラは、やや苛立ったように再度攻撃に移ろうとした。稼げた時間は一瞬。問題などないと。しかし、一瞬とはいえ、貴重な時間を稼げた事に変わりはない。その時間を光輝達が逃すはずはないだろう。

「雫から離れろおお!!」

永山はいいのか？ とツツコミを入れてはいけない。光輝は、怒りを多分に含ませた雄叫び上げながら「縮地」で一気に雫の近くにいたキメラに踏み込んだ。光輝の移動速度が焦点速度を超えて背後に残像を生み出す。振りかぶった聖剣が一刀のもとにキメラの首を跳ねんと輝きを増す。

同時に、龍太郎も永山を襲おうとしていたキメラへと空手の正拳突きを構えを取った。直接踏み込んで攻撃するより、籠手型アーティファクトの能力である衝撃波を飛ばしたほうが早いと判断したからだ。龍太郎から裂帛の気合が迸り、籠手に魔力が収束していく。

さらに、檜山パーティーの及川は片手を突き出し、危機感から続いていた詠唱を完成させ、強力な炎系魔法を発動させた。「海炎」という名の炎系中級魔法は、文字通り、炎の津波を操る魔法で分類するなら範囲魔法だ。素早い敵でも、そう簡単には避けられない。

光輝の聖剣が壮絶な威力と早さをもって大上段から振り下ろされる。龍太郎の正拳突きが、これ以上ないほど美しいフォームから繰り出され、それにより凄絶な衝撃波が砲弾のごとく突き進む。及川の死を運ぶ紅蓮の津波が目標を呑み込み灰塵にせんと迸った。

だが……

「ルウガアアア!!」

「グウルウオオオ!!」

そこか。

隠れている敵を切り捨てる為俺はあえて攻撃をせずどこに居るかの確認だけするのだったが。体長二メートル半程の見た目はブルータルに近い魔物だった。しかし、いわゆるオークやオーガと言われるRPGの魔物と同様に、ブルータルが豚のような体型であるのに対

して、その魔物は随分とスマートな体型だ。まさに、ブルタールの体を極限まで鍛え直し引き絞ったような体型である。実際、先程の不意打ちからしても、膂力・移動速度共に、ブルタールの比ではなかった。それでも俺の速さと攻撃力に沈黙すると恵里がすぐさま詠唱する。しかし次の瞬間、多足亀が炎を吸収しきつて一度は閉じていた口を再びガパツと大きく開いた。同時に背中の中の甲羅が激しく輝き、開いた口の奥に赤い輝きが生まれる。まるで、エネルギーを集めて発射寸前のレーザー砲のようだ。

その様子を見た恵里が、表情に焦りを浮かべた。魔法を放ったばかりで対応する余裕がないからだ。だが、その焦りは、腕の中の親友がいつも通りの元気な声で吹き飛ばした。

「にやめんな！ 守護の光は重なりて 意志ある限り蘇る “天絶”！」

刹那、鈴達の前に十枚の光のシールドが重なるように出現した。そのシールドは全て、斜め四十五度に設置されており、シールドの出現と同時に、多足亀から放たれた超高熱の砲撃はシールドを粉碎しながらも上方へと逸らされていった。

「鈴ナイス。」

「こつちの方もできたよ。」

恵里の降霊術により動き始める死んだ魔物に舌打ちをする魔人族の女。

「ちくしょう！ 何だっつんだー！」

「なんなんだよ、この魔物は！」

「くそ、とにかくやるぞー！」

そこまでの事態になってようやく檜山達や永山のパーティーが悪態を付きながらも混乱から抜け出し完全な戦闘態勢を整える。傷を負っていた雫や永山も完全に治癒されて、それぞれ眼前の見えるようになったキメラに攻撃を仕掛け始めた。

「雫合わせろ。」

「ええ。」

俺と雫の高速連携が始まる。残像すら見えない超高速の中、“無拍

子”による予備動作のない移動と斬撃。姿すら見えないのは単純な移動速度というより、急激な緩急のついた動きに認識が追いつかないからだ。さらに、剣術の派生技能により斬撃速度と抜刀速度が重ねて上昇する。鞘走りを利用した素の剣速と合わせれば、普通の生物には認識すら叶わない神速の一閃となる。それを連携できるのも俺たちの強みだろう

雫が先程受けた一撃のお返しとばかりに放たれたそれは八重檜流奥義が一〃断空”。空間すら断つという名に相応しく、銀色の剣線のみが虚空に走ったかと思えば、次の瞬間には、キメラの蛇尾が半ばから断ち切られた。

「グウルアアア!!」

「丸空きだ。」

俺はその瞬間一撃で敵を真つ二つにする

「流石の剣筋ね。」

「生憎こつちにきてからも鍛えているしな。まだ余裕だよな?」

「ええ。次に行きましょう。」

とあつさりした対応。一体くらいなら正直余裕で倒せる

「……まあこうくるよな。」

すると次は3体の魔物を押し寄せてくる。多分分裂が目的なんだろうけど

「まあ同じことよね。」

「そうだなって。」

するとさつきよりも早い速度で回っていく。俺の統率スキルは万能で未だに見せていない奥の手だった。

元々迷宮攻略で俺と恵里は基本指揮とサポートしかとっていないなかった。

というのも戦闘経験なら迷宮に潜るよりギルドの依頼を受ける方が戦闘経験はつくのだ

その有利を働いて俺中心になって攻めている。

嫌な予感がしたのを感じ俺が秘密裏に永山と雫に話した秘策が見事の中したわけだ

でも優勢なのは俺と雫、恵里と鈴のそのラインだけだった

どうやら回復役がいるらしく傷つけても傷つけても敵が減らないから焦りがでるのだろう

「だいぶ厳しいみたいだね。どうする？ やっぱり、あたしらの側についとく？ 今なら未だ考えてもいいけど？」

光輝達の苦戦を、腕を組んで余裕の態度で見物していた魔人族の女が再び勧誘の言葉を光輝達に向けた。もともと、答えなど分かっているとしても言うように、その表情は冷めたままだったが。そして、その予想は実に正しかった。

「ふざけるな！俺達は脅しには屈しない！俺達は絶対に負けはしない！それを証明してやる！行くぞ 『限界突破』！」

魔人族の女の言葉と態度に憤怒の表情を浮かべた光輝は、再びメイスを振り下ろしてきたブルータルモドキの一撃を聖剣で弾き返すと、一瞬の隙について 『限界突破』を使用した。

「ちよ。」

俺は呆れたようにしてしまうが、それを魔物が防ぎ混んでしまう

『限界突破？』は、一時的に魔力を消費しながら基礎ステータスの三倍の力を得る技能である。ただし、文字通り限界を突破している

ので、長時間の使用も常時使用もできないし、使用したあとは、使用時間に比例して弱体化してしまう。酷い倦怠感と本来の力の半分程度しか発揮できなくなるのだ。なので、ここぞという時の切り札として使用する時と場合を考えなければならない。

「あのバカ。優勢なところから倒していくのが基本だろうが。恵里。鈴。光輝のフォローに入れ。」

「りよ、了解。」

「う、うん。」

と指示を出したその時だった

「！！「グウルアアア！！」！！」

「なっ!？」

空間の揺らめきが五つ。咆哮を上げながら光輝に襲いかかった。四方を囲むように同時攻撃を仕掛けてきたキメラに、光輝は思わず驚

愕の声を上げ眼を大きく見開いた。

咄嗟に、急ブレーキをかけたつ身をかがめ正面からの一撃を避けつつ右から襲い来るキメラを聖剣の一撃で切り伏せる。そして、身にまとった聖なる鎧の性能を信じて、背後からの攻撃を胴体部分で受けて死の凶撃を耐え凌ぐ。

だが、出来たのはそこまでだった。左から迫っていたキメラの爪に肩口を挟まれ、その衝撃に吹き飛ばされているところへ包囲の外にいた最後の一体が飛びかかり両足の爪を光輝の肩に食い込ませて押し倒した。

「ぐうう!!」

「快斗くん。」

「分かっている。光輝のサポートをしろ香織。」

判断は迅速に。やっぱり一つだけ解禁するか

俺は服の中から小さな小瓶を瞬時に取り出し不自然に空いたところに投げ入れた

そして瓶が割れた瞬間

バゴオーン

と大きな音とともに火が舞い上がる

「何?」

魔族の動揺した顔が初めて見られる。燃烧の大きさからその中に大量の魔物もいたのだろう

「やっとなった声がきけたぜ。」

「……あんな何作ったのよ。」

俺が投げたのはこの世界では見られない空気に触れた瞬間に爆発する小型爆弾だ。忍者では爆薬を使った破壊工作をやったこともあったので自然と覚えたスキルのひとつだ。

するともはや光輝よりも俺たちの方にくる魔物に俺は少しため息を吐く

「いい加減学習しろよ。こっちはかり気をとられていると」

「紅蓮の焰に巻き起こりし全ての大地を焰を包め。炎帝。」

恵里の詠唱が進み青色の炎がすべての敵を包み込んでいく

「恵里。ナイスタイミング。」

「……ちっ。降霊術師なのに上級の火属性魔法まで使えるのか。」

「そういえば光輝は?」と思い一瞬光輝の方を見ると黒猫の魔物5体に苦戦している光輝がいた

……まあなんとかなるだろう。

「地の底に眠りし金眼の蜥蜴 大地が産みし魔眼の主 宿るは暗闇見
通し射抜く呪い もたらすは永久不変の闇牢獄 恐怖も絶望も悲嘆
もなく その眼を以て己が敵の全てを閉じる 残るは終焉 物言わぬ冷たき彫像 ならば ものみな砕いて大地に還せ!」

「ッ!? ヤバイッ! 谷口イ!! あれを止めろお! バリア系を使え!」

「ふえ!? りよ、了解! ここは聖域なりて 神敵を通さず!」

野村が叫び声をあげる。確か落牢って

「やば。雫。谷口のフォローに行くぞ。石化魔法だ。」

「っ!!ええ。」

鈴が「聖絶?」を展開した直後、灰色の渦巻く球体が障壁に衝突した。灰色の球体は、障壁を突破しようと思かけによらない凄まじい威力で圧力をかける。鈴は、突破させてなるものかと、自身の魔力がガリガリと削られていく感覚に歯を食いしばりながら必死に耐えた。

と、魔族の女から命令でも受けたのか、魔物の動きが変化する。複数体が一斉に鈴を狙い始めた。

だが

「よつと。」

「ここは守りきるわよ。」

俺と雫がカバーに入ることによって数体を切り捨てることには成功するのだが「聖絶?」の維持で動けない鈴に、隙間を縫うようにして黒猫が一気に接近した。野村が、咄嗟に地面から石の槍を発動させて串刺しにしようとするが、黒猫は空中でジグザグに跳躍すると、身をひねりながら石の槍を躲し、触手を全本射出した。

「谷口イ!」

「あぐう!？」

野村が鈴の名を呼んで警告するが、時すでに遅し。触手は、咄嗟に身をひねった鈴の腹と太もも、右腕を貫通した。更に捉えたまま横薙ぎに振るって鈴の小柄な体を猛烈な勢いで投げ捨てた。

「やばい。みんな離れろ!!」

俺は鈴は、血飛沫を撒き散らしながら、背中から地面に叩きつけられる前に抱きかかえる。

だけどダメージを全て回収することはできず呼吸を取り戻すと同時に激痛に耐え兼ねて悲鳴を上げた。

「ああああああ!!」

「鈴ちゃん!」

「鈴!」

その苦悶の声を聞いて香織と恵里と雫が、思わず悲鳴じみた声で鈴の名を呼ぶ。直ぐさま、香織が回復魔法を行使しようと精神を集中するが、それより鈴の施した光り輝く結界が消滅する方が早かった。

「全員、あの球体から離れろお!」

野村が焦燥感に満ちた声で警告を発する。だが、鈴の鉄壁を誇った「聖絶」と今の今まで拮抗していた魔法だ。今更、その警告は遅すぎるだろう

「……近藤。鈴を頼む。」

俺はそして鈴を近くにいた近藤に投げる。

「快斗!!」

「快斗くん!!」

雫と香織の声が聞こえる。微かに声が震えているのが分かる
おそらく俺のしようとするのが分かったのだろう
だから俺は笑ってこういった

「後は任せた。」

灰色の煙は、一瞬で俺を包み込む。魔物の影はない。着弾と同時に、一斉に距離をとったからだ。

体が重く石化していくのが分かる。石化し始めているのであるべく鼻を塞ぎ口も閉じ体内に落牢の魔法を吸い込まないようにする

大丈夫お前らうまくやれるはずだ
仲間を信頼しながら俺は暗闇の中に意識を失った

再び戦場へ

「……いつう。」

俺は目がさめると顔をしかめ、体全体の痛みがじわじわと俺に押し寄せてくる

「「快斗(くん)」「」」

すると声が聞こえそつちを見ると涙目の雫や鈴。呆れた様子 of 恵里や香織、龍太郎すら慌てたようにしている

「ん？おう。ってここは？」

「八十九層の最奥付近の部屋よ。……ほんと心配したんだから。」

すると水筒を差し出し出してくる雫に俺は悪かったと一言入れそして水をゆつくり飲む。

沈んでいる様子からは多分光輝たちは負けて敗走したのだろう。

遠藤がいけないことは多分下層に助けを求める為

天職が暗殺者であることから誰にも気付かれずに下に降りているのだろう

「他に石化された人は？」

「いや。お前のおかげで誰もいないさ。」

「ん。なら良かった。全員無事で。」

近藤が答えると俺は少しながら笑ってしまふ。すると女子が視線を横にずらしていたが気にせず俺は脳をフル回転させる。

「とりあえずまずはどうするかだな。俺もまだ足が重いから話し合いおわつたらもう30分ほど一眠りしてもいいか？ちよつと身体強化で石化の進行を抑えていたから魔力を3割くらいは回復させたい。」

「お前よくその判断できたな。」

「生憎魔法の効果は分かっていたからな。鈴が受けたら死ぬ可能性があつたし俺も逃げたかつたけど正直魔族は俺を潰しにきていた。だから確実に俺が戦闘不能になれば他の奴らに標的がいることにはならないことが分かっていたんだよ。生憎石化は体内の中に入らなければ死なないことが分かっていたしな。」

だからすぐに対応ができた。知識も剣も磨きをかけたから俺は対

応策が全て最善策だ

「とりあえず今の状況は？」

「快斗以外の前衛は全員回復しているけど、香織と辻さん。後鈴もほとんど魔力が残ってないわ。」

「香織と鈴は俺の魔力回復薬使え。俺のポケットに入っているはずだし。」

と二つの試験管みたいな栄養ドリンク色の液体を渡す

「辻は戦力外みたいにして悪いけどな。檜山たち前衛陣は基本はサポート。その隙に俺が限界突破を使つて倒すさ。」

「光輝じゃなくか？」

「生憎俺の方が今の実力は上だし。ちゃんと覚悟もしている。今の光輝に俺はあの魔族を倒せるとは思わないしな。多少無理しても俺が殺すしかないだろ。」

すると体が重く未だに完全調子ではないことに気づく。先の戦いのために身を休めることがいいだろう

「やつぱ悪いちよつと体痛いし魔力尽きかけで眠いわ。ちよつと休んでいいか？もし戦闘が始まったら起こしてくれ。」

「……ええ。ごめんなさい。快斗に全部任せてしまつて。」

「いいつて好きでやっているんだし。鈴。」

すると今まで黙っていた鈴に話しかける

「後は任せろ。」

もう一度戦意を振るい立たせる言葉をいいもう一度目を閉じる。

体をじっくり休めて、そして次の戦場に行くために

俺はすぐびくつと反応し目がさめる。感知系がなくても分かる魔力の塊に俺は少し周辺を見渡す。

「……あつ。起きた？」

「辻か？あいつらは？」

「……それが魔族と戦いにみんな外に出てる。」

「……誰が俺を起こさないことにした。」

「えっ？天之河くんだけ。」

「……はあ。ちよつくら行つてくる。」

少し寝たせいか頭のなかがすつきりしている。

「待つて。気持ちは分かるけど身を隠さないと。体も完全じゃないし。」

「生憎そんなに頭がいい方じゃないんだ。生憎仲間が殺されるついでうのに俺だけ生きるって言つても多分無理だしな。多分自殺するぞ俺。それに。」

俺は少し息を吐き

「好きな女が無茶していると思うのに助けにいかないわけにはいかないだろうが。」

そして俺は戦場へ向かう

俺は多分ずつと剣をとる。

例え死ぬことになつたとしても

泣いている顔も

笑っている顔も

困っている顔も

怒っている顔も

恥ずかしく顔を真っ赤にしている顔も

ずっと好きだった雫の元で死ぬのだったらそれでいい

自分でも狂つていることは分かっている

それでも俺は雫のことが大好きなんだ。

「快斗助けて。」

そんな声が聞こえてくる

「そんなの当たり前だろ。」

俺は馬頭を一閃すると背後を見る

すると驚いたように、そして絶望して泣いていたのであろう。少し涙が出ている雫と。涙を流している香織の姿が見える

「わりの。寝坊した。」

「「快斗!!」」

俺を呼ぶクラスメイトの声。するとわずかながら希望が見えたよ
うな顔をする

そして次の瞬間

ドオゴオオン!!

轟音と共に天井が崩落し、同時に紅い雷を纏った巨大な漆黒の杭が凄絶な威力を以て飛び出した。

全長百二十センチのほとんどを地中に埋め紅いスパークを放っている巨杭に眼前にいた俺と香織と雫はもちろんのこと、光輝達や彼等を襲っていた魔物達、そして魔族の女までもが硬直する。

戦場には似つかわしくない静寂が辺りを支配し、誰もが訳も分からず呆然と立ち尽くしていると、崩落した天井から人影が飛び降りてきた。その人物は、香織達に背を向ける形でスタツと軽やかに降り立つと、周囲を睥睨する。そこに現れた白髪、義手の男性はただ微笑ましそうに見ていた

「……相変わらず仲がいいな、お前等」

苦笑いしながら、そんな事をいう。

「……おいおい。まじかよ。この登場はかつこよすぎるだろ。」

俺はさすがに苦笑してしまう。まさかこんなところで会えるとは思いもしなかった。

髪の色が違う、纏う雰囲気が違う、口調が違う、目つきが違う。だが、わかる。生存を信じて探し続けた友達だ。

「ハジメ（くん）！」

虐殺

「へ？ハジメくん？つて南雲くん？えっ？なに？どういうこと？」

俺と香織の歓喜に満ちた叫びに、隣の雫が混乱しながら香織とハジメを交互に見やる。

どうやら、俺たちは一発で目の前の白髪眼帯黒コートの人物がハジメだと看破したようだが、雫にはまだ認識が及ばないらしい。

しかし、それでも肩越しに振り返って自分達を苦笑い気味に見ている少年の顔立ちが、記憶にあるハジメと重なりだすと、雫は大きく目を見開いて驚愕の声を上げた。

「えっ？ えっ？ ホントに？ ホントに南雲くんなの？ えっ？ なに？ ホントどういうこと？」

「いや、落ち着けよ八重樫。お前の売りは冷静沈着さだろ？」

「いや雫つてテンパるとこんなもんだぞ。」

「お前元氣そうだな。いや。確か遠藤曰く谷口を庇って石化されていたんだっけか？なんでお前そんなにげんきなんだよ。」

「生憎。全快とは言い切れないほじや、吐き気はひどいし具合は悪いしコンディション最悪だけどな。」

俺は剣を鞘から抜き

「ただ俺の大切な人に手を出した。それだけで殺す理由は十分だろ。」
「お前かなり物騒になったな。」

「元からこんなんだぞ。まあ今回ばかりは許す気もないし少し光輝にも説教しないとイケないしな。俺もさつきまで爆睡してたから言えないけどさ。てか上に気配感じるんだけど誰かいるのか？」

すると急に落下してきた金髪の女の子をハジメがお姫様抱っこで受け止めると恭しく脇に降ろし、ついで飛び降りてきたウサミミ少女も同じように抱きとめて脇に降ろす。

最後に降り立ったのは全身黒装束の少年、遠藤浩介だ。

「な、南雲お！ おまつ！ 余波でぶっ飛ばされただろ！ ていうか今の何だよ！ いきなり迷宮の地面ぶち抜くとか……」

文句を言いながら周囲を見渡した遠藤は、そこに親友達と魔物の群

れがいて、硬直しながら自分達を見ていることに気がつき「ぬおっ！」などと奇怪な悲鳴を上げた。そんな遠藤に、再会の喜びとなぜ戻ってきたのかという憤りを半分ずつ含めた声がかかる。

「浩介！」

「重吾！ 健太郎！ 助けを呼んできたぞー！」

「助けを呼んできた」その言葉に反応して、光輝達も魔族の女もようやく我を取り戻した。そして、改めてハジメと二人の少女を凝視する。だが、そんな周囲の者達の視線などはお構いなしといった様子で、ハジメは少し面倒臭そうな表情をしながら、近くにいる二人に手早く指示を出した。

「ユエ、悪いがあそこで固まっている奴等の守りを頼む。シア、向こうで倒れている騎士甲冑の男、容態を見てやってくれ」

「ん……任せて」

「了解ですうー！」

「お前は。」

「悪いここは俺にもやらせて。……あいつだけは俺が殺る。」

そして俺は笑っているように見えてかなりの殺気を保有する

「ちっ。死に損ないが。お前に何ができるんだい。」

「……それでよそ見してていいのか？」

俺は試験管を一つ取り出し投げつける

「まずい。」

「おせえよ。」

俺はボゴーンという爆発音に今度は広範囲で小麦粉を撒き散らす粉塵爆発を使い威力も高め。そして広範囲に白い小麦粉が配布し魔物らしき痕跡が白く浮かび上がる

「……やっぱり迷彩でも外部からつけられた痕跡は隠せないらしいな。恵里。」

「うん。マーキング。」

「ちっ、こつちが目的か!!」

おそろくとどめを刺しにきたのであろう全体の気配を俺は掴み取

る

これでアドバンテージは無くした
そして気配を上手く掴み俺は笑う

「おせえよ。」

すぐ近くの大型のカメみたいな魔物を甲羅ごと切り捨てる。防御もクソもない。

ただ正確に同じところに10連撃を加えたただけだ。

「たく。仕方がねえ。ギルドの依頼だし加勢するぞ。」

ドグシャ!

そんな生々しい音を立てて、地面にクレーターを作りながらカメラの頭部が粉碎される。そして、ついでにとばかりにドンナーを抜いたハジメは、一見、何も無い空間に向かって銃を続けざまに撃ち放った。

ドパンツ! ドパンツ!

乾いた破裂音を響かせながら、二条の閃光が空を切り裂き目標を違わず問答無用に貫く。すると、空間が一瞬揺ぎ、そこから頭部を爆散させたキメラと心臓を撃ち抜かれたブルターモドキが現れ、僅かな停滞のあとぐらりと揺れて地面に崩れ落ちた。

「へえ〜レールガンか。いい武器だな。」

「てめえこそ爆弾だろ? あれ。」

「火薬の扱いには慣れているからな。俺の十八番ってわけだつと。」

俺も負けてられないとばかりに剣で敵をバターののように切り裂いていく。

背後には銃を撃っているハジメの姿が目に見える

初めて組むはずなのにやりやすい

背後はハジメが守っているせいかな安心してきる

もはや殺し合いですらない。一方的な処刑だ。

すると香織と雫を狙ってキメラや黒猫が襲いかかった。どうやら他のところを狙っていたらしいが全て撃退されたらしい。

殺意を撒き散らしながら迫り来る魔物に歯噛みしながら半ばから折れた剣を構えようとする雫だったが、それを制止するように、周囲で浮遊していた謎の十字架に雫が入る。突然、十字架が長い方の先端

をキメラに向けて轟音を響かせた。何かがくるくると飛び、カランカランという金属音を響かせて地面に落ちた。香織の側でも同じく轟音が響き、やはり同じように金属音が響く。

「お前いつからニュー○イプになったんだよ。」

俺は呆れたように苦笑しそして苦無をユエと呼ばれた少女の背後から近づいていた黒猫に投げる

「……む。」

「す、すごい……ハジメくんってファ○ネル使いだっただ」

「彼、いつの間にニュー○イプになったのよ……」

「そういや、快斗の部屋で見てたな。」

そんな軽口を言えるほどの余裕がでる

「ホントに……なんなのさ」

力なく、そんなことを呟いたのは魔族の女だ。何をしようとも全てを力でねじ伏せられ粉碎される。そんな理不尽に、諦観の念が胸中を侵食していく。もはや、魔物の数もほとんど残っておらず、誰の目から見ても勝敗は明らかだ。

魔族の女は、最後の望み！ と逃走のために温存しておいた魔法を俺たちに向かって放ち、全力で四つある出口の一つに向かって走った。俺たちのいる場所に放たれたのは「落牢」だ。それが、直ぐ傍で破裂し、石化の煙が俺たちを包み込んだかのように見えた。香織と雫が悲鳴じみた声で俺たちの名を呼ぶ。

まあ躲すこと自体は簡単なだけ。身体強化で脚力を強化させたあと俺は大きく上に飛び天井に張り付く。重力何それおいしいのと言いたいばかりに天井を歩く。これは俺の靴にビツグがはめられておりどこにでも移動できるという、俺が錬成師に作らせた一品だった。そして魔物に向けて手裏剣や苦無を投げる。上に逃げたとは思わずただただ蹂躪される魔物たちにちよつと罪悪感を覚えるが慈悲はない

そして魔族の方はというと

「はは……既に詰みだったわけだ」

「その通り」

魔族の女の目の前、通路の奥に十字架が浮遊しておりその暗い銃口を標的へと向けていた。乾いた笑いと共に、ずっと前、きつとハジメに攻撃を仕掛けてしまった時から既にチエックメイトをかけられていたことに今更ながらに気がつき、思わず乾いた笑い声を上げる魔族の女。そんな彼女に背後から憎たらしいほど平静な声がかかる。「……この化け物め。上級魔法が意味をなさないなんて、あんた、本当に人間？」

「実は、自分でも結構疑わしいんだ。だが、化け物というのも存外悪くないもんだぞ？」

俺も天井から飛び降り着地する

んじやとりあえず最後に殺すか

「さて、普通はこういう時、何か言い遺すことは？ と聞くんだろうが……生憎、お前の遺言なんぞ聞く気はない。それより、魔族がこんな場所で何をしていたのか……それと、あの魔物を何処で手に入れたのか……吐いてもらおうか？」

「あたしが話すと思うのかい？ 人間の有利になるかもしれないのに？ バカにされたもんだね」

嘲笑するように鼻を鳴らした魔族の女に、ハジメは冷めた眼差しを返した。そして、何の躊躇いもなくドンナーを発砲し魔族の女の両足を撃ち抜いた。

「あがああ!!」

「人間族だの魔族だの、お前等の世界の事情なんぞ知ったことか。俺は人間族として聞いているんじゃない。俺が知りたいから聞いているんだ。さっさと答えろ」

「……」

痛みに歯を食いしばりながらも、ハジメを睨みつける魔族の女。その瞳を見て、話すことはないだろうと悟ったハジメは、勝手に推測を話し始めた。

「ま、大体の予想はつく。ここに来たのは、『本当の大迷宮』を攻略するためだろ？」

魔族の女が、ハジメの言葉に眉をピクリと動かした。その様子を

つぶさに観察しながらハジメが言葉を続ける。

「あの魔物達は、神代魔法の産物……凶星みたいだな。なるほど、魔族側の変化は大迷宮攻略によって魔物の使役に関する神代魔法を手に入れたからか……とすると、魔族側は勇者達の調査・勧誘と並行して大迷宮攻略に動いているわけか……」

「どうして……まさか……」

そこまで言われたら俺も理解はする

こいつ神代魔法もつていやがるのか

この世界の歴史なら少し勉強した。この世界の創世神話に出てくる魔法で？ 今の属性魔法と異なってもっと根本的な理に作用できるらしい

「……なるほどな。つまり俺も作ろうとしていたアーティファクトを作れるのか。そりやつええわ。」

俺はボソッと呟く。鉱石の関係上作れなかった兵器が数点あるのだがこいつは簡単に作れる。いわゆる科学と魔法を複合させたのであろう

「なるほどね。あの方と同じなら……化け物じみた強さも領ける……もう、いいだろ？ ひと思いに殺りなよ。あたしは、捕虜になるつもりはないからね……」

「あの方……ね。魔物は攻略者からの賜り物つてわけか……」

捕虜にされるくらいならば、どんな手を使っても自殺してやると魔族の女の表情が物語っていた。そして、だからこそ、出来ることから戦いの果てに死にたいとも。

「……さすがに介錯はしてやる。」

俺は剣を抜き一撃で殺せるように首もとに剣を当てる

魔族の女は、道半ばで逝くことの腹いせに、負け惜しみと分かりながら俺たちに言葉をぶつけた。

「いつか、あたしの恋人があんたらを殺すよ」

「殺せるもんなら殺してみろ。俺は大切な人のために戦う。それで死ぬようなら願ったり叶ったりだ。」

「敵だと言うなら神だつて殺す。その神に踊らされてる程度の奴じや

あ、俺には届かない」

互いにもう話すことはないと言を閉じ俺は剣を振りかぶる

しかし、いざ剣を振るうという瞬間、大声で制止がかかる。

「待て！待つんだ、快斗！彼女はもう戦えないんだぞ！殺す必要はないだろ！」

「……」

はあ本当に嫌になる

「……ん。手強かったよあんた。でも俺の糧にさせてもらう。」

俺はもはやいうことはなかった

「捕虜に、そうだ、捕虜にすればいい。無抵抗の人を殺すなんて、絶対ダメだ。俺は勇者だ。快斗も仲間なんだから、ここは俺に免じて引いてくれ」

いやなこった。俺は剣を振り下ろし首を切断する。

真っ赤な血が首を切り取ると返り血が俺を浴びる。

静寂が辺りを包む。クラスメイト達は、今更だと頭では分かっているけど同じクラスメイトが目の前で躊躇いなく人を殺した光景に息を呑み戸惑ったようにただ佇む。

「……お疲れさん。」

ハジメの声が聞こえてくる

「ああ。お疲れ様。」

俺は軽くハジメと健闘を讃え合い軽く手を合わせた

自分の本心

「シア、メルドの容態はどうだ？」

「危なかったです。あと少し遅ければ助かりませんでした。……指示通り「神水？」を使って置きましたけど……良かったのですか？」

「ああ、この人には、それなりに世話になったんだ。それに、メルドが抜ける穴は、色んな意味で大きすぎる。特に、勇者パーティーの教育係に変なのがついても困るしな。まあ、あの様子を見る限り、メルドもきちんと教育しきれていないようだが……人格者であることに違いはない。死なせるにはいろんな意味で惜しい人だ。」

「少し甘すぎるんだよ。優しすぎて少しこういうことになるのは大理解解していたからな。よかったよ冒険者ギルドに入っておいて。」

俺もさすがに人殺しを最初に体験した時は恐怖も、罪悪感もあった。それでも恵里やリリイと協力し敵を殺すということのをなれていったのだ。

「……ハジメ」

「ユエ。ありがとな、頼み聞いてくれて」「んっ」

シアと話しているうちにユエが到着する。自分の名を呼び見上げてくるユエの頬を優しく撫でながら、ハジメは、感謝の意を伝えた。それに、視線で「気にしないで」と伝えながらも、嬉しそうに目を綻ばせるユエ。自然、ハジメの眼差しも和らぎ見つめ合う形になる。

……さすがに鈍感な俺でもわかる。香織が気持ちを伝える前にハジメにとっての特別が見つかったってことも

「……お二人共、空気読んで下さいよ……ほら、正気に戻って！ぞろぞろ集まって来ましたよ！」

「さ、さすがに甘ったるいな。」

俺は少し苦虫を噛んだように苦笑いをする。するとクラスメイトが近づいてきた

まあ俺は覚悟はできているんだけど。と思っていると

「おい、快斗。なぜ、彼女を……」

「ハジメくん……いろいろ聞きたい事はあるんだけど、取り敢えずメルドさんはどうなったの？ 見た感じ、傷が塞がっているみたいだし呼吸も安定してる。致命傷だったはずなのに……」

光輝の言葉を遮って、香織が、真剣な表情でメルドの傍に膝を突き、詳しく容態を確かめながらハジメに尋ねた。

ハジメは、一瞬、自分に向けられた香織の視線に肝が冷えるような感覚を味わったが、気のせいだと思ふことにして、香織の疑問に答えることにした。

「ああ、それな……ちよつと特別な薬を使ったんだよ。飲めば瀕死でも一瞬で完全治癒するって代物だ」

「そ、そんな薬、聞いたことないよ？」

「そりゃ、伝説になつてくるくらいだしな……普通は手に入らない。だから、八重樫は、治癒魔法でもかけてもらえ。魔力回復薬はやるから」

「え、ええ……ありがとう……それと快斗も大丈夫なの？」

「何が？」

「い、いえ。あなた人を。」

「ギルドの依頼で恵里と俺は結構体験しているからな。生憎初めてつてわけじゃないし。」

「うんそうだよ。」

すると凄く粘っこい声が聞こえてくる。

するとメガネを外した。狂った少女がニヤニヤと俺の方を熱を持った視線を送ってくる

「……隠さないでいいのか？」

「いいんじゃないかなあ。あはは。僕たちのランデブーを話されちゃったしね。」

「えっ？ 恵里？」

「中村？」

「あくこつちが素なんだよ。こいつの家庭で昔いろいろあつて自殺未遂をしたことがあるし、一度光輝の件もあつてちよつと狂っているから。」

「……俺？」

「……お前あんなことがあったのに忘れられるとか逆にすげえよ。」

俺は少しため息を吐いてしまう。鈴や雫、いやクラスメイト全員が驚いている。自殺未遂。そのことは多分日頃の恵里を見ても気づくことはないだろうしな

「別にいいよ。僕が今好きなのは光輝くんじゃなくて快斗くんなわけだし。」

「……お前変な奴に好かれたな。」

「生憎こいつらの尻拭いしてたらな。自然と危ない奴との交流も増えるんだよ。」

「……とことん苦勞してんなあ。」

「大丈夫。最近は毒物を使わなくなったただけマシになってきてるから。」

マジで危ない奴じゃねーかとハジメすら若干引いている。

「と、とりあえず。ハジメくん。メルドさんを助けてくれてありがとう。私達のこと……助けてくれてありがとう」

メルドの事と、自分達を救ってくれたことのお礼を言いつつハジメの目の前まで歩み寄る。

そして、グツと込み上げてくる何かを堪えるように服の裾を両の手で握り締め、しかし、堪えきれずにホロホロと涙をこぼし始めた。嗚咽を漏らしながら、それでも目の前のハジメの存在が夢幻でないことを確かめるように片時も目を離さない。ハジメは、そんな香織を静かに見返している。

「ハジメくん……生きでしてくれで、ぐすつ、ありがとうつ。あの時、守れなくて……ひつく……ゴメンねっ……ぐすつ」

クラスメイトのうち、女子は香織の気持ちを察していたので生暖かい眼差しを向けており、男子の中でも何となく察していた者は同じような眼差しを、近藤達は苦虫を噛み潰したような目を、光輝と龍太郎は香織が誰を想っていたのか分かっていないのでキョトンとした表情をしている。

ハジメは、困ったような迷うような表情をした後、苦笑いしながら香織に言葉を返した。

「……何っーか、心配かけたようだな。直ぐに連絡しなくて悪かったよ。まあ、この通り、すっかり生きてつから……謝る必要はないし……その、何だ、泣かないでくれ。」

そう言って香織を見るハジメの眼差しは、香織を気遣う優しさが宿っていた。その眼差しに、あの約束を交わした夜を思い出し、胸がいつぱいになる香織。思わずワツと泣き出し、そのままハジメの胸に飛び込んでしまった。

胸元に縋り付いて泣く香織に、どうしたものかと両手をホールドアップしたまま途方に暮れるハジメ。ただ、ユエの手前、ほかの女を抱きしめるのははばかりだったので、銃口を突きつけられた人のように両手をホールドアップさせたまま、香織の泣くに任せるという中途半端な対応だった。

「へタレだな。」

「おいてめえ。ぶっ飛ばすぞ。」

俺がケラケラ笑うとハジメの青筋が浮かんでくる。

とそうした時だった

不意にくらつとしてしまい俺は明らかに体が重く感じガタンと座り込んでしまう

「快斗!!」

すると雫が俺を支える

「あく悪い。やっぱダメだ。本調子にまだなっていないし。限界突破使わないで正解だったな。」

「……本当に体調悪かったんだな。」

「うっせ。……頭もクラクラするし結構真面目にやばい。明らかに膨大な魔力で急に起きてそのまま戦闘だからな。雫ちよつと肩借りていいか。マジでやばい。」

「……大丈夫なの?」

「大丈夫。多少無茶しただけだから。いつものこと。」

俺は少しフラフラになってしまう。

「……ふう、雫や香織は本当に優しいな。クラスメイトが生きていた事を泣いて喜ぶなんて……でも、二人は無抵抗の人を殺したんだ。話

し合う必要がある。もうそれくらいにして、二人から離れた方がいい」

クラスメイトの一部から「お前、空気読めよ!」という非難の眼差しが光輝に飛んだ。この期に及んで、この男は、まだ香織の気持ちに気がつかないらしい。何処かハジメと俺を責めるように睨みながら、俺に寄り添う雫を引き離そうとしている。単に、香織と触れ合っている事が気に食わないのか、それとも人殺しの傍にすることに危機感を抱いているのか……あるいはその両方かもしれない。

「……ちよつと光輝。二人は、私達を助けてくれたのよ? そんな言い方はないでしょう?」

「だが、雫。彼女は既に戦意を喪失していたんだ。殺す必要はなかった。特に快斗がしたことは許されることじゃない」

「あのね、光輝、いい加減にしなさいよ? 大体……」

光輝の物言いに、雫が目吊り上げて反論する。檜山達は、俺たちが気に食わなかったこともあり、光輝に加勢し始めるのだが

圧倒的に光輝側が不利であった

「八重樫。後は俺が持つ。」

「えっ? あ、ありがとう。」

「……大丈夫か? 快斗。」

「悪い。迷惑かけちまって。」

「いや、お前のおかげで本当に助かった。」

「うん。原口くんがいなかったら本当にみんな死んでたよ。南雲くんもありがとう助けに来てくれて。」

「お、おう。」

「南雲悪い。快斗が戦闘ができない状態だしちよつと地上まで送ってくれないか? 俺たちもう回復薬もほとんどない状況なんだよ。」

すると永山たちのパーティがこつちにきて俺を支えてくれる。すると恵里や鈴、龍太郎もこつちに近づいてくる。

「快斗くん本当に大丈夫なの?」

「大丈夫。これくらい二、三日寝てれば治るって。」

「悪いな。本当に無茶させてしまったらしいし。」

「お前が謝るなんて珍しいな龍太郎。」

「ご、ごめん。鈴のせいだ。」

「あれはしゃーないって。俺も鈴に黒猫を抜けさせたしな。悪かったよ。とりあえず、反省会は後にしてとりあえず迷宮から抜けようぜ。」

「……」

「ああ。快斗ってこういう奴だから。俺も快斗は友達だと思っているしな。こいつ天然の人誑しなんだよ。」

「……なんか失礼なこと言われた気がするんだが。」

俺はため息を吐く。檜山のパーティーと光輝はキョトンとしている

「ちよつと待て。快斗は人を殺したんだぞ。」

「…はあ。光輝。元々は俺らが負けたから快斗に頼らざるを得なかったんだぞ。多分快斗の作戦通りにやればお前も雫も怪我をしないですんだんかもしれないだろうが。」

「そうだね。快斗くんがこんな僕を見捨てないくらいお人好しだしね。それに一度殺しかけて躊躇をした光輝くんがいうことではないと思うよ。」

「俺たちも認識が甘かったことは違いねえよ。……そうだよな。戦争っていつかは殺すことになるんだよなあ。」

「……そうだよね。」

「ああ。もう暗いの禁止。とりあえず帰ろう。多分ギルドの依頼ってことは下の冒険者たちにも知られているんだろ。心配かけていると思うしな。」

俺は士気を落とさないように永山の背から声をかける

「……やっぱりお前は強いな。」

「俺にとつてリーダーはブレたら終わりなんだよいつだって決心を曲げない。一番俺らが足りないのは意志の強さだ。人殺しをためらうのは分かるし別に光輝が言っていることは間違っていないしな。でもここはトータスだ。俺たちの常識なんか通用しない。正直にいうけど俺はこの世界なんてどうだっていい。」

すると全員がこつちを見る。多分俺は初めてこの世界の見解を。

全員目を覚ます言葉を発する

「言つとくけど俺だつて優先順位がある。全員を救えるなんて考えてないし。元々の俺たちの優先順位はなんだ？この世界を救うことか？人間族を救うことか？違うだろ。俺たちを待っていてくれる人が地球にいるだろ？」

俺の言葉でクラスメイトがハツとする。多分ここが。俺の行動原理を言える最初で最後の機会だと思う。

「……俺は帰りたい。家に帰りたいんだよ。生きてこの世界から出て家族に会いたいんだ。」

「……快斗。」

「朝嫌々学校にきて、愛ちゃんの授業を受けて。永山たちや龍太郎でダベリながら雫の弁当を食べたりして。また授業を受けて。放課後部活……はもう厳しいかもしれないけど後輩や先輩たちと剣道をやつて、部活仲間や友達と帰ったり。トラブルに巻き込まれたりして、家に帰ったら恵里に文句や愚痴を言いながら勉強をしたり一緒にゲームやそしてまた同じような日常生活に戻る……普段の学生生活に戻りたいんだよ。それが一番楽しかったからな。」

俺は少し苦笑してしまう。

「だから俺はみんなを帰ることを優先する。多分全員を守ることはできない。もしかしたらクラスメイトが死んでしまうかもしれない。……クラスメイトを殺すときがあるかもしれない。でも。俺の味方である人たちの味方でありたい。俺はそいつらのためなら何度だって剣を振るうし無茶だつてする。もしそれがこの世界を相手にするとしてもな。」

だから

「俺を非難するのも別にいい。こんなのただの俺のエゴだ。それでもお前らが戦争も参加したいっていうんだつたら俺は参加するし。それが帰れる手段であればとことんやってやる。」

この世界にきて最初に決めたことだった。トータスにきてイシユタルの話聞きながら周りに流されずクラスメイト。友達を守るために俺は剣を振るうことを決めた

帰りたい。

異世界なんて来たくなんて最初からなかった。

だけど俺だけが帰ったって意味がない。

できればみんなで、向こうで卒業まで。いや卒業してからも友達の関係でいたい

「……悪い、結構臭いこと言ったな。早く行こうぜ。」

多分黒歴史になるだろうな。照れて熱くなった頬を隠しながら俺は永山の背中に捕まる。

すると自分の体調が悪かったのを忘れるほど熱くなっていたらしい。体が急に重くなり眠気がする

……そしてすぐさま眠りの中に落ちていった

親友の応援

「…………ふあゝあ。」

「…………お前よく寝てたな。」

永山がそんなことをいう

俺が起きるとまだオルクスの大迷宮にいたらしく上層に向かって
いる途中だった

「あつ。悪い。ちよつと恥ずかしさと黒歴史を作ったせいで現実から
逃げてた。」

「…………お前な。」

「だってどう考えても恥ずかしいだろ。あんなの。てかなんであんな
こといったんだろ。」

おそらく結構な時間上に向かっていたのだろう。おそらく10層
くらいだろうか。

一度寝て羞恥心が消えることもなく

「確かに結構恥ずかしいこと言っていたからなお前。」
「うっ。」

「そうだね。味方である人たちの味方でありたいとか家に帰りたいた
かってね。」

「…………もうやめて。マジではずかしいから。」

野村と辻のからかいに俺は顔をユダダコみたいに見つ赤にする
「…………でも、ありがとな。俺たちのことをそんなに考えてくれて。」

すると永山がそんなことを言い出す

「ああ。俺も目が冴えたよ。確かに俺たちは最初は帰ることが目的
だったんだよな。」

「私も。少し罪悪感はあるけどお母さんとお父さんに会いたいから。」
遠藤と辻も少し照れてながら俺に賛同する

「なんかお前つて不思議だよなあ。天之河みたいになんでもできるわ
けじゃないけどなんか付いていきたくなるんだよなあ。」

「あつ。うん。わかるかも。」

「できないことがあれば頼ってくるけど、一番頼りになるからな。」

「ああ。さすが天職が王だけあるな。」

「やめろ。マジで恥ずかしい。」

なんか今日こんなんばっかりなんだけど。

「でも、お前この後の比べるとまじだと思うぞ。あの中に入らないといけないんだから。」

「……やめろ。想像もしたくない。俺だっけいきたくないから。」

雫や恵里、鈴がこっちをチラチラと視線を向けている。

さすがに鈍感な俺でも分かる。

これ修羅場になるやつだと

「そういや。一つ気になったんだけどお前何で最初限界突破使わなかったんだ？」

「ん？光輝がやられた時の保険とどれだけの戦力か分からなかったかな。魔族が本当に一人なのかとか色々疑問に思っていたことが結構あったし、切り札もみせてなかったし、まあヒールされて焦っていたのは分かったけどそれでも俺と雫は倒せていたわけで。まさか落牢を使ってくるとは思ってなかったからそこは俺のミスだよ。てつきり魔物にもっと強い奴がいるのかと思っていたからな。」

「……お前よく考えているな。」

「考えるのが指揮するものの役目ですから。」

そういつた面では結構反省点がある

ここままでやられたには俺の責任でもあるからだ

「んじやまた一から頑張りますか。」

「そうだな。」

「うん。」

ときつきとは違い笑みが溢れる。まだ強くなれると思うと俺も少し嬉しくなるのだった

大迷宮を出た途端にまた面倒ごとに会うことをこの時は予想だに
もしてなかった

「パパあー!! おかえりなのー!!」

【オルクス大迷宮】の入場ゲートがある広場に、そんな少女の元気な声

が響き渡る。

ステテテテー!と可愛らしい足音を立てながら、ハジメへと一直線に駆け寄ってきたミュウは、そのままの勢いでハジメへと飛びつく

「へ? パパ?」

俺はハジメの方を見るとすると笑顔でミュウと呼ばれる。多分海人族の子供を見る

「ミュウ、迎えに来たのか? ティオはどうした?」

「うん。ティオお姉ちゃんが、そろそろパパが帰ってくるかもって。だから迎えに来たの。ティオお姉ちゃんは……」

「妾は、ここじゃよ」

人混みをかき分けて、妙齡の黒髪金眼の美女が現れる。

……香織のライバルどれ位いるんだよ。

俺は少し頭を抱えていると

すでに俺も歩けるくらいには回復しており今は永山の班に居させてもらっている

……さすがに怖いんだよ。あいつら

辻も涙目になっているし

「おいおい、ティオ。こんな場所でミュウから離れるなよ」

「目の届く所にはおったよ。ただ、ちよつと不埒な輩がいての。凄惨な光景はミュウには見せられんじやろ」

「なるほど。それならしやあないか……で? その自殺志願者は何処だ?」

「いや、ご主人様よ。妾がきつちり締めておいたから落ち着くのじゃ」

「……チツ、まあいいだろう」

「……ホントに子離れ出来るのかの?」

ハジメが、この四ヶ月の間に色々な経験を経て自分達では及びもつかないほど強くなったことは理解したが、「まさか父親になっているなんて!」と誰もが啞然とする。特に男子などは、「一体、どんな経験積んできたんだ!」と、視線が自然とユエやシア、そして突然現れた黒髪巨乳美女に向き、明らかに邪推をしていた。ハジメが、迷宮で無

双した時より驚きの度合いは強いかもしれない。

俺はそんな面倒ごとを持って来たハジメに俺は胃が痛くなりながらとりあえず助けてもらったお礼を言おうとする

そんな時ゆらりと一人進みでる。顔には笑みが浮かんでいるのに目が全く笑っていない……香織だ。香織は、ゆらりゆらりと歩みを進めると、突如、クワツと目を見開き、ハジメに掴みかかった。

「ハジメくん！……どういことなの！？本当にハジメくんの子なの！？誰に産ませたの！？ユエさん！？シアさん！？それとも、そっちの黒髪の人！？まさか、他にもいるの！？一体、何人孕ませたの！？答えて！ハジメくん！」
あのバカさすがにその間違いはひどすぎる

「香織、落ち着きなさい！ 彼の子なわけないでしょ！」

「香織お前落ち着け。ハジメの娘じゃないに決まっているだろ。つてお前どこからそんな力でているんだよ。」

俺と雫がとっさに動き香織を羽交い締めにするけどどこからその力が出ているのか、全くハジメから離れようとしな

い。なんか地上に戻ってもこんなんばかりかあと俺は苦笑しざるをえなかった

香織が、顔を真っ赤にして雫の胸に顔を埋めている姿は、まさに穴があつたら入りたいというものだった。冷静さを取り戻して、自分がありえない事を本気で叫んでいた事に気がつき、羞恥心がマツハだった

「大丈夫だからね。よしよし。」

「……大丈夫だから。俺だつてかなり恥ずかしい思いをしたんだし。」
と俺たちは必死に香織を慰める

今ハジメは俺の伝言も一緒に依頼の達成を報告している最中である。その間俺たちは必死に自分たちのことを棚において香織を正気に戻そうとしていた

「……ねえ。二人のあの姿まるでお父さんとおかあ」

「鈴。死にたくなければそれ以上は言わない方がいいよ。」

うん。俺は別にいいけど雫がマジギレするんで本当にそれやめて

ね

そして香織が落ち着いた後俺はハジメに近づき話始める

「悪いな。色々迷惑かけちゃって。」

「いや。お前と白崎が俺をずっと探しているって先生に聞いてたからな。」

「……なるほどやっぱリウルの町もか。魔族関係か？」

「ああ。……清水を魔族側に引き込んで先生を殺そうとしていたんだよ。」

「……なるほどな。やっぱお前クラスメイト殺していたのか。」

俺は少し予感があった。おそらくハジメのスタイルは俺と同じである

身内にはとことん甘い敵には容赦はしない

だから、俺が魔族を殺しても驚かなかったのは唯一こいつだけである。なのでどこか人殺しを経験していることは感じていた

「……悪いか？」

「全然。何で裏切った奴のことを心配する必要があるんだ。さすがにボードーくらいはちゃんをつけるさ。それに俺でもそうしているだろうしな。」

「……お前結構さっぱりしてんなあ。」

と俺は苦笑する
すると

「おいおい、どこ行こうってんだ？俺らの仲間、ボロ雑巾みたいにしておいて、詫びの一つもないってのか？ア、ア、!?」

薄汚い格好の武装した男が、いやらしく頬を歪めながらテイオ呼ばれていた女性を見て、そんな事をいう。

……うわぁ典型的な賊だな。リリイに行つてこの街の傭兵をチエックしてもらおうべきだろうな。

俺は少しリリイに早速頼み事ができたかと思うと少し苦笑してしまう。まああの仕事大好き人間のリリイのことだ。王国のためならちゃんと仕事をするだろう

その視線がユエヤシアにも向く。舐めるような視線に晒され、心底

気持ち悪そうにハジメの影に体を隠すユエとシアに、やはり怯えていると勘違いして、ユエ達に囲まれているハジメを恫喝し始めた。

「ガキイ！わかってんだろ？死にたくなかったら、女置いてさっさと消えろ！なあゝに、きっちりわび入れてもらったら返してやるよ！」

「まあ、そんな時には、既に壊れてるだろうけどな〜」

「……」

何が面白いのか、ギャハハと笑い出す男達。そのうちの一人がミユウまで性欲の対象と見て怯えさせ、また他の一人が兎人族を人間の性欲処理道具扱いした時点で、彼等の運命は決まった

「快斗。」

「大丈夫。一応王宮では結構強い発言権をもっているからな。隠蔽は任せろ。」

空間すら軋んでいると錯覚しそうな大瀑布の如きプレッシャーが傭兵紛いの男達に襲いかかる。彼等の聞くに耐えない発言に憤り、進み出た光輝がプレッシャーに巻き込まれフラついてるのが視界の片隅に映っていたが、ハジメは気にすることもなく男達に向かって歩み寄った。

今更になって、自分達が絶対に手を出してはいけない相手に喧嘩を売ってしまったことに気がつき慌てて謝罪しようとするが、プレッシャーのせいで四つん這い状態にされ、口を開くこともできないので、それも叶わない。

俺はどうするのか結構興味深くしていると

ハジメは、少しプレッシャーを緩めて全員を膝立ちさせ一列に整列させると、端から順番に男の象徴を撃ち抜いていくという悪魔的な所業を躊躇いなく実行した。さらに、悲鳴を上げながら、股間を押さえのたうち回る男達を一人ずつ蹴り飛ばし、絶妙な加減で骨盤も粉砕して広場の隅っこに積み重ねていった。これで、彼等は子供を作れなくなり、おそらく歩くことも出来なくなっただろう

「容赦ねえな。」

「また、容赦なくやったのお〜。流石、ご主人様じゃ。女の敵とはいえ、少々同情の念が湧いたぞ？」

「いつになく怒ってましたね。やっぱり、ミュウちゃんが原因ですか？ 過保護に磨きがかかっているような」

「……ん、それもあるけど……シアのことも怒ってた」

「えっ!? 私のために怒ってくれたんですか？ えへへ、ハジメさんだったら……有難うございますう」

「……ユエには直ぐに見透かされるな」

「んっ……当然。ハジメのこといつも見てるから」

「ユエ……」

「ハジメ……」

「……何これ。くそ甘ったるいんだけど。」

俺は苦いものが欲しくなり少しどうしようかと思いつつ後ろを見ると

何かを決意したのか、ピースが当てはまったのか決心をつけたのであろう。勝負をする目をしている香織の姿がいた

「……オセエよ。さっさと決めろバカおり。」

ハジメの時間稼ぎは終わりだ。俺は気づかれないうちに香織の元に向かう

「頑張れよ。」

「うん。ありがとう。」

そしてすれ違いぎわに軽く手を叩く俺と香織。

歩み寄ってくる香織に気がつくハジメ達。ハジメは、見送りかと思っただろうが、隣のユエは、「むっ?」と警戒心をあらわにして眉をピクリと動かしした。シアも「あらら?」と興味深げに香織を見やり、テイオも「ほほう、修羅場じゃのお」とほざいている。どうやら、ただの見送りではないらしいと、ハジメは、嫌な予感に眉をしかめながら香織を迎えた。

「ハジメくん、私もハジメくんについて行かせてくれないかな?」

「……うん、絶対、付いて行くから、よろしくね?」

「……」

第一声から、前振りなく挨拶でも願望でもなく、ただ決定事項を伝えるという展開にハジメの目が点になる。思わず、間抜けな声で問い返してしまった。直ぐに理解が及ばずポカンとするハジメに代わっ

て、ユエが進み出た。

「……お前にそんな資格はない」

「資格って何かな？ ハジメくんをどれだけ想っているかってこと？
だったら、誰にも負けないよ？」

ユエの言葉に、そう平然と返した香織。ああなつては香織は折れない。ユエが、さらに「むむっ」と口をへの字に曲げる。

香織は、ユエにしつかり目を合わせたあと、スッと視線を逸らして、その揺るぎない眼差しをハジメに向けた。そして、両手を胸の

前で組み頬を真っ赤に染めて、深呼吸を一回すると、震えそうになる声を必死に抑えながらはつきりと……告げた。

「貴方が好きです」

「……白崎」

香織の表情には、羞恥とハジメの答えを予想しているからこそその不安と想いを告げることが出来た喜びの全てが詰まっていた。そして、その全てをひっくるめた上で、一步も引かないという不退転の決意が宿っていた。

覚悟と誠意の込められた眼差しに、ハジメもまた真剣さを瞳に宿して答える。

「俺には惚れている女がいる。白崎の想いには応えられない。だから、連れては行かない」

はつきり返答したハジメに、香織は、一瞬泣きそうになりながら唇を噛んで俯くものの、しかし、一拍後には、零れ落ちそうだった

涙を引つ込め目に力を宿して顔を上げた。そして、わかっているとも言うようにコクリと頷いた。香織の背後で、光輝達が啞然、呆然、阿鼻叫喚といった有様になっているが、そんな事はお構いなしに、香織は想いを言葉にして紡いでいく。

「……うん、わかっている。ユエさんのことだよね？」

「ああ、だから……」

「でも、それは傍にいられない理由にはならないと思うんだ」

「なに？」

「だって、シアさんも、少し微妙だけどテイオさんもハジメくんのこと

好きだよな? 特に、シアさんはかなり真剣だと思う。違う?」

「……それは……」

「ハジメくん特別な人がいるのに、それでも諦めずにハジメくんの傍にいて、ハジメくんもそれを許してる。なら、そこに私がいても問題ないよね? だって、ハジメくんを想う気持ちは……誰にも負けてないから」

「……なんかいい言葉だと思うのだがなんか嫌な予感がするのは気のせいだろうか」

香織の射抜くような視線を真っ向から受け止めたユエは、珍しいことに口元を誰が見てもわかるくらい歪めて不敵な笑みを浮かべた。

「……なら付いて来るといい。そこで教えてあげる。私とお前の差を」

「お前じゃなくて、香織だよ」

「……なら、私はユエでいい。香織の挑戦、受けて立つ」

「ふふ、ユエ。負けても泣かないでね?」

「……ふ、ふふふふ」

「あは、あははははは」

「……ハジメ。どんまい。」

「うつせえ。」

俺は気配遮断で近づくと肩を一度叩く

「ハ、ハジメさん! 私の目、おかしくなったのでしようか? ユエさんの背後に暗雲と雷を背負った龍が見えるのですがつ!」

「……正常だろ? 俺も、白崎の背後には刀構えた般若が見えるしな」

「パパあ〜! お姉ちゃん達こわいのお」

「ハアハア、二人共、中々……あの目を向けられたら……んっ、たまたらん」

「おい。ここに変態が一匹いるんだが。」

「……不治の病気だからきにするな。」

「あっはい。」

俺たちはそうやって話していると

「ま、待て! 待つてくれ! 意味がわからない。香織が南雲を好き

？ 付いていく？ えっ？ どういう事なんだ？ なんで、いきなりそんな話しになる？ 南雲！ お前、いったい香織に何をしたんだ！」

「……何でやねん」

俺と雫は頭を押さえ、ご都合主義の光輝に頭を抑える

どうやら、光輝は、香織がハジメに惚れているという現実を認めないらしい。いきなりではなく、単に光輝が気がついていなかっただけなのだが、光輝の目には、突然、香織が奇行に走り、その原因はハジメにあると思っっているようだ。

「あんな。ヘタレで自分からアプローチをかけるどころか少し香織のことを苦手に思っていたハジメが何かするはずないだろう？」

「……事実だけど酷い言い草だな。」

「だって事実だし。」

するとシアさんが首をかなり早い早さで頷いている

ハジメが香織に何かをしたのだと思ひ込み、半ば聖剣に手をかけながら憤然と歩み寄ってくる光輝に、雫が頭痛を堪えるような仕草をしながら光輝を諫めにかかった。

「光輝。南雲君が何かするわけないでしょ？ 冷静に考えなさい。あんたは気がついてなかったみたいだけど、香織は、もうずっと前から彼を想っているのよ。それこそ、日本にいるときからね。どうして香織が、あんなに頻繁に話しかけていたと思うのよ」

「雫……何を言っているんだ……あれは、香織が優しいから、南雲が一人でいるのを可哀想に思っただけのことだろう？ 協調性もやる気もない、オタクな南雲を香織が好きになるわけないじゃないか」

「……一人じゃなくて俺いたんだけど。やっぱり俺遠藤並みに影薄いのかなあ。」

「ちよつとそつちはそつちで凹まないでよ。ふざけてないで手伝つてよ快斗。」

まあ仕方ないので嘘泣きをやめると、光輝達の騒動に気がついた香織が自らケジメを付けるべく光輝とその後ろのクラスメイト達に語りかけた。

「光輝くん、みんな、ごめんね。自分勝手だつてわかつてるけど……私、どうしてもハジメくんと行きたいの。だから、パーティーは抜ける。本当にごめんなさい」

そう言つて深々と頭を下げる香織に、鈴や恵里、辻や真央、及川など女性陣はキャーキャーと騒ぎながらエールを贈った。永山、遠藤、野村の三人も、香織の心情は察していたので、気にするなど苦笑いしながら手を振り、俺と雫は少し胸をなで下ろす。

しかし、当然、光輝は香織の言葉に納得出来ない。

「嘘だろ？　だつて、おかしいじゃないか。香織は、ずっと俺の傍にいたし……これからも同じだろ？　香織は、俺の幼馴染で……だから……俺と一緒にいるのが当然だ。そうだろ、香織」

「えつと……光輝くん。確かに私達は幼馴染だけど……だからつてずっと一緒にいるわけじゃないよ？　多分それなら快斗くんというほうが長いし。それこそ、当然だと思うのだけど……」

「そうよ、光輝。香織は、別にあなたのものじゃないんだから、何をどうしようか決めるのは香織自身よ。いい加減にしなさい」

「てかその御都合主義いい加減やめろよ。よく考えたらそのせいで今回も危険な目にあつたんだし。」

俺たちの指摘に呆然とする光輝。その視線が、スツとハジメへと向く。ハジメは、我関せずと言つた感じで遠くを見ていた。そのハジメの周りには美女、美少女が侍っている。その光景を見て、光輝の目が次第に吊り上がり始めた。

あつこれ結構やばいパターンだ。

「香織。行つてはダメだ。これは、香織のために言っているんだ。見てください、あの南雲を。女の子を何人も侍らして、あんな小さな子まで……しかも兎人族の女の子は奴隷の首輪まで付けさせられている。黒髪の女性もさつき南雲の事を『ご主人様』って呼んでいた。きつと、そう呼ぶように強制されたんだ。南雲は、女性をコレクションか何かと勘違いしている。最低だ。人だつて簡単に殺せるし、強力な武器を持っていてのに、仲間である俺達に協力しようともしない。香織、あいつに付いて行つても不幸になるだけだ。だから、ここに残つた方が

いい。いや、残るんだ。例え恨まれても、君のために俺は君を止めるぞ。絶対に行かせはしない！」

……絶句してしまった。俺も雫も、いやクラスメイト全員の時が止まったように感じる

「君達もだ。これ以上、その男の元にいるべきじゃない。俺と一緒に行こう！ 君達ほどの実力なら歓迎するよ。共に、人々を救うんだ。シア、だったかな？ 安心してくれ。俺と共に来てくれるなら直ぐに奴隷から解放する。テイオも、もうご主人様なんて呼ばなくていいんだ」

「……」

雫にどうすると目線で会話する。雫も俺の方を向き首を横に振る

俺はため息を吐き

「少し眠ってろ。」

「うぐっ。」

俊敏全開で近づき手刀を前に香織にやったように光輝にぶつける
するとガクンと前に倒れ込み光輝は倒れこんだ

「……はあ。本当にごめん。一度雫に説教させるから。」

「えっ？ 私？」

「今俺の話こいつ聞かないだろ。元々俺と光輝は仲がいいってわけじゃないしな。」

「……そうなのか？」

実際同じグループだっただけで光輝と俺は仲がよくない。というよりも多分光輝自体が俺のことを嫌っているのだ。

「こいつ昔から俺に対抗心をむき出しにしてくるんだよ。だから今回もこんなことが起こったんだろうし。」

「……そういや、お前と光輝が二人つきりで見るところ見たことねえな。」

「私もない。」

「……私もよ。時々お父さんに言われてランニングをすることになった時くらいかしら。」

「そういうことだよ。たく。」

俺は小さくため息を吐く。

今度は檜山達が騒ぎ出す。曰く、香織の抜ける穴が大きすぎる。今回の事もあるし、香織が抜けたら今度こそ死人が出るかもしれない。だから、どうか残ってくれと説得を繰り返す。特に、檜山の異議訴えが激しい。まるで、長年望んでいたものがもう直ぐ手に入るといふ段階で手の中かこぼれ落ちることに焦っているような……そんな様子だ。

するとハジメが何か思い出したように檜山に向かって何かを話すと直様青ざめさせていく

「……やっぱりか。」

俺は小さくため息を吐く。まあハジメがどうでもいいって思っているんだつたら俺も警戒だけしてあとは放っておくか

ハジメたちの出発を妨げる邪魔者がいなくなった。香織が、宿に預けてある自身の荷物を取りに行っている僅かな間に俺がハジメの方に向かう

「悪いな。最後までゴタゴタさせてしまった。」

「いやなんというか相変わらずの苦労人だな。八重樫も含めて。」

「……大きなお世話よ。そっちは随分と変わったわね。あんなに女の子侍らせて、おまけに娘まで……日本にいた頃のあなたからは想像出来ないわ……」

「惚れているのは一人だけなんだがなあ……」

「……私が言える義理じゃないし、勝手な言い分だとは分かっているけど……出来るだけ香織のことも見てあげて。お願いよ」

「……」

ハジメは答えない。香織の想いに応える気がない以上、正直、連れて行くべきではないとも思っていたんだろう。

そんな、話を聞いていないかのような態度をとるハジメに、雫の親友魂が唸りを上げる。

「……ちゃんと見てくれないと……大変な事になるわよ」

「？ 大変なこと？ なんだそ……」

「“白髪眼帯の処刑人”なんてどうかしら？」

「……なに？」

「それとも、『破壊巡回』と書いて『アウトブレイク』と読む、なんてどう？」

「ちよつと待て、お前、一体何を……」

「他にも『漆黒の暴虐』とか『紅き雷の錬成師』なんてのもあるわよ？」

「お、おま、お前、まさか……」

「うわっえげつねえ。」

突然、わけのわからない名称を列挙し始めた雫に、最初は訝しそうな表情をしていたハジメだったが、雫がハジメの頭から足先まで面白そうに眺めていることに気がつく、その意図を悟りサツと顔を青ざめさせた。

「ふふふ、今の私は『神の使徒』で勇者パーティーの一員。私の発言は、それはもうよく広がるのよ。ご近所の主婦ネットワーク並みにね。さあ、南雲君、あなたはどんな二つ名がお望みかしら……随分と、名を付けやすそうな見た目になったことだし、盛大に広めてあげるわよ？」

「ちよ、ちよつと待て。快斗。八重樫のことなんかしろ!!」

「あく。まあ俺にとっても香織は大事な親友だからな。俺も本かりリイに言っただけでもらおう。破滅挽歌、復活災厄とかはどうだ……」

「ちよ。」

「いいわね。お姫様の言葉だったらそれは存分に広がるだろうし。それをこの世界でも日本でも、あなたを題材にした小説とか出してもいいわね。」

「おまえら、ホントはラスボスだろ？ そうなんだろう？」

「ふふ、じゃあ、香織のことお願いね？」

「……んまあ少し押し付けた感はあるけどな。まあ地球にいたところと同じ態度でいいから。……一度もハジメのことを諦めなかったんだ。」

「まあ善処する。」

羞恥心に大打撃をくらい発狂寸前となって頭を抱えるハジメ。そんなハジメを少し離れたところから見ていたユエ達や他のクラスメイト達は、圧倒的強者であるハジメを言葉だけで跪かせた俺たちに戦慄の表情を浮かべた。

「そういえばお前に頼まれていた物できたぞ。」

「ん?」

俺はそうやって一つの鞘を受け取る

そしてその鞘から刀を抜き出すと黒色の刀がそこにはあった。

「おつ。サンキュー。普通の剣よりもやっぱ刀の方が振りやすかったんだよ。」

俺は軽く二、三回振るとやっぱりこっちの方が合うんだよなあ。小さな小太刀ならこっちの世界でも作ってもらったんだがやっぱりメインは刀がいい。と思っていたんだけどよく見たら雫の刀がないのに気づく

「つて雫お前剣は?」

「魔族との戦いで、折れたのよ。」

「ああ。……んじゃしゃーない。ほれ。」

俺はハジメから貰った刀を鞘に戻し雫に渡す

「えっ?これ快斗に作ってもらった刀でしょ?」

「いや。いいよ。俺まだ王宮から貰った剣使えるし。予備の小太刀もあるからな。武器ないのはちょっとな。」

「刀はないが、小太刀なら数点あるぞ。」

「あくいいや。王都の職人も結構良いもの作ってくれたし。しばらくはそっちを使うかな。さすがにメイン以外の武器を変えるのはな。それなら今度会った時に刀作ってくれないか?軽さと硬さ重視の。」

「……まあお前がそう言うんならいいけど。」

「サンクス。」

そして俺たちは簡単に香織にお別れを告げハジメと別れた

壊して欲しい少女の応援

ハジメと別れたその夜俺は適当に食べ物とジュースを持って夜中に外に出ていた

綺麗な月が空に浮かんでいる

「月に叢雲、花に風って言葉を知っているかい？」

すると恵里の声が聞こえてくる。今日呼ばれた理由は分からないが何か重要なこと

「よいことには邪魔はいりやすく、長続きしないものことだけか？」

「正解だよ。」

「なんか食うか。適当に用意したけど。」

「ううん。少し話したいことがあったから。」

まあそうか。だから俺を呼んだんだよな

「んで、何のようだ？相談なら乗るけど。」

「……」

「ん？」

「……ちよつと隣座つてもいいかな。」

「いいけど。本当にどうした？なんか変だぞ。」

どろつとした感情がないっていうか

熱っぽい視線であることには変わりはないけど、どこかいつもの恵里とは違う気がする

「……本当に僕のことよく見ているよね。」

「見るっていうことが癖になっているんだよ。少し間違うと壊れる奴がずっと近くにいたからな。」

「…雫かやけちやうねえ。……やっぱり雫のことが好きなのかな？」

「好きだぞ。」

俺はあっさりと答える

隠していても仕方ないしな

恵里もおそらく分かっていたのだろう。そつかといいい俺の隣に

座ってくる

「…やっぱり僕はダメなのかな。」

「分からん。正直なところ俺は恵里のことは嫌いじゃないし俺は恵里のことは好きな方だぞ。」

「……壊れているの？」

「壊れているなら治せばいいし、不良品を集めるマニアだっているんだぞ。ガラクタだと思っただらちゃんど価値のあるものなんていくらでもある。……俺の中では恵里も大事な人の一人なんだよ。クラスメイトでいうならハジメのちよつと上くらいか？」

「それは結構な高評価だね。はあ。こんなことでも嬉しくなるって本当に恋って気持ち悪いよね。」

「……恋は病気ってよく言うもんな。確かにお前にとつたら気持ちが悪いものかもしれないな。」

俺も苦笑する。でも同じ恋をする身から

「でも、悪いものではないだろ。」

「そうだね。嫌なことではないよ。」

たつた短い呼びかけに肯定する。恵里は少し呆れたようにそして拗ねたようにしながら

「……それでもあつちに戻ったら僕も一緒にいるって思っているんだね。」

「ん？違うのか？」

「酷いね。振るんだったら見捨ててくれたら少しは楽になるかもしれないのに。光輝くんできえ見捨てたんだよ。壊れているんだよ。食事に毒だつて入れていたんだよ。それなのにいつも側にいて。気遣ってくれて。頼ってくれて。僕を見てくれて。」

震える声が聞こえてくる。とりあえず俺はずっと聞き続ける

恵里の声を。恵里の想いを

「ずっと一人だったのに。僕はずっと一人だったのに。こんなに苦しいのならば一人の方がよかったのに。」

「……」

「……どうして僕をそんなに守ってくれるの。何で僕を壊してくれな

いの。」

嗚咽が聞こえてくる。やっぱりか。

俺は大体予想ができていた

恵里は壊れたかったのだ。

俺と会った時確かに恵里は壊れていた。今でも壊れていると思っ
ていることもあるし結構ブツとんだ発言をすることが多い

……おそらくそれを意図的にやっていることも気づいている
それでも

「俺には恵里を見捨てるって選択肢はない。」

俺は断言する

「一応これでも恵里のことは知っているつもりだし一応俺の家に住んで
いるんだぞ。言っとくけど俺は面倒臭いんだよ。一度気にかけて
人物なら最後まで面倒を見るのが当たり前になっっているんだ。お前
も一度関わったから縁が切れるまでは見捨てない。そう決めている
んだよ。光輝があんなんだろ。だから後々被害が強くなる人も結構
見てきたし、実際に虐めが強くなった人だっただけじゃない。俺だって小
学校のころは女子から虐められていたんだぞ。」

多分あの時からだ。あの時味方になってくれたクラスメイトの声
が嬉しくて、もし困った時でも一人になっている人がいるのなら支え
てやろうと思ったんだ

俺が御節介とか苦労人って呼ばれるようになったのは

「俺は絶対に友達を見捨てない。相手にうざがられようが嫌がられよ
うが関係ない。絶対に一人になんかさせてたまるか。」

「……そっか。」

「まあ恵里はちよつと踏み込み過ぎている気がしないでもないけど
な。それでも俺の家に居座っている間はちゃんと居場所を作ってや
る。つーか……さすがにあんだけ長く同居生活してたらもう一人の
友人ではなく家族として扱っているからな。」

俺が少し苦笑し少し頭を撫でる

「……はあ。本当にお人好しがすぎるね君は。」

「それが俺だしな。苦労人って呼ばれるのは嫌いじゃないんだ。」

まあ、わけのわからないトラブルや異世界転移に巻き込まれるのはもつてのほかだけど

「うん。僕……私ももう少し色んなことに頑張ってみようかな。日本に戻ってもずっと近くで見えてくれる人がいるし。」

「まあ、家族としてだけだな。」

「……今日のところは雫に譲るけどそれでも諦めないから。もうみんなにはバレちゃったしこれから覚悟しておいてね。快斗くん。」

「あんまり誘惑してくんなよ。」

「大丈夫そうだったら雫と鈴と分け合うから。」

「俺はケーキかなんかだよ。」

「こつちだったら重婚できるのだよね？それなら私たちにも勝機はあると思うんだよね。快斗くんの性格から言ったら断ることなさそうだし、多分雫の許可を取れたら多分受け入れるだろうし。」

「……」

やばい。こいつ完全に吹っ切れやがった

元々こいつの思考の回転力や発想力は明らかにピカイチで妙に鋭い意見をしっかりと答えることができる

……そしてほぼ正確に俺のことを言い当てられていた

「……私絶対諦めないから。絶対に逃がさないよ。」

軽く舌を出し俺を熱っぽい視線で見てる。

でもさつきまでとは違い粘っこいや気味の悪いものではなくただ一人の女子みたいに純粹で本当に恋する乙女だ。

こりや逃げられないかもな

俺は地球に戻ってもトラブルに巻き込まれるんだと思うと少しため息を吐くしかなかった。

しばらく待つと雫がこつちに向かってくる

というのも雫から言われて少し話せないかと言われたのだ

自然と俺の隣に座りいつもよりも近くににいるような気がするがまあ無視していいだろう

「終わったか？」

「ええ。」

「どうだった?」

「それはもう凹んでいたわ。ずっと自分の物だと思っていた香織が南雲くんに取りられたのでもん。」

「あいつ恐らく香織のことが好きだったからな。まあしばらくは落ち込んだままだと思うけど。」

「それに完全にあなたに協力する人が多くなったわけだし、仕方ないっていったら仕方はないと思うけど。」

「……まあそうか。でも光輝のせいで俺たちの最初の目的が変わっていったからな。」

すると少しため息を吐く。

「…まあ。俺のことについてなんか言っていたか?」

「ええ。人殺しのくせにみんなを誑かしてとか恵里や鈴のこと、それとわたしのこととかね。」

「……そっか。」

俺は少し苦笑する。

「……やっぱり合わないよな。俺は別に嫌いって訳じゃないんだけど。」

「ええ知っているわ。ただ。相性が悪いだけだから。」

「お互いに統率者だもん。普通なら女子があいつで男子が俺って別れていたから。」

「最近鈴や恵里、辻さんがあなたの味方になったから剥れているだけよ。すぐにいつもの光輝に戻るわ、」

「いつもの光輝に戻ったらダメだろ。ちゃんと現実を見れる光輝にならないと。」

「……いつもよりも辛辣ね。」

「さつき恵里と話してきたばかりだからな。……あいつだつて光輝の被害者の一人だよ。」

俺はジュースを飲むとすると苦い顔をする雫

「そういえば自殺行為って。」

「あいつが俺の家に住み込んでいる問題と関係あるからな。あんまり

いい話じゃねーぞ。」

恵里には許可を取っているので話し始める

「あいつの家結構やばいんだよ。今母親も父親も娘に暴行を加えたとして逮捕されている。母親が恵里をDV、今の父親は娘にレイプ未遂をしてな。」

「えっ?」

「一応探偵であいつの事件について警察から依頼が来たんだよ。元々5歳の時に前の父親が恵里を庇って死んだんだってさ。」

そして後々恵里から聞いた情報も合わせて話していく

あいつの中学生時代の事件。暴行事件。多分初めて話した橋での話や。そして探偵の手伝いをした俺が証拠を見つけて恵里の母親を逮捕の原因になった話を。

そして話終わると

「……あんたどれだけ巻き込まれたら済むのよ。」

「知るか。俺だって巻き込まれたくて巻き込まれる訳じゃないんだぞ。」

第一声の呆れた口調に俺は苦笑いしながら答える

「……まあ、あなたらしいっていえばあなたらしいけど。」

「まあ出来るだけ隠してきたからな。あいつ自分の欲であれば魔人族に裏切ってもおかしくはなかったし。」

「裏切るってまさか。」

「ありえるだろ。あいつの天職は降霊師だ簡単な会話くらいならできるのを俺は見ているからな。まあ裏切ったら裏切ったで俺は助けられると思うけどな。」

「……本当にあなたらしいわ。」

多分俺のお人好しのところを言っているんだろう。

「まあな。まあついでにあいつは今日堂々と告白してきたから。」

「……」

「ついでに断ったからな。」

「何でそれを私に?」

「お前自分の顔を鏡で見ても。明らかにニヤついているぞ。」

「えっ?」

すると顔をペタペタと触る雫に苦笑する

でも顔が緩み明らかに機嫌が良さそうだ

「……幼馴染って残酷だよな。相手の知らなきやよかったことですらわかってしまう。だから光輝や龍太郎。雫に香織の好きな人は分かってしまうし。」

「私のも?」

「分からないと思うか?というよりも分からない振りをするの大変なんだぞ。お前の親父さんに頼んだとか言われるし。」

「……」

するとかあゝと顔を真っ赤にする雫

「……いつから気づいてた?」

「多分小学生最後の学芸会かな?お前から初めて俺にお願いしたからな。光輝だと思っていたから完全に油断してたけど。」

「……懐かしいわね。」

「俺が騎士でお前がお姫様役。香織の支援もあって過去一の反響だったらしいぞ。あの時のビデオ今でも小学校で見られているらしいし。まあ騎士役なんてやりたくなかったけどな。」

「クラスメイトの男子が進めてきたのだったわよね。」

「でもあの時の女子の顔かなり傑作だったよなあ。雫完全に似合ってたし。あれからじゃないか?確か雫が告白増え始めたのって。」

「あんたもでしょ?」

と雫はいうけど俺はそうでもなかった。

「俺は光輝の影に隠れていたしな。あの時の主役は完全に雫だよ。まあその時の香織の暴走でなぜか俺がお前に告白するシーンをアドリブで入れられたんだよなあ。その時まんざらじゃなかったのを見てもしかしてって思い始めた。」

「そんなに分かりやすかったかしら。」

「お前が香織センサーについているみたいに俺には雫センサーがついているし、それに香織だってハジメセンサー付いていたっぽいだろ。大体の雫の考えていることは分かる。というよりも俺も小学生の頃

から雫一筋だったしな。」

「…えっ?」

驚いたように俺を見る。いやマジで?

俺結構分かりやすかったと思う

「気づいてなかったのか?」

「い、いつから?」

「多分一目惚れ。あんまり思い出さたくないかもしれないけど。泣いている時の笑顔がすごく綺麗だったんだよ。あの時は自覚なかったけど、俺も学芸会の時に俺も気づいたし。あん時雫がなんというか。可愛すぎて。」

あの時の雫は本当に破壊力が高すぎた。その場にいた香織が抱きつき男子の大半が鼻血を流してしまうほどに威力が高かったといえればその大惨事がわかるだろう

「雫のことが好きです。」

そして俺は自然とその言葉を。自分の想いを告げた

「多分、これからも迷惑をかけると思うし俺が持って来たトラブルに巻き込まれるかもしれない。でも、ずっと俺のこの先の人生を支えて欲しいし、支えていきたい。頼りないかもしれないけど。それでもずっと隣にいてほしい。」

だから

「好きです。俺の彼女になってくれませんか?」

笑って、笑顔でちゃんと言い切ることができたと思う。

告白するって気持ちはなかったけど、

それでも

『今日のところは雫に譲るから。』

この言葉で言うならば明日からはおそらくこういう空気になったのなら恵里が全力で邪魔してくるだろう。

何となくわかる。

あいつは俺と住んでいた時でも欲しいものは容赦はしない。

特別でなくて俺のそばにいたい。

彼女になりたいと思っっている以上多分どんな手を使っても掴んでくるだろう

多分俺の応援なのだ。今まで気持ちを伝えてこなかった。

まあお互いに恋愛に関しては草食系なだけあつてお互いに遠慮がちになつていた。

「……」

目からは潤んだ視線でそして一度頷くのが見える。

「ええ。私も好き。ずっと好きだった。」

すると軽く座りながら抱き寄せる。雫はもちろん抵抗せずにただ抱きしめられた

……暖かくどこかホツとする。その雰囲気心地よく。そしてどこか柔らかい気がした

忍者 快斗

翌朝。俺はメルド団長と相談し、王宮に引き返すということを決めた。

現在、光輝達の早急に対処しなければならぬ欠点、〃人を殺す〃ことについて浅慮が過ぎるという点をどうにかしなければ、これ以上戦えないという事で、彼等は王都に戻って、魔族との戦争にこのまま参加するならば、〃人殺し〃の経験は必ず必要となる。克服できなければ、戦争に参加しても返り討ちに遭うだけだ。

そしてウルのこと、俺は内密にメルド団長に伝えた。雫を送り届けた後俺はギルド団長と対談したのがきつかけだった。

そして愛ちゃん以外全員が集まった王宮で俺はリリイに頼み俺たちだけの食事の場所を取らせてもらった

「つてことでウルが町がおよそ6万の魔物に襲撃されたらしい。主導者は魔族らしいが、ハジメ曰く清水も関わっていたらしい。そして敗残者の清水はハジメに処刑された。」

「……………」

俺の言葉に全員が黙り込む

「処刑つて?」

「殺されたつてこと。銃で撃ち抜いたらしい。ギルドの報告書に書いてあったようだぞ。恐らく断定はできないけど愛ちゃんを狙った襲撃だと考えている。」

「先生を?」

「ああ。俺がステータスを見た時に愛子先生のことをチートって言っただろ?戦争の兵の数だけ食料を使うことはさすがに龍太郎でも分かるよな?」

「…………お、おう。」

…………多分わかってなかったんだろうな。

俺は少しため息を吐き説明を始める

「先生の天職は食糧供給率を数倍にすることができる。戦争つていうのは少なくとも数千。多ければ数十億単位の人が参加する。つまり

は食料品は戦争のエネルギーなんだよ。正直なところ勇者よりも厄介で俺たち以上の戦力なんだよ。愛ちゃんは魔族としたら大した力を持たない、最強の武器であるってことだ。」

すると全員が絶句する

「……まあ本当に偶然にハジメ達がいたおかげで助かったな。マジで先生がいないと教会に対抗できないし。」

「やっぱりまだお前が相手をするのか？」

「ハジメと戦いたくなければ俺になるだろうな。基本的に今勇者の価値は正直低いしな。元々光輝は話し合いには向いていない。今までは自分の言うとおりになってきたし、政治関係地球の時から正直どうでもいいって感じだろ？俺は探偵業でバイトしてきたこともあってある程度は裏の仕事もしてきたから。そこらへんは詳しいんだよ」「裏の仕事？」

「麻薬取引とか暴力団関係。後殺人事件の調査とかな」

「「「えっ？」「」」」

鈴の言葉に答えると全員が俺の方を見る

「その前に俺のステータスに付いても話さないといけないかもな。俺だけみんなにステータスを見せていなかったら？その一部。所謂戦闘技能に付いて話そうと思う。探偵業が大きく関係しているし、雫が俺みたいに発狂するのを防ぐ為だし。多分今なら、恐らく……いや龍太郎、永山。雫抑えといて。辻も回復魔法の準備しておいて。」

「お、おう。」

「ちよつと待つてあなた何を知っているの。快斗あなたにそういえば私のお父さんやお爺ちゃんの不安になるようなことを言われてきたんだけど。」

それ、当たっているな。

「俺の家族は表面上は普通の探偵なんだけど裏は警察直下の探偵らしくて、政府関係者や暴力団関係の調査に使われる。裏専門の探偵なんだよ。結構危険な仕事を引き受けてきたらしいんだ。俺がそれを継ぐって言うてあったからすでにそう言う危険な調査や特殊な訓練も受けてきている。」

「……特殊な訓練って？」

「まずは剣術と体術。これは表の八重樫流で習ってきたことだ。これに付いては光輝も知っているだろう？」

「あ、ああ。でも俺たちよりも明らかに道場にいる時間が短かったんだよ。それなのにいつもボロボロに帰ってきたからてつきり体術の方に向かっていたかと思っていたんだが。」

「ちよつと待って表の八重樫流って何のこと。それじゃあ裏の八重樫流があるみたいじゃない。」

「雫。それが俺たちの秘密事項なんだよ。」

「……えっ？」

俺がそう言うのと明らかに引きつっている雫

そして無言で俺のステータスプレートを見せる。すると数人がある一個のところを見て吹き出した

「忍術だど。」

「ああ。八重樫流忍者道場。それが俺の隠してきたことだ。生憎黙っているわけにもいなくなってきたし戦争真っ只中だからな。」

「ちよつと待ってつまり快斗くん忍者ってこと。」

「世間の声を聞くなりそうなるな。機密事項だからあんまり話すなよ」

「えつとつまり私のお父さんやお爺ちゃんも忍者ってこと？」

「お前のお母さんもな。」

「……ちよつと待ってあなたいつから。」

「ちゃんと正式に教えてもらったのは継いだときだけど。訓練を受け始めたのは道場を通い始めた時から気づいていたな。明らかに」

するとフラフラと頭を抑える雫。本当に頭を抱えてたくなるよな

「……お前とんでもない秘密抱えてきたんだな。もしかして身代わりの術や分身の術とかもできるのか。」

「できるぞ。でも、俺の本職は剣の方だけど煙玉や毒物は雫の母さんを見ておぼえたし、基本的な八重樫流忍術は雫のお爺ちゃんから習ったからな。あの人たち俺が晩飯を食べて帰る時しびれ薬や睡眠薬をこっそり混ぜたりしていたからそういう耐性もあるし。」

「お母さん何しているの！」

それが恐らく毒物耐性の一つになっている

「……それよりも俺は最後の二つが気になるだけだ。女難と苦労人つて。」

「本当だ。……苦労人つて八重樫さんでもついてなかつたよね。」

「ちよつと待つて何で私が苦労人扱いされるわけ。」

「……そりゃあな。ある意味苦労人だろうよ。まず、両親が忍者だぞ。俺もかなり最初は戸惑ったし、両親に聞いても『あんた何言っているの？ 忍者なんているはずないでしょ。』つてはあ？ 家にマキビシや痺れ薬手裏剣がある家が何で忍者じゃねーんだよ。」

「か、快斗くん落ち着いて!!!」

しばらく愚痴を吐き溜まっていた鬱憤を吐き出す。するとすつきりしたころには

「……俺もつと快斗に優しくしよ。」

「快斗くん。ジューズいる？」

「……本当に私のお父さん何しているのよ。」

同情の視線が多く降りかかり何故か親しい人には慰められていた。

「悪い。取り乱した。」

「いや、いい。てか雫の家がそんな家だったなんて。」

「まあ、出来るだけ隠しておくはずだったからな。魔族の状態を見るに使わざるを得ないからみんなに話そうと思つてな。」

「……そういえば快斗くんはこれから？」

「基本フリーだからギルドの高難度依頼を受けようと思つているけど。」

「……やっぱり冒険者ギルドの依頼なの？」

「そつちの方が世間の目を集めることができるからな。」

そつち側の方が支持を集めやすいし

「私もそつち手伝うからね。」

「知っている。リリイも来るつて言っているから。」

「……リリイも？」

「ああ。リリイに伝えると『それじゃあ公務をすぐに終わらせませ

ね』って無茶しないでいいって言ったんだけどな。あいつ終わらせて来る気満々だぞ。」

「リリイも楽しそうだったからね。案外あっているんじゃない？」
「ふん。」

すると凄く不機嫌そうな雫にみんながビクって反応する

笑顔だけど迫力があり、どこか俺の方を睨んでいる

「……雫？何をそんなに怒っているんだ？」

「……何でもないわよ。」

光輝が雫に恐る恐る聞くのだが

…全員がそんなわけないだろうと内心突っ込む。

まあ、でも

「とりあえず解散。とりあえずは戦争に参加するもしないも当分は気をつけろ。魔族の襲撃が続いている分あつて当分は王都も王宮内も騒がしくなるだろうから。」

と俺は締めくくる。……機嫌直し大変なんだろうなあと俺は彼女である雫の元に急ぐのだった。

6巻

運命のカウントダウン

「それで、雫とはどこまで進んだの？」

「……あんな。今雫と付き合っていること明言してないんだぞ？」

「……案外ヘタレだよ。君。」

「うっせ。……彼女ができたといっただけ俺がすることは変わらないからな。」

ハジメとの再会から一ヶ月の月日が経とうとしていたある日のこと

と珍しくリリイが公務のために王宮で公務を行っていたので恵里と二人つきりで冒険者の仕事を受け終え少し代金処理に追われていたので仕事が終わる頃には夕暮れ時になっていた。

もちろん話題は恋愛関係のことが多く恵里が積極的に攻めてきて俺はそれを逸らしている

訓練している雫に出来るだけ付き合っている俺は少しだけ苦笑してしまう。

あいつは弱い。

そのことは小学生の頃から一番知っている自信がある。

もちろん光輝たちや香織にも知っているよりもずっと俺がわかっている

「……今どうこういふべきではないんだよ。俺も心配だけど人を殺すっていうのは俺たちみたいにそう易々できるわけじゃないさ。」

「……」

「なんだよ。」

「……殺すことに慣れてるって恐らく嘘だね？」

その一言に俺は足を止めてしまう。

恵里が真剣な眼差しで俺を見てくる。

「気づいてないと思うけど最近人を殺す依頼が多いの分かっているの？ほとんど快斗くんがとどめを刺している。まるでそれが当たり前

であるかのように。」

「……俺そんなに入れていたか？」

「うん。週に4回も盗賊や裏組織の壊滅の依頼を受けていたら誰でも気付くよ。……多少無理していることもリリイも言っていたからね。」

全く自分でも気付かなかったことを恵里とリリイが気づいていたことに快斗は戸惑ってしまう。

「気づいてなかったの？」

「あ、ああ。完全に無自覚だった。」

「……なんか自分のことで抜けているよね。元々自分のことをあまり考えないやり方をしているけど。」

そんなつもりはなかったんだけど俺はちよつとため息をつく
正直なところみんなには隠してもらっているが俺も初めて人を殺した時は吐いた

今でも手に嫌な感触が残っている。恐らく今日の夜も眠れないだろう。

それが当たり前になっていたのだが

……まさか自分から殺人に慣れようとしていたとは思ってもなかった

「雫を甘えさせることも考えばかりじゃなくてちゃんと自分のことも考えないと。」

「……。」

なんとというか、すごく痛いんだけど。

「……悪い助かった。」

「へ?。」

「全く気付かなかった。結構俺もきていたんだな。」

と俺はぼりぼりと頭を搔く。

すると本当に気づいてなかったことを悟ったんだろう。

「えっ。本当に気づいてなかったの？」

「この世界にいてからはずっとフォローばかりだったからな。……それに他人のことに目をそらし続けることで恐怖を紛らわせていた

からな。」

「……っ!!」

恵里が絶句している。

今までそんな様子は見せてこなかった。だから気軽に頼ってくる人も多かった。

だから俺はちゃんとした恐怖というのから逃げている。

誰かが死ぬという恐怖から逃げている。

「……あんな。俺だって高校生だぞ。この世界の見解についても大体は理解しているし。怖いことなんて一杯あるんだよ。それを隠す為に必死なんだぞ。」

本音を隠していた訳はそこだ。ずっとクラスメイトのことに目をつけて。依頼の為という理由で。

ずっと恐怖を隠し続けている。

今でも恐らくこれからもずっと隠し続けていくのであろう。

「……本当なんだね。」

「ああ。」

「……そっか。」

と言いながら恵里は何も言わない。

そうしていつもと同じ帰り道を歩いていると

「……ん?」

街中でフードを被った女性が通りすぎる。それはいつもとは違うが……恐らく見間違いはないだろう。

あいつが俺に挨拶しないなんて珍しいな。

と思った矢先急にいやな予感に襲われる。

「どうしたの?」

「……恵里。悪い。ちよつとハジメのところ行ってくる。」

「えっ?」

「恐らく。今のフード姿もう一人のパーティー仲間だ。」

すると恵里が驚きの目でその言葉がリリイであることを遠回しで言っていることが分かったのであろう。そして数秒考え恵里は俺の

背中を押す

「……うん。私は雫と鈴をぐまかしておくね。」

「へ？いいのか？」

「うん。ちよつと緊急の依頼があつて帰れないって言うておくよ。快斗くんはもう何か感じ取っているんでしょ。私もその嫌な予感が当てはまっているとすれば……南雲くんを呼んできた方がいいと思う。でも二人が抜けたら大変なことになるから私か快斗くんかになるけど。それならば南雲くんが仲がいい快斗くんの方がいいよね？」

本当に頭が回る奴だよ。今回ばかりは俺で解決できるような問題でないのを悟つてのリリイの行動だ。

恐らくそれは正解なんだろうけどあいつ護衛もつけずに行動するなんてさすがに見逃せる訳がないだろう。

きな臭いことになってきた。

「サンキュー。……気をつけろよ。」

「そつちこそ。リリイにもよろしく。」

時は近いと言つてもいいだろう。リリイのあの慌てよう。教会が動き始めたことに違いない。

……正念場だな。

俺は顔を一度叩き走りだす。

運命の時まで残り3日。

悪夢のカウントダウンが始まっていた。

生きるか死ぬかを博打

「すみません。俺も乗っていいですか?」

「ん? えつと君も乗車希望でいいのか?」

「は、はい。エリセン行きですよ。」

と俺が告げるとすると商人が耳元で呟く

そしてその商人は、いや、俺たちがいつもお世話になっているユンケル商店の店主が俺にこつそりと告げた

「もしかしてお忍びですか? 快斗殿。」

「悪い。ユンケルさん。ちよつと暴走姫さんの護衛だよ。」

「ええ。リリアーナ姫でございますな。」

すると苦笑するユンケルさん。元々少しパーティーで交流があるのですぐに信頼できると思っっているんだろう

「それと先払い。一応30万入っているから二人分つてことで。」

「いえ、緊急時のことなので代金はいいですよ。さすがに受け取れない相手がいるとなると。それに最近のホルアドまでは物騒で。快斗殿のお手を借りたいんですが。」

「護衛任務か。オツケー。悪いが俺たちは目的の人物がいたら降りさせてくれないか? リリイが俺に報告しないでどこかに行くことは契約違反になると思うし。」

「目的の人物ですか?」

「ああ。南雲ハジメって言うんだけどな。ちよつと力を借りに行く。恐らく教会が動き始めたからな。俺だけで対応ができなさそうだしちよつと助けを求めに行こうと思っっているんだよ。」

と要件を告げると頷くユンケルさんが少し驚きの表情をしたのが特徴的だった。

ハジメを知っているのかと首を傾げるがとりあえず時間がないので俺も乗車する

「あれ? 快斗さん?」

「お久しぶりです。快斗さん。依頼ですか?」

「おつ? クリスとクロックじゃん。久しぶりだな。」

「ええ。快斗さんのおかげでシルバーランクになってから初めての依頼ですよ。……快斗さんは。」

「俺はちよつと私用だよ。無料で乗せてくれる代わりに護衛任務ってわけだ。」

「そうなんですか？それなら一緒に護衛任務引き受けてくれるんですね!!それなら快斗さんの故郷の話が聞きたいです。」

「時間空いた時にな。悪い少しの間抜けるぞ。」

と俺は手を振り一息つく。まあとりあえずと俺は台車に乗るとするとフードを深くかぶつたりリイが一瞬驚くすぐに下を向く

俺はそうして台車に乗るとリイの隣に座る

「何があった?」

緊迫したように俺が尋ねるとリイは少しだけ驚いたようにしてから少しだけ息を飲みこういった

「雫さんと愛子さんが攫われました。」

「……っ!!」

その一言に俺が思っていたことよりも最悪な状況を悟ってしまふ

愛子先生は恐らく力を持ちすぎたこと

問題は雫が攫われたことに関してでありそれが何を意味しているかということ

俺に対しての宣戦布告

ということだろう。

俺と恵里は最近ちよつと遠出することがありほとんど王宮にはいないし、ほとんど雫と一緒にいたのが災いしている

リイ曰く最近、王宮内の空気が何処かおかしく、ずっと違和感を覚えていたらしい。エリヒド国王は、今まで以上に聖教教会に傾倒し、それに感化されたのか宰相や他の重鎮達も巻き込まれるように信仰心を強めていった。

各地で暗躍している魔族のことが相次いで報告されている事から、聖教教会との連携を強化する上での副作用のようなものだ、半ば自分に言い聞かせていたのだがそれだけにとどまらなかった。妙に覇気がない、もつと言えば生氣のない騎士や兵士達が増えていった

のだ。顔なじみの騎士に具合でも悪いのかと尋ねても、受け答えはきちんとするものの、どこか機械的というか、以前のような快活さが感じられず、まるで病気でも患っているかのようにだった。

そのことを、騎士の中でもっとも信頼を寄せるメルドに相談しようにも、少し前から姿が見えず、時折、光輝達の訓練に顔を見せては忙しそうにして直ぐに何処かへ行ってしまふ。結局、一度もメルドを捕まえることが出来なかった。

そうこうしている内に、愛子が王都に帰還し、ウルの特での詳細が報告された。その席にはリリイも同席したらしい。そして、普段からは考えられない強行採決がなされた。それが、ハジメの異端者認定だ。ウルの特や勇者一行を救った功績も、「豊穰の女神」として大変な知名度と人気を誇る愛子の異議・意見も、全てを無視して決定されてしまった。

有り得ない決議に、父であるエリヒドに猛抗議をしたが、何を言ってもハジメを神敵とする考えを変えないようだった。まるで、強迫観念に囚われているかのように頑なだった。むしろ、抗議するリリイに対して、信仰心が足りない等と言いつつ始め、次第に、娘ではなく敵を見るような目で見始めたのこと。

恐ろしくなつたので、咄嗟に理解した振りをして逃げ出した。そして、王宮の異変について相談するべく、悄然と出て行つた愛子や雫を追いかけ自らの懸念を伝えた。すると愛子から、ハジメが奈落の底で知つた神の事や旅の目的を夕食時に生徒達に話すので、リリアーナも同席して欲しいと頼まれたのだそう。

愛子の部屋を辞したりリリイは、夕刻になり愛子達が食事をとる部屋に向かい、その途中、廊下の曲がり角の向こうから愛子と何者かが言い争うのを耳にした。何事かと壁から覗き見れば、愛子と雫が銀髪の教会修道服を着た女に気絶させられ担がれているところだった。

リリイは、その銀髪の女に底知れぬ恐怖を感じ、咄嗟にすぐ近くの客室に入り込むと、王族のみが知る隠し通路に入り込み息を潜めた。

銀髪の女が探しに来たが、結局、隠し通路自体に気配隠蔽のアーティファクトが使用されていたこともあり気がつかなかったようで、

リリイを見つけることなく去っていった。銀髪の女が異変の黒幕か、少なくとも黒幕と繋がっていると考え、そのことを誰かに伝えなければと立ち上がった。

ただ、愛子を待ち伏せていた事からすれば、生徒達は見張られていると考えるのが妥当であるし、頼りのメルドは行方知れずだ。悩んだ末、リリイは、今、唯一王都にいない頼りになる友人を思い出した。そう、香織だ。そして、香織の傍には話に聞いていた、あの南雲ハジメがいる。もはや、頼るべきは二人しかいないと、リリアーナは隠し通路から王都に出て、一路、アンカジ公国を目指したのである。

「しかし快斗さんに見つかったことはどうしたら。」

「いや。恐らく狙いは俺とハジメだ。それに恐らく俺は逆に王都にいない方がいい。」

「……理由をきいても?。」

「まずは俺が魅了系統の防御を持っていない。今クラスで一番発言権が高いのは俺だ。乗っ取られたら真面目にクラスごと乗っ取られる可能性が高い。それに愛子先生と雫を戦闘不能にしたつてことは恐らく魅了が効かなかった。それが原因だろう。恐らく女子に関してはある程度の耐性ができているんだと思う。」

よくよく考えればほとんどが男性ばかりが巻き込まれている

「つまり、男性の方が効きやすいってことですか?。」

「ああ。それで攫ったということは恐らくハジメの救援を防ぐって意味もあるんだろうな。……それに俺の予測では……ちよつと急いの方が良さそうだな。おそらく……王都が魔族の襲撃に合う可能性が高い。」

「っ!!」

「これは完全にエヒトって神が魔族に通じていると考える方が妥当だろう。よくよく考えたらウルスの街に愛子先生がいることを知られているのも俺たちがオルクスの大迷宮にいたことも全部知られていたのも不自然すぎる。」

よくよく考えればおかしいことが多々ある。

「こりゃクラスの中にも内通者がいるかな。多分あいつだろうけど。」

「知っているんですか？」

「檜山。ハジメを殺そうとした張本人。」

するとリリイが固まる。

「本当ですか？」

「ああ、恵里も気づいているけどハジメとの会合であいつで断定していいだろう。意図的に襲う理由がある奴は檜山以外ではありえない。」

「へ？」

「ハジメを狙ったのは変化した魔弾だった。すなわち人の意思でハジメを殺そうとした。意図してやった魔法だ。即ち動機があるってことだ。檜山は誰から見ても香織のことが好きだったからな。原因は嫉妬だろう。」

俺がそういうとリリイは少し驚きの表情を見せる。しかしすると考え

「それならクラスの皆さんが危ないんじゃないや。」

「だから恵里を残してある。あいつは檜山の危険性について理解しているからな。話しているときから何も企んでないだろう。それに魔族が神代魔法を持っていることは前回の会合で話しただろ？悪いけど俺たちじゃ恐らく負ける。たった一人の魔族を殺すのでさえ時間がかかったのだから」

「……」

「ここはもうかけるしかないんだよ。ハジメたちと合流して王都に戻るのが先か。それとも王都が滅ぶのが先か。」

確率は半々。だからこそ賭けなのだ。

ここで万が一少しでも賭けに失敗したのなら。

全員死ぬだろう。

馬車に揺られながら俺は息を吐く。

助けに行きたい気持ちを抑えて

今日も自分を押し殺す

仲間のためにひたすらに恐怖を押し殺して生きていくのだ。

再会そして王都へ

あれから1日がたったある日のこと

「ん？……戦闘準備。盗賊およそ50人以上が近づいている。」

「なっ!!50人だ!!」

俺の気配感知に引つかかったのだが、人間と思われるその数は50を優に超えている

「……快斗さん大丈夫そうですか？」

「微妙。人数的にはやや厳しいな。リリーの結界がどこまで作用するかって感じか。壊滅するのはさけられるとしてもどれだけこっちに被害がいくかってところかな。」

俺自身壊滅できる自信はあるがそれなりに時間が掛かる。それがどれだけ続くかだよなあ

「多分包囲されるだろうから俺以外は反対側やってくれ。人数が多い方は俺がやる。」

支援がないから正直厳しそうだけどな。

俺自身素の戦闘であれば広範囲殲滅は正直向いてはいない。

個々の攻撃に特化しているために普通なら爆薬を起動するのだが、後々のことを考えると爆薬は残しておきたいのである。

元々爆薬というのは戦争のほかには鉱石の採取や解体工事に使われており、比較的高価なものとして扱われている

なのでいくら勇者たちと言っても買う限度がある。

元々俺の使っている爆薬は破壊工作に使用しているものや盗賊退治の時に使う煙玉など多くの時に火薬は使用しないといけない。

まあ躊躇してる暇はないか

手榴弾型の爆弾のピンを抜き俺は盗賊の方に投げると同時に高速で突っ込んでいく

大きな爆発音と爆風が広がると同時に俺は爆風の中に入り噴煙に紛れその直後に悲鳴と爆発によって返り血が爆発の範囲内を蹂躪し血を浴びるが俺は気にすることはなく錬成師に頼んだ先を尖ったピンだと思われるのもだがれっきとした手裏剣を投げる

元々この爆薬は範囲が少なく威力もそんなの高くはないものであるため中心部以外は煙幕がわりくらいにしか使えないのだがそれだけでも十分だ

そして数分後には俺の周辺には火薬と噴煙の焦げ臭く真つ赤で血だまりが出来る

「……はあ。」

と一息いれると俺は小さくため息を吐く

俺がため息をつき反対側では応援に向おうとした後

暴走した車が反対側に戦闘いると思われるところに突っ込んでいき

ドゴオ！ バキツ！ グシャ！

と生々しい金属が人間にぶつかる衝撃音が聞こえ悲鳴が聞こえて来る

「……は？」

戦場であつたに関わらず俺は口をぽカーンと開けてしまった

だけど数秒後に俺は一度顔を叩くとその方に向かう。

するとそこには思ったとおり

「あれ？香織？」

「えっ？快斗くん？ってその血って。」

「ああ？返り血だから大丈夫。さくつてと。……残りも殺すか。」

俺は空を飛びと小さく魔法を詠唱する。

「蜃気楼。」

濃い霧が発生し幻影魔法の基礎にあたる魔法は盗賊を冒険者のように見せかける

すると盗賊団はパニックになり同士討ちを始める。

それは味方だというのに争いあう盗賊に香織は驚く

「えっと、あれって。」

「盗賊と味方の見た目を反転させたんだよ。すなわちあの霧は同士討ちに見させている幻影魔法だ。」

「……あの、それって結構えげつない。」

「ん？襲ってきておいて簡単に殺すわけないだろ？ってそんな暇ない

んだった。……一応お前らを探しに向かっていたんだよ。」

「えっ？ 私たちを？ もしかしてリリーの護衛？」

「あんな。一応リリー俺の侍女だぞ？ 今のリリーってあんまり権力ないんだよ。まあ、俺もリリーに聞いただけで分からないことが多いんだけどな。」

と俺がそういうと香織が首を傾げる

そしてどンドン悲鳴が小さくなり、霧が消える頃にはいつのまにか盗賊団は全滅していた。

「快斗さん。」

「何人死んだ？」

「いえ。大半を快斗さんが倒してくれたので重傷者は一人いますが命に問題はないです。」

「ん。了解。」

「香織お久しぶりです。こんなところで香織に会えるとは思いませんでした。……僥倖です。私の運もまだまだ尽きてはいないようですね」

「リリー？ それはどういう……」

香織がリリアーナの言葉の意味を計りかねていると、リリアーナは、今更ながらにハツと何かに気がついた様子でフードを目深に被り直した。そして、香織の口元に人差し指を当てて、自分の名前を呼ばせないようにした。

「香織、治療は終わったか？ って快斗？ お前って血だらけじゃねーか！！」

「あく返り血浴びまくったからな。？」

香織とリリアーナが真剣な表情で見つめ合っていると、いつの間にか傍までやって来ていたハジメが、そう声をかけた。全く気配がなかったので、「ひゃー！」と可愛らしい声を上げて驚くリリアーナ。そして、フードの中からハジメを見上げて、しばらく考える素振りを見せると、ピコン！と頭に電球が灯ったような表情をしてハジメに挨拶を始めた。

「……南雲さん……ですね？ お久しぶりです。雫達から貴方の生存

は聞いていました。貴方の生き抜く強さに心から敬意を。本当によかった。……貴方がいない間の香織は見えていられませんでしたよ?」「もうっ、リリイ! 今は、そんな事いいでしょ!」

「ふふ、香織の一大告白の話も雫から聞いていますよ? あとで詳しく聞かせて下さいね?」

「いや。多分覚えてないだろう? お前確かにハジメと会ったことはあるけど二度三度しかないだろう?」

「……へっ?」

ハジメがまだ王国にいた頃からリリアーナと香織達は積極的にコミュニケーションをとっていたし、他の生徒に対してもリリアーナは必ず数回は自ら話に行っている。確かに、ハジメは立場的に微妙だったので、リリアーナと直接話した回数はそれほど多くはないが、それでも、香織も交えて談笑したことはあるけど

「あくえつと快斗?」

「ハイリヒ王国の王女リリアーナだよ。一応政略結婚目的で俺の待女にされた。」

「お前まじでこの世界入ってろくなことないな。」

多分ハジメ以外で一番悲惨な目にあっているのは俺であろう。あの意味トラブルメイカーというよりトラブルに巻き込まれている

「ぐすつ、忘れられるって結構心に来るものなのですね、ぐすつ」

「リリイ! 泣かないで! ハジメくんはちよつと『アレ』なの!

ハジメくんが『特殊』なだけで、リリイを忘れる人なんて『普通』

はいないから! だから、ね? 泣かないで?」

「おい、何か俺、さりげなく罵倒されてないか?」

「いや。今回ばかりはハジメの方が合っているからな。まあ一応お前の味方ってことでいいし俺の冒険者仲間で実力もランクもゴールドだ。」

さすがに三ヶ月くらい会ってなくて数回会ったくらいの方はさすがに覚えてないだろう

涙目になってしまったりリリアーナに必死のフォローを入れる香織が地味に酷いことを言うので、ハジメは思わずツッコミを入れる。し

かし、香織から「ハジメくんはちよつと黙ってて！」と一蹴されてしまった。しかもリリアーナが「いいえ、いいのです、香織。私が少し自惚れていたのです」等と健気な事を言うので、尚更、文句は言えなかった。そんな微妙な雰囲気の中、ハジメ達のもとへ、ユエ達と、見覚えのある人物が寄ってくる。

「お久しぶりですな、息災……どこるか随分とご活躍のようで」

「栄養ドリンクの人……」

「は？ 何です？ 栄養ドリンク？ 確かに、我が商会でも扱っていますが……代名詞になるほど有名では……」

「あく、いや、何でもない。確か、モットーで良かったよな？」

「ええ、覚えていて下さって嬉しい限りです。ユニケル商会のモットーです。危ないところを助けて頂くのは、これで二度目ですな。貴方とは何かと縁がある」

「あくやっぱり知り合いだったか。」

すると視線がとある指輪に向けて目を向けている。どうやらユニケルさんと何かと因縁があるようだった。

背後で、シアがモットーとの関係を説明し、「たった一回会っただけの人は覚えているのに……私は……王女なのに……」とリリアーナが更に落ち込んでいたりする。そんな彼女を香織が必死に慰めているのを尻目に、ハジメはモットーの話を聞いている。

「ふむ。そういえばお主奇妙な幻術を使っていたのう。」

「あく元々幻影魔法は俺の得意分野だからな。同士討ちなんて誘おうと思えば誘えるし。」

「お主本当に恐ろしいのう。あんな死に方だけはしたくはないものじゃ。」

するとどこか違和感を覚える。俺がこの着物を着た女性。えっと確かテイオだったか？ テイオはどこか既視感を覚える。どこか嫌な思い出でもあったんだろうか

「申し訳ありません。商人様。彼等の時間は、私が頂きたいのです。ホルアドまでの同乗を許して頂いたにもかかわらず身勝手とは分かっているのですが……」

「おや、もうホルアドまで行かなくても宜しいので？」

「はい、ここままで結構です。もちろん、ホルアドまでの料金を支払わせて頂きます」

「あく悪い。俺も言っていた通りここで降りるけど。怪我人は大丈夫か？」

「ええ。香織様の治療で大半は元気になりましたから。」

「そっか。」

俺は一安心する。

生憎知っている冒険者だらけだったので俺自身少し心配していたのだ

「んで。料金はいらなんだっけ？金銭的には余裕あるから払ってもいいんだけど。」

「えっ？ いえ、そういうわけには……」

お金を受け取ることを固辞するモットーに、リリイは困惑している。隊商では、寝床や料理まで全面的に世話になっていたのだ。後払いでいくらか請求されるのだろうと、少し不安に思っていたくらいなので、モットーの言葉は完全に予想外だったのだ。

そんなリリイーナに対し、モットーは困ったような笑みを向けた。

？

「二度と、こういう事をなさるとは思いませんが……一応、忠告を。普通、乗合馬車にしろ、同乗にしろ料金は先払いです。それを出発前に請求されないというのは、相手は何か良からぬ事を企んでいるか、または、お金を受け取れない相手という事です。今回は、後者ですな」

「それは、まさか……」

「どのような事情かは存じませんが、貴女様ともあろうお方が、一人で忍ばなければならぬ程の重大事なのでしょう。そんな危急の時に、役の一つにも立てないなら、今後は商人どころか、胸を張ってこの国の人間を名乗れますまい」

モットーの口振りから、リリイも、最初から自分の正体に気がついていたと悟った。そして、気が付いていながら、敢えて知らないふりをしてリリイの力になろうとしてくれていたことに気づいたのだろ

う。本当にうまいやり口だ

「ならば尚更、感謝の印にお受け取り下さい。貴方方のおかげで、私は、王都を出ることが出来たのです」

「ふむ。……突然ですが、商人にとつて、もつとも仕入れ難く、同時に喉から手が出るほど欲しいものが何かご存知ですか？」

「え？ ……いいえ、わかりません」

「それはですな、『信頼』です」

「信頼？」

「ええ、商売は信頼が無くては始まりませんし、続きません。そして、儲かりません。逆にそれさえあれば、大抵の状況は何とかなるものです。さてさて、果たして貴女様にとって、我がユンケル商会は信頼に値するものでしたかな？ もしそうだというのなら、既に、これ以上ない報酬を受け取っていることになりましたが……」

これでは無理に金銭を渡せば、貴方を信頼していないのと同じ義だ。お礼をしたい気持ちと反してしまう。リリイは、諦めたように、その場でフードを取ると、真つ直ぐモットーに向き合った。

「貴方方は真に信頼に値する商会です。ハイリヒ王国王女リリアーナは、貴方方の厚意と献身を決して忘れません。ありがとうございます……」

「勿体無いお言葉です」

？リリイが王女としての言葉を賜ったユンケルさんは、部下共々、その場に傅き深々と頭を垂れた。

そしてユンケルさんが去った後俺はハジメ曰く魔力駆動四輪の中で俺たちは座る。焦燥感と緊張感が入り混じったリリイの表情にハジメも嫌な予感がしたんだろう。そして話し始めた

「愛子さんと雫が……攫われました。」

リリイが話し終わるころにはリリイは震えており恐怖で今にも泣きそうな顔で全員に話していた。

「あとは知っての通り、ユンケル商会の隊商にお願いして便乗させてもらいました。まさか、最初から気づかれているとは思いませんでしたし、その途中で賊の襲撃に遭い、それを香織達に助けられると

は夢にも思いませんでした。……少し前までなら、神のご加護だ」と思うところ。……しかし……私は……今は……教会が怖い……一体、何が起きているのでしょうか。……あの銀髪の修道女は……お父様達は……」

「俺の予想だと魅了。それも男にはかなり強力なものだと思っっている。それか信仰心に対照されているものであるかのどちらかであるのだが。俺も実際は見えていないからあんまり詳しいはないんだよ。でも明らかに俺じゃ敵わないと判断しハジメのところに向かったってわけだ。」

俺は片手でリリーの手を包みながら話す。安心させるようにたった一人の少女をあやすように

「八重樫を狙ったことは狙いはお前も含まれているってことか。」
「ああ。そう認識してくれて構わない。」

「すなわち教会の力よりも強い力を持つものを排除しにかかったって認識でいいか？」

「ああ。狙いにハジメも含んでいるって思った方がいいと思っっている。それに俺も元々神なんか信用していない人間の一人でこの世界のことには気づいている一人だ。排除して掛かるのは当然のことだろう。」

「…取り敢えず、先生を助けに行かねえとな。八重樫のことは。」

「雫は俺がなんとかする。というより俺がやる。」

ハジメが少し苦笑し香織も頷く。

とりあえず来てくれるらしいから。一安心か。

「……王国のこともなんとかしたいんだけど爆薬がもうないんだよなあ。」

「爆薬？それなら代わりになる鉱石があるが？使うか？」

「粉末できるのであればなんでもいい。あと武器製造できねえか？俺自身少し作って欲しい武器が結構あるんだけど。」

「武器？」

「鎖鎌と手裏剣。あと刀。」

「あの、快斗くん？それどう使うの？」

ジト目で見られるが俺は気にしたら負けだと思っている

「まあ作れないことはないが本当に何に使うんだよ。」

「俺忍者だから色々とな。」

「忍者ですか？」

俺はステータスプレートを見せる。すると全員がポカーンと口を開け絶句した後香織の叫び声が響くのであった。

救出

雫 side

あれからどれ位の時間が経ったのか分からない。

今私と愛子先生は薄暗く明かり一つ無い部屋の中に鋼鉄造りの六畳一間、木製のベッドにイス、小さな机、そしてむき出しのトイレと、どう見てもどう見ても牢獄にしか思えない部屋のベッドの上で二人は座っていた

この部屋に連れて来られて三日が経とうとしている。

私たちの手首にはブレスレット型のアーティファクトが付けられており、その効果として全く魔法が使えない状況に陥っていた。それでも、当初は、何とか脱出しようと試みたのだが、物理的な力では鋼鉄の扉を開けることなど出来るはずもなく、また唯一の窓にも格子が嵌っていて、せいぜい腕を出すくらいが限界であった。

「……私の生徒がしようとしていること……一体何が……」
「愛子先生……。」

僅かに顔を上げた愛子が呟いたのは、攫われる前に銀髪の修道女が口にしたことだ。愛子が、ハジメから聞いた話を光輝達に話すことで与えてしまう影響は不都合だと、彼女の言う「主」とやらは思っていないらしい。そして、生徒の誰かがしようとしていることの方が面白そうだとも。

私はその時快斗が言った言葉を思い出していた

ハジメを殺そうとした犯人が分かるよ

……もしその犯人が動き出そうとしているのなら

快斗は気づいているはずだ。その狙いが快斗であることも。

きつと、あの銀髪の修道女が何かをしたのだと愛子は推測していることを聞いた。彼女が言っていた、「魅了」という言葉がそのままの意味なら、きつと、洗脳かそれに類する何かをされているのだ。

クラスメイトや友人にどうか無事でいて欲しいと祈りながら、思い出すもう一つの懸念。それは、「イレギュラー達の排除」という言葉。意識を失う寸前に聞いたその言葉で、私は二人の少年を思い出し

ていた。

一人は親友の想いびとで私の彼氏の親友である南雲ハジメ
そしてもう一人はいつも私が困った時は助けてくれる。私の誇り
できれば今回だけは助けに来てきて欲しくない人物。

しかし逢いたい気持ちに押されて、ポロリと零すように彼の名を呟
いた。

「快斗。」

「……………南雲くん」

「何だ先生？」

「助けに来たぞ。零。」

「ふえ？」

半ば無意識に呟いた相手から、あるはずのない返事が返ってきて思
わず素っ頓狂な声上がる。部屋の中をキヨロキヨロと見回すが自
分以外の人などいるはずもないのだが声の先にした方からはほつと
したような快斗と南雲くんと一緒に立っていた。

快斗side (零sideの5分前)

「…………物理的なトラップはないな。潜入するか」

「お前手慣れているなあ。てかお前迷宮攻略者じゃないのに気配感知
も気配遮断も俺よりも上手って」

俺がいつものように潜入し気配を消しながら高速で進んでいると
ハジメが苦言してくる。でも

「俺は日本でもこういうことやってたからな。」

「…………お前の家って本当に忍者なんだな。」

「俺の家っていうよりも零の家なんだけどな。」

気配を隠し俺たちはそうやって潜入していく。ハジメが驚いてい
るのはその気配の消し方であったのだがこれは俺にとって基本中の
基本だ。

「てか王都あいつらに任せた大丈夫か？あいつら独断先行でいうこと
を聞かないし制御できるか？」

「…大丈夫だろ。多分。」

心配だなと思いつながら俺は進む。

すると気配感知じゃなくても感覚的に雫の位置は分かる。

「……これ病気だよなあ。」

「……何がだよ。」

「別についてここだな。これ終わったら陽動いくから。」

「……本当に大丈夫か？」

「大丈夫さ。例え神が敵だろうが俺は俺の道を進むだけ。例え敵がお前並みの強さでも変わらない。敵なら殺す。大切な人は守る。それだけだろ。」

ハジメは少しだけ苦笑してしまう。実は夜間にユエさえないときに模擬戦をやった。助けるだけならハジメ一人で十分だろうが無理やり俺も連れていくに限っては実力を見せつなければなかった。

ハジメ自身俺のことを舐めていたのもあるだろうでも、その一瞬がハジメの唯一の負ける敗因になった。

たった一瞬でハジメの服を手裏剣が切り裂いた。いつ投げたのか分からなかったのだが手元がハジメに向けられていることから初動のない攻撃であることだけを気づいている。

殺意も視線も気づいていただろう。

ただ初動が全くなかっただけで動けなかっただけのが意外だったから

殺し合いであれば殺されていた

その事実には衝撃を覚えたらしい。

実はこれは至って簡単に相手の絶対動けない波長に合わせたのだ。

俺の対人戦はハジメと同等、いや明らかに一対一では俺の方が強い。

なぜなら俺は地球のころから戦闘慣れしているのだ。

明らかに地球でも殺し合いに近い何かをやってきた身であり人を傷つけるのを慣れている。

それどころかただでさえ化け物に近いレベルに強い。人を殺すことに躊躇はなかった完全な敵を殺す。

その強さが誰を守るためなのか、ハジメも鈍感ではないため気づい

ているだろう。

強くなりたい

小学生の時に俺が決めたこと

ずっと誰かを守る強さを

大切な友達を守る強さを

雫が困った時にいつでも頼ることができる強さを

そうしてやっと俺は雫の姿を確認するとハジメにもハンドサイン

で送る

もはや油断することなくハジメも先導する。そして辿りつき俺は

少し笑顔を見せる

「快斗。」

「……南雲くん。」

すると少し俺は苦笑してしまう。そういえば前に助けにいった時

も雫がかなりピンチの時だったか？

「何だ先生?」

「助けに来たぞ。雫。」

「ふえ?」

驚いたような声が聞こえる。それはただに合図でしかない。

少し間拔けな顔に俺は少しだけ笑いがこみ上げてくる

「えっ? えっ? 南雲君と原口くんですか? えっ? ここ最上階で:

本山で:えっ?」

「あ、うん。取り敢えず、落ち着け先生。もうちよつとでトラップが

ないか確認し終わるから……」

「一応感知式トラップはあるらしい。一応鍵穴から出すとするなら強

制的に魔力を流せば発動するから錬成以外の方法で開けるのがベス

トだ。」

「……さすが本職。それじゃあ壁は?」

「俺が確認したところはないな。……さすがにそこあたりは俺よりも

そっちの方が詳しいだろ。」

と俺がそういえばハジメは苦笑している。

「なに、そんなに驚いているんだよ。俺が来ていることに気がついてたんだろ？ 気配は完全に遮断してたはずなんだが……ちよつと、自信無くすぞ」

「へっ？ 気づいて？ えっ？」

「いや、だって、俺の名前呼んだじゃないか。俺が窓の外にいるのを察知したんだろ？」

「俺がいうのはなんだけど多分不安だったんだろ？俺がハジメに助けを呼びにきた時間を含めさらわれてから数日立っているはずだ。愛子センセくつてこういった風に人の前では自分の感情を隠すタイプだろうし。……まあ一番頼れるのがハジメだったんだろうな。雫も俺の名前呼んでいたらしいし。」

「えっ？あつ。どうしてここに？」

「リリイに聞いた。一応下は香織と恵里、鈴がいるから大丈夫だと思うが。こつちもあつちもお互いに面倒なことばかりだからな。」

「でも、快斗と南雲くんが狙われて。」

俺は軽く雫の頭を叩く

「……アホ。そんなこと知っている。知っていて助けに来たんだよ。」

「……なんで。」

「ん？雫が攫われたっていうのに俺が動かないと思うか？」

雫がキョトンとしている。それに少し苦笑しつつ俺は雫にこう続いた

「何度だって助けに来るさ。お前が来てほしくなろうが関係ねえ。何度だって助けるし、ずっとお前の隣に居られる限りはお前の特別であり続ける。……ずっと一緒にな。」

「っ!!」

「だから時間かかった。悪い。すぐに助けにいきたくったけどそうすると俺が死ぬ可能性が高かった。……まあ助けに来たつてことで多目に見てくれると嬉しいけどな。」

俺は少しだけ苦々しく笑う。俺一人で行ったところでできることは限られている。だからこそハジメに助けに求めた

「……バカ。十分よ。」

「そっか。なら先に合流って言いたいけど……どうやら敵はそう簡単に逃してはくれないようだな。」

「えっ?」

「……なるほどいい気配の消し方だ。それでも師範に比べるとまだまだだ。ハジメ。雫をちよつと頼む。ちよつくら時間稼ぎしてくるから。」

「は?お、おい待て。」

俺は一人行動し自分の動きやすいところに向かう。そしてその元凶は俺の姿を見つけたのかこつちにやってくる。

「まさかそちらの方からやってくるとは思っていませんでした。」

鈴の鳴るような、しかし、冷たく感情を感じさせない声

代わりに白を基調としたドレス甲冑のようなものを纏っていた。ノースリーブの膝下まであるワンピースのドレスに、腕と足、そして頭に金属製の防具を身に付け、腰から両サイドに金属プレートを吊るしている銀髪の女性

「なるほど。あんたが神々の人形ってわけか。」

俺もハジメに聞いていたのでなんとも思わなかったが。

すると、ガントレットが一瞬輝き、次の瞬間には、その両手に白い鍔なしの大剣が握られていた。銀色の魔力光を纏った二メートル近い大剣を、重さを感じさずに振り払った銀色の女は、感情を感じさせない声音で俺に告げる。?

「ノイントと申します。 “神の使徒” として、主の盤上より不要な駒を排除します」

「……へえくやれるようならやってみな。」

それは宣戦布告だ。ノイントと名乗った女は、神が送り出した本当の意味での “神の使徒” なのだろう。ノイントから噴き出した銀色の魔力が周囲の空間を軋ませる。大瀑布の水圧を受けたかのような絶大なプレッシャーが押し寄せるが俺はそのプレッシャーに押しされるつもりはなかった。堂々と宣戦布告を受けるとその瞬間俺はすぐさま後ろに飛んだ。

物が粉碎される轟音などなく、莫大な熱量により消失したわけでも

なく、ただ砕けて粒子を撒き散らす。分解だろうか？

一度当たったら死ぬなこれ。

少し冷や汗を垂らしながら目標を見る。

そして俺にとって、そして世界の運命を決める戦いが今始まった